

オウィディウス『名高き女たちの手紙』におけるギリシア神話の諸相

西井 奨

オウィディウス『名高き女たちの手紙』におけるギリシア神話の諸相

目次

序論	1
第1章	
第4歌「パイドラーからヒッポリュトスへの手紙」で描かれるパイドラーの手紙	13
第2章	
第9歌「デーイアネイラからヘーラクレースへの手紙」で描かれるデーイアネイラの手紙	31
第3章	
第12歌「メーデイアからイアーソーンへの手紙」で描かれるメーデイアの手紙	47
第4章	
第13歌「ラーオダメイアからプローテシラーオスへ手紙」で描かれるラーオダメイアの手紙	63
結論	77
補遺	
『名高き女たちの手紙』第4, 9, 12, 13歌 解題・ラテン語日本語対訳・訳注	79
引用文献一覧	149

序論

1. 『名高き女たちの手紙』について

古代ローマから今日に至るギリシア神話の受容において、オウィディウスが果たした役割は極めて大きく、オウィディウスが描くギリシア神話について研究を進めることが西洋文化の根源から理解することへの一つの手掛かりとなる。

オウィディウスの作品中でもとりわけ、ギリシア神話の主要な原典の一つとみなされて参照され続けて、様々な文学・芸術作品に影響を与えてきたのが『変身物語』である。このため、オウィディウスが描くギリシア神話理解の上で『変身物語』を欠くことはできない。その一方で、『変身物語』以前にオウィディウスが手がけた、いわゆる初期作品に分類されるものも、重要性は決して低くない。初期作品をより良く理解することはそのまま、『変身物語』のより良い理解にも結び付くからである。そのようなオウィディウスの初期作品において、『変身物語』と同様にギリシア神話を題材とした作品が、『名高き女たちの手紙』である。

『名高き女たちの手紙』は、ギリシア神話のある物語中で登場人物が書いた書簡という形式の作品である。これは、女性の登場人物を書き手とする単独書簡形式 15 編と、女性と男性の登場人物の往復書簡形式 6 編 3 組からなる。これらは『恋の歌』『恋の技法』などのオウィディウスの他の初期作品と同様、エレゲイアの詩形で作られている。

この『名高き女たちの手紙』の主要な要素として挙げられるのは、[1]エレゲイア詩であること、[2]書簡形式であること、[3]神話を題材とした作品であること、である。[1]エレゲイア詩であることは、ガッルスやティブッルスやプロペルティウス、またオウィディウス自身も『恋の歌』で手がけた、一人称の語りでの恋愛エレゲイア詩というローマで発展したジャンルと関連を密にする。このような恋愛エレゲイア詩では、男性視点で恋の苦しみは歌われるのに対し、『名高き女たちの手紙』では逆に女性の視点で恋の苦しみが続られることになる。このような作品の特徴性についてはオウィディウス自身も認識しており、オウィディウスは『恋の歌』と『名高き女たちの手紙』について、プロペルティウス・ガッルス・ティブッルスといった恋愛エレゲイア詩（およびウァッロー（Varro Atacinus）の『アルゴナウティカ』とウェルギリウス『アエネーイス』といった叙事詩）に連なるもの¹として、『恋の技法』3. 329-348 において言及している。以下に特にその自作への言及箇所を引用する。

forsitan et nostrum nomen miscebitur istis

¹ Cf. Ovid. *Tristia* 4.10. 53-54: successor fuit hic (sc. Tibullus) tibi, Galle, Propertius illi; / quartus ab his serie temporis ipse fui., Ovid. *Tristia*. 5.1.17-19: aptior huic Gallus blandique Propertius oris, / aptior, ingenium come, Tibullus erit. / atque utinam numero non nos essemus in isto!

おそらく私の名前も彼らと一緒にされるだろうし、私の作品はレーターの水に投げられないだろう。またある人はこう言うだろう。「私たちの師の洗練された作品を読みなさい。この詩により師は男女両方に教えを授けたのだ。あるいは『恋の歌』という題が示す 3 巻の中から、慣れた声で柔らかに読めるものを選びなさい。あるいは『手紙』を整った声で朗唱しなさい。師は他の人に知られていなかったこの作品を、新しくしたのだ。」

そしてここでの、ignotum hoc aliis ille novavit opus (346)「師は他の人に知られていなかったこの作品を、新しくしたのだ」という表現と関連してくるのが、[2]書簡形式であること、という特徴である。韻文による書簡は、ヘクサメトロスの韻律で既にホラーティウスが『書簡詩』で実践していたが、これはあくまで詩人自身が記したという形のものである。一方、韻文、とりわけエレゲイアを用いた架空の人物による書簡は、プロペルティウス『詩集』の第4巻第3歌の「アレトゥーサからリュコータースへの手紙」を嚆矢とする。ただ、プロペルティウスの場合、架空ではあってもローマの現実を模した設定であるの対し、オウィディウスは、『名高き女たちの手紙』によって「神話上の女性を書き手とする書簡詩集」を著した。この点においてオウィディウスは新たなジャンルを創り上げたといえる³。

³ なおこの 346 の *ignotum hoc aliis ille novavit opus* という表現は、曖昧な表現としてしばしば議論の対象となっている。cf. Jacobson, H., *Ovid's Heroides*. Princeton 1974., 319-322, Knox, P.

そしてこの[2]書簡形式であること、が、[3]神話を題材とした作品であること、と関連して、作品としての独自性を高める要素となっている。これについては、オウィディウス『恋の歌』2. 18 での『名高き女たちの手紙』についての言及が注目に値する。以下に引用する。

quod licet, aut artes teneri profiteamur Amoris

—ei mihi, praeceptis urgeor ipse meis!— 20

aut, quod Penelopes verbis reddatur Vlix,

scribimus et lacrimas, Phylli relictas, tuas,

quod Paris et Macareus et quod male gratus Iason

Hippolytique parens Hippolytusque legant,

quodque tenens strictum Dido miserabilis ense 25

dicat et Aeolio Lesbis amata viro.

quam cito de toto rediit meus orbe Sabinus

scriptaque diversis rettulit ille locis!

candida Penelope signum cognovit Vlix,

legit ab Hippolyto scripta noverca suo; 30

iam pius Aeneas miserae rescripsit Elissae,

quodque legat Phyllis, si modo vivit, adest;

tristis ad Hypsipylum ab Iasone littera venit,

dat votam Phoebo Lesbis amata lyram.

(Ovid. *Amores* 2. 18. 19-34)

許されていることとして、私は柔らかいアモルの技を教授したり——ああ、私自身が私の教えに苦しめられるとは——、ペーネロペーの言葉でオデュッセウスに渡されるようなものを書いたりする。また、見捨てられたピュッリスよ、お前の涙を私は書き、パリスとマカレウスと、恩知らずのイアーソーと、ヒッポリュトスとヒッポリュトスの父が読むようなものを書き、抜き身の剣持つ憐れなディードーが言うようなことと、アイオリアの男に愛されたレスボスの女が言うようなことを書く。何と早く私のサビーヌスは世界中から戻って来、方々から返信を自身で届けたことか。白く輝くペーネロペーは、オデュッセウスの印を認めた。継母は、彼女のヒッポリュトスによって書かれたものを読んだ。敬虔なアエネアースは憐れなエリッサにちょうど返事を書いた。もしピュッリスが生きていれば、彼女に読まれるものもここにある。イアーソーから悲しい便りがヒュブシピュレーのもとに着いた。レスボスの女は愛されて、誓いを立てたリュラをポエブスに捧げた。

E., *Ovid Heroides: select epistles*. Cambridge 1995, 14-18、Kenney, E. J., *Ovid Heroides: XVI-XXI*. Cambridge 1996, 1, n. 3、Gibson, R. K., *Ovid, Ars Amatoria Book 3*. Cambridge 2003, 239. 今日では通例、「オウィディウスは「神話の登場人物による書簡集」という「新たなジャンルの作品を創った」と解釈されている。しかし私見としては、次のような解釈ができるのではないかと考えている。

ここでは、まず 21-26 において、第 1 歌「ペーネロペーからオデュッセウスへの手紙」・第 2 歌「ピュッリスからデーモポーンへの手紙」・第 5 歌「オイノーネーからパリスへの手紙」・第 11 歌「カナケーからマカレウスへの手紙」・第 6 歌「ヒュプシピュレーからイアーソーンへの手紙」／第 12 歌「メーデイアからイアーソーンへの手紙」・第 4 歌「パイドラーからヒッポリュトスへの手紙」・第 10 歌「アリアドネーからテーセウスへの手紙」・第 7 歌「ディードーからアエネーアースへの手紙」・第 15 歌「サッポーからパオーンへの手紙」について言及している。そして 27-34 では、オウィディウスの友人サビーヌスがこれらの「返信」を創ったことについて述べている。ここでとりわけ、*quam cito de toto rediit meus orbe Sabinus / scriptaque diversis rettulit ille locis!* (27-28)「何と早く私のサビーヌスは世界中から戻って来、方々から返信を自身で届けたことか。」という表現や、*quodque legat Phyllis, si modo vivit, adest;* (32)「もしピュッリスが生きていれば、彼女に読まれるものもここにある」という表現には、神話上の人物が書いた書簡が実際に目の前にあるかのようなユーモラスさを感じさせるものである⁴。もちろん実際には友人サビーヌスがそれぞれの書き手に相応しい手紙を創作したということなのは明白だが、ここであえてオウィディウスはサビーヌスを手紙の配達人⁵のように表現しているところに着目したい。『名高き女たちの手紙』は、『イーリアス』や『オデュッセイア』や『アルゴナウティカ』や『アエネーイス』といった叙事詩作品や、『ヒッポリュトス』や『メーデイア』といった悲劇作品といった、神話を題材とする作品の代表的な先行作品を踏まえた上で創られたものであるが、ここでサビーヌスはあくまで配達人であり手紙はその先行作品で描かれる神話上の登場人物が書いたという体を示すことで、『名高き女たちの手紙』の読者に虚構と現実の境目を曖昧にするような枠組みを提示することができる。もちろんここでそのように曖昧にされているのはサビーヌスによる「返信」であるが、それにより先に *scribimus* (22)「私は書く」と述べていた『名高き女たちの手紙』も、そのような枠組みの下で読むことができることを示唆している。このように神話上の登場人物による書簡という形式は、そこで伝えられる神話をよりリアリスティックに感じさせる手段となっているのである⁶。

⁴ これと関連して、古典古代における書簡形式の作品（作中で言及される書簡も含む）が読者に何らかの真実味を感じさせる効果については、Jenkins, T. E., *Intercepted Letters. Epistolarity and Narrative in Greek and Roman Literature*. Lanham 2006. が示唆に富む指摘を数多くしている。

⁵ Mckeown, J. C., *Ovid: Amores. Text, prolegomena and commentary. Vol. II: A commentary on Book One*. Leeds 1989, ad loc.

⁶ 神話上の登場人物の書簡という体裁の場合、それが創作であることはすぐに分かるが、「歴史上の人物による書簡」の場合、それが本当にその人物による書簡か、後世の偽作の書簡かが問題になることがある。「歴史上の人物による書簡」の場合にこのような問題が生じることを考慮に入れるなら、神話上の登場人物の書簡にも、「その人物の「真作」たる書簡があり得るかもしれない」という想像を働かせる要素があるように思われる。そしてそのような想像を働かせる余地を生み出させることが、作品をよりリアリスティックに感じさせる要素になっていると思われる。

さらに、[2]と[3]の特徴に関連するものとして付け加えられるのが、*declamatio*「模擬弁論」の要素である。オウィディウスが当時の例に倣い弁論術・修辞学教育を受けていたのは確かであり⁷、『名高き女たちの手紙』は特にその *declamatio*「模擬弁論」のうちの *suasoria* の要素が色濃く出ている。*suasoria* とは、模擬弁論 (*declamatio*) において、神話や歴史上の出来事を仮想的に題材にし、その神話上や歴史上の特定の人物を、特定の状況で、説得してある行動を選択させたり思いとどまらせたりする、という訓練である。*declamatio* はこの *suasoria* と、架空の裁判を設定してある人物を告訴したり弁護したりする訓練をする *controversia* に分類できるが、オウィディウスはとりわけ *suasoria* の方を好んでいたことを、以下のように大セネカが証言している。

declamabat autem Naso raro controversias et non nisi ethicas. libentius dicebat suasorias. molesta illi erat omnis argumentatio. (Seneca Major *Controversiae* 2.2.12)

しかしオウィディウスはほとんど *controversia* を模擬弁論ですることはなかったし、するとしても *ethos* に関わる *controversia* だけであった。喜んで *suasoria* を弁じていた。彼にとっては、論証は全て煩わしかったのだ。

『名高き女たちの手紙』は、宛名人の相手に何らかの要求・説得をするという内容が多くを占めており、それは *suasoria* の要素が色濃く現れているといえるものである。これには、このようなオウィディウスの好みが反映されている。またこの *suasoria* には、神話上や歴史上の特定の人物を、特定の状況で、説得してある行動を選択させたり思いとどまらせたりする際に、自分自身もその神話上や歴史上の人物になりきって弁論をするというものもあった⁸。この点からも、「神話上に登場する女性による説得」という、『名高き女たちの手紙』の特色と合致するものとなっているのである。またこのような「登場人物になりきる」ということには、*declamatio* の前段階である *progymnasmata*「予備訓練」における *ethopoeia* (*prosopopoeia*)という訓練項目が関連してくる。*ethopoeia* (*prosopopoeia*)とは、神話上や歴史上の既知の人物や、あるいは無生物を擬人化したものに、自らになりきって、特定の状況でその人物が語りそうなことを自らの口で語る、という訓練である⁹。上述の「なりきって

⁷ Cf. Ovid. *Tristia* 4. 10. 15-18: *protinus excolimur teneri, curaue parentis / imus ad insignes Urbis ab arte viros. / frater ad eloquium viridi tendebat ab aevo, / fortia verbosi natus ad arma fori;*

⁸ cf. Quint. *I. O.* 3. 8. 49: *ideoque longe mihi difficillimae videntur prosopopoeiae, in quibus ad relicum suasoriae laborem accedit etiam personae difficultas: namque idem illud aliter Caesar, aliter Cicero, aliter Cato suadere debet. utilissima vero haec exercitatio, vel quod duplicis est operis vel quod poetis quoque aut historiarum futuris scriptoribus plurimum confert: verum et oratoribus necessaria.* Quint. *I. O.* 3. 8. 53: *neque ignoro plerumque exercitationis gratia poni et poeticas et historicas, ut Priami verba apud Achillem aut sullae dictaturam deponentis in contione.*

⁹ とりわけ、*ethopoeia* の定義については Russel の、“‘representation of character’, esp. the composition of ‘the words that X might speak’ (οὗς ἂν εἶποι λόγους) in a given situation:”という定義が分かりやすい (Russel, D. A., *Greek Declamation*. Cambridge 1983, 138.). また *ethopoeia* と *prosopopoeia* という語については、この言葉を用いている古代ギリシア・ローマの作家間

弁論をする」*suasoria*には、このような *ethopoeia* (*prosopopoeia*)が要素として含まれている。さらに *controversia* にもそのような「特定の人物になりきること」が導入されることもあった¹⁰。このことを踏まえると、上述の大セネカの証言における「*ethos* に関わる *controversia*」も、そのような *ethopoeia* が導入された *controversia* ということであり、オウィディウスは *controversia* においても「特定の人物になりきること」を好んでいたのだと解釈できるだろう。

また *ethopoeia* には、「手紙を書くこと」も含まれていたことが *progymnasmata* 文献から窺える¹¹。このことから『名高き女たちの手紙』は、*declamatio* として *suasoria* の要素を色濃く含むと共に、そしてまた *declamatio* の前段階の *progymnasmata* における、*ethopoeia* (*prosopopoeia*)の要素を色濃く有しているのである。

このような『名高き女たちの手紙』における[3]神話を題材とした作品であること、と *ethopoeia* (*prosopopoeia*)の要素は、そのまま後の『変身物語』における「女性の登場人物によるモノローグ」にも引き継がれている。このうち『名高き女たちの手紙』での手紙の書き手とまさに同じ人物によるモノローグもある。たとえばデーイアネイラは『名高き女たちの手紙』第9歌で扱われると共に『変身物語』9. 143-151 も彼女によるモノローグであり、またメーディアは『名高き女たちの手紙』第12歌で扱われると共に『変身物語』7. 11-71 も彼女によるモノローグである。さらに、『名高き女たちの手紙』では「異国からの来訪者に援助しながらも最終的に見捨てられた女性」が手紙を書くという状況がいくつかある(第2歌のピュッリス、第6歌のヒュブシピュレー、第7歌のディードー、第10歌のアリアドネーなど)。このような状況は『変身物語』8. 108-142 での、メガラーに攻め寄せたミーノースに恋してメガラー王ニーソスを裏切り、ミーノースを援助したメガラー王女スキュッラが、ミーノースに見捨てられた際に彼に向かって嘆くという状況とまさに類似のものであり、ここにも『名高き女たちの手紙』との、テーマの指向性の類似が認められる。そして『名高き女たちの手紙』第4歌は、継子ヒッポリュトスに恋するというパイドラの、近親間で抱く恋心による手紙であるが、『変身物語』9. 530-563 での、ビュブリスが兄カウノスに宛てて書いた恋文は、まさにこれと同様の近親間の恋心による手紙であり、表現やモチーフ面でも『名高き女たちの手紙』第4歌との類似が数多く認められる。このように『名高き女たちの手紙』は、後の『変身物語』に連なる要素を数多く有している。

『名高き女たちの手紙』の主要な特徴は、以上のようなものである。

で定義の仕方に若干の違いがある。

¹⁰ Quint. *I. O.* 3. 8. 52: quae omnia possunt videri prosopopoeiae, quam ego suasoriis subieci quia nullo alio ab his quam persona distat: quamquam haec aliquando etiam in controversias ducitur quae ex historiis compositae certis agentium nominibus continentur.

¹¹ Theon *Progymnasmata* 10: ὑπὸ δὲ τοῦτο τὸ γένος τῆς γυμνασίας πίπτει ... τὸ τῶν ἐπιστολικῶν (εἶδος). また、cf. Nicolaus *Progymnasmata* 10.

2. 先行研究の動向

それでは次に、『名高き女たちの手紙』の研究動向について踏まえておきたい。まず押さえておかなければいけないのは、『名高き女たちの手紙』は、長い間、似たり寄ったりの状況における女性の不満の独白を集めた単調なものという評価がなされていたということである¹²。一方で近年では、そのような評価を見直す研究成果が多く発表されている。

まず、『名高き女たちの手紙』の基礎的な先行研究として挙げられるのが、H., Jacobson, *Ovid's Heroides*. Princeton 1974 である。これは、単独書簡 15 編について個々の書簡を、その先行作品との関連を指摘しながらランニングコメント的に論じたものである。これにより、『名高き女たちの手紙』個々の書簡の特徴が先行作品からの影響という側面からより明確なものとなった。現在も単独書簡研究に際しては欠かせない研究である。

そして特に近年顕著な傾向として挙げられるのが、『名高き女たちの手紙』の各歌と同じ神話伝承を題材とする先行作品との *intertextual* な観点を意識して作品を解釈するというものである。このような傾向の研究において重要な先行研究文献は、D. F. Kennedy, *The epistolary mode and the first of Ovid's Heroides*. *Classical Quarterly* 34 (1984), 413-422. と、A. Barchiesi, *Narratività e convenzione nelle Heroides*. *Materiali e Discussioni* 19 (1987), 63-90. (Id., *Speaking Volumes*. London 2001 に英訳が再録 (29-47)) である。これらの研究は、『名高き女たちの手紙』が、同じ神話物語を描いた先行作品（例えば、第 1 歌「ペーネロペーからオデュッセウスへの手紙」ではホメーロス『オデュッセイア』を先行作品とする）での表現・内容・展開を極めて巧みに取り込む形で作られていることを提示したものである。とりわけ Kennedy の研究は、第 1 歌「ペーネロペーからオデュッセウスへの手紙」(*Her.* 1) について次のようなことを指摘するものである。このペーネロペーの手紙は、トロイア戦争が終結し他のギリシア軍が故郷に戻る一方で、オデュッセウスの帰還だけが遅れている中、そのオデュッセウスに早く戻るよう促す内容のものである。この手紙には、息子テーレマコスが父オデュッセウスの消息を尋ねるためにピュロスのネストールやスパルタのメネラーオスを訪問し、そしてテーレマコスからその報告を受けたことが述べられているため (*Her.* 1. 37-38)、『オデュッセイア』17. 107-149 でテーレマコスがペーネロペーにそのような報告をした後の時点で書かれた手紙であることが分かる。この時点は、ペーネロペーの求婚者たちを誅殺するためにオデュッセウスがクレータからの客人を装い館に戻ってきているというものである。そして *Her.* 1 でペーネロペーは、自分のこの手紙を誰であれ来客に託す、ということを述べる (*Her.* 1. 59-62) ため、この手紙が渡されるのはまさに客人を装い館に戻ったオデュッセウス本人であるということである¹³。

¹² このような評価についてしばしば言及されるものとして、Wilkinson, L. P., *Ovid Recalled*. Cambridge, 1955, 106. またこのような評価の経緯は、Kennedy, D. F., *Epistolarity: the Heroides*. in *The Cambridge Companion to Ovid*, ed. P. Hardy, Cambridge, 2002, 217-232, 219-220 にまとめられている。

¹³ このような *Her.* 1 と『オデュッセイア』との *intertextual* な分析から明るみになった『名

この近年、『名高き女たちの手紙』各歌のコメンタリの出版数が増えているが、その多くはこういった *intertextual* な観点を意識したものとなっている。コメンタリの代表的なものとしては、P. E. Knox, *Ovid Heroides: select epistles*. Cambridge 1995 と E. J. Kenney, *Ovid Heroides: XVI-XXI*. Cambridge 1996 を挙げることができる¹⁴。

また、このような *intertextual* な観点を一步進めて、『名高き女たちの手紙』の手紙の書き手が「相互に『名高き女たちの手紙』中の他の書き手の手紙を読んでいる」とする上で作品の解釈を試みるものもある。その代表的なものが、L. Fulkerson, *The Ovidian Heroine as Author: Reading, Writing, and Community In The Heroides*. Cambridge 2005 である。しかしこのような試みは「手紙の書き手」に *metafiction* 的な立場を不必要にとらせるものであり、妥当な解釈に至っているとは言い難い。特に「手紙の書き手」に *metafiction* 的な叙述を認めることは、「手紙の書き手」が本来知っていようもないことを知っているとするものであることから、作者オウィディウスの視点と「手紙の書き手」の視点を不用意に混同してしまっているものであるといえる。確かにオウィディウスが、「手紙の書き手」にとって手紙執筆以降に起こる出来事を、暗示させる形で手紙中に盛り込んでいると考えられる表現もある。しかしそれは「手紙の書き手」としては意図せざるものであると解釈すべきであろう。もし、そのような表現を「手紙の書き手」の意図した表現だとするのなら、手紙の書き手は *metafiction* 的に自分の登場する物語展開を知った上でそのような叙述をしていることになる。しかしそう解釈することは『名高き女たちの手紙』という作品を「ギリシア神話中の特定の場面で、登場する人物が書いた手紙」という体裁の作品として鑑賞するのを妨げるものとなろう。手紙の書き手が知るはずのない手紙執筆以降に起こる出来事を暗示していると取ることのできる表現は、あくまで作者オウィディウスの視点からオウィディウスの意図するところとしてそのような出来事の暗示が含ませられているのであり、「手紙の書き手」の視点からそのような暗示の意図を解釈すべきではない。「オウィディウスの視点」と「手紙の書き手の視点」は厳密に峻別されるべきものである。このような視点の混同は、『名高き女たちの手紙』の各歌とその先行作品との *intertextual* な観点での解釈を行き過ぎた形で適用させたものだといえよう。こうした研究に対して、高橋宏幸「オウィディウス『ヘーローイデス』第 1、20、21 歌解釈試論」科学研究費補助金研究成果報告書『古典古代における書簡文学に関する研究』2007, 1-62 での以下の指摘が有益である。ここでは、第 1 歌「ペーネロペーからオデュッセウスへの手紙」におけるペーネロペーの人

高き女たちの手紙』の特徴を Barchiesi は“The poetics of the *Heroides* suggest, more simply, that new windows can be opened on stories already completed.”と評している (A. Barchiesi, *Speaking Volumes*. London 2001, 31.)

¹⁴ このうち、Knox のテキストとコメンタリは、単独書簡のうち第 15 歌「サッポーからパオンへの手紙」を除いて、作品が真作であるかどうか疑われたことのないものを取り扱っている (*Her.* 1, 2, 5, 6, 7, 10, 11)。本論文はこのうち Knox が取り扱っていない手紙を論じるが、これはそのような偽作の可能性をできるだけ排除することにも寄与するものである。

物造形が『オデュッセイア』と恋愛詩の常套のいずれをも踏まえながらそれらとは異なる形で賢明で貞淑な妻として描かれていることを示し、『名高き女たちの手紙』の個々の歌は、「それらがジャンルの常套や先行作品の展開に依存しながらも、あくまでそれぞれひとつの詩としての個性と完結性を保持しているという見地に立って解釈を進めるべき」(p. 18)であるとする。このように、『名高き女たちの手紙』研究においては、改めて個々のテキストを内在的に検討するという必要性が生まれてきているのである。

そうした点から、「手紙の書き手の人物造形」がどのようなものであるかということが、作品分析の一つの切り口となる¹⁵。このような方向性での先行研究としては、S. H. Lindheim, *Mail and Female. Epistolary Narrative and Desire in Ovid's Heroides*. Madison, 2003 を挙げることができる。これはジャック・ラカンのも精神分析理論を手紙の書き手の女性に適用するという方法を試みるものである。ここでは文献学的な研究手法も意識されてはいるものの、しかしこのような仮説先行型の研究手法は、解釈がその仮説に牽引されたものとなる傾向がある。

『名高き女たちの手紙』の研究動向としてはおおよそ以上のようなものである。

3. 本論文の視座

本論文も、先行研究の流れを踏まえ、『名高き女たちの手紙』中の個々の書簡をテキストに即して解釈して個々の書簡がどのような独自性を有しているのかを明らかにし、オウィディウスによるギリシア神話の扱い方をより良く理解する上での手掛かりとするものである。

本論文の出発点としてあるのは、第1歌「ペーネロペーからオデュッセウスへの手紙」(*Her.* 1)である。Kennedy, *art. cit.*や高橋宏幸、前掲論文により、*Her.* 1は、影響力ある先行作品たるホメロス『オデュッセイア』での表現・内容を極めて巧みに取り込んだものであり、またペーネロペーの人物造形は『オデュッセイア』を踏まえながらも独自のものとなっているということが明らかにされた。そのようにして *Her.* 1 の特質が明らかにされたのと同様の視点で、*Her.* 中の他の単独書簡においても検討を進めていく。

第1章で第4歌「パイドラーからヒポリュトスへの手紙」(*Her.* 4)を、第3章で第12歌「メーデイアからイアーソンへの手紙」(*Her.* 12)を取り上げる。この両書簡にとって、それぞれエウリーピデース『ヒポリュトス』と『メーデイア』が物語を同じくする先行作品としてある。その両作品のギリシア文学における著名度は高く、ホメロス『オデュ

¹⁵ cf. 高橋宏幸「文字、手紙、文学（シンポジウム 文字の力）」『西洋古典学研究』58 (2009), 102-110, 107-108:「(手紙の文体が人柄を表すという)側面が文学の創作という点で重要な意味をもつのは登場人物の人物造形においてであろうと思われる。人の性格については、正直か嘘つきかなど修飾語をいくら並べるよりも、その人物が特定の場面で特定の相手に対して発した言葉によって思考や感情の動きを示すことによるほうが具体的かつ自然に人物像を描きだせると考えられるからである。」

ッセイア』を先行作品とする *Her.* 1 と同様に、オウィディウスが先行作品との関連でいか
にして *Her.* を創り上げたのかを解明するのに *Her.* 4 と *Her.* 12 は格好の題材となっている。
そこで第 1 章では *Her.* 4 がいかにしてエウリーピデース『ヒッポリュトス』を取り込んで
いるのかを、第 3 章では *Her.* 12 がいかにしてエウリーピデース『メーデイア』を取り込ん
でいるのかを検討し、またそれぞれの書き手がどのようなものとして描かれているかとい
う側面から手紙の特質の検討をする。

また第 2 章で第 9 歌「デーイアネイラからヘーラクレースへの手紙」(*Her.* 9) を、第 4
章で第 13 歌「ラーオダメイアからプローテシラーオスへの手紙」を取り上げる。この *Her.*
9 と *Her.* 13 の両書簡と *Her.* 1 は、単独書簡 15 篇中のうちで「妻が夫に送った手紙」に分類
することができる。その点から、*Her.* 1 のペーネロペーの人物造形が独自のものであると解
明されたのということに続いて、同様に人物造形の観点から検討を進めていくのは、明ら
かになった *Her.* 1 と似た状況にある書簡から取り掛かるのが都合がよいと思われる。そこで
第 2 章では *Her.* 9 におけるデーイアネイラがどのようなものとして描かれているかを、第 4
章では *Her.* 13 におけるラーオダメイアがどのようなものとして描かれているかという側面
から手紙の特質の検討を進める。

なお、本博士論文における各章は、執筆者の以下の既発表論文を大幅に加筆修正したも
のであり、とりわけ第 1 章・第 3 章は既発表論文の内容を全面的に修正している。

第 1 章

第 4 歌「パイドラーからヒッポリュトスへの手紙」で描かれるパイドラーの手紙

西井奨「貞淑・誘惑・懇願 ——錯綜するパイドラー ——オウィディウス『名高き女たち
の手紙』第 4 歌」『文芸学研究』13 (2009), 45-66.

第 2 章

第 9 歌「デーイアネイラからヘーラクレースへの手紙」で描かれるデーイアネイラの手紙

西井奨「オウィディウス『名高き女たちの手紙』第 9 歌におけるデーイアネイラ ——ヘー
ラクレースの「名誉」と「不名誉」」2012 年度大阪大学大学院文学研究科共同研究成果報
告書『ギリシア・ローマ神話のアレゴリー ——その表現・解釈・理論に関する研究』2013,
63-74.

第3章

第12歌「メーデイアからイアーソーンへの手紙」で描かれるメーデイアの手紙

西井奨「恋と復讐の二つの炎 ——オウィディウス『名高き女たちの手紙』第12歌におけるメーデイア」2010年度 大阪大学大学院文学研究科共同研究 成果報告書『神話表象の芸術化過程のメカニズムに関する研究 ——ギリシア神話に即して』2011, 23-30.

第4章

第13歌「ラーオダメイアからプローテシラーオスへの手紙」で描かれるラーオダメイアの手紙

西井奨「オウィディウス『名高き女たちの手紙』第13歌におけるラーオダメイア」『西洋古典学研究』59 (2011), 72-83.

第1章

第4歌「パイドラからヒッポリュトスへの手紙」で描かれるパイドラの手紙

1. 第4歌「パイドラからヒッポリュトスへの手紙」の問題と本章の視座

『名高き女たちの手紙』第4歌（以下、*Her.* 4）は、アテーナイ王テーセウスの妻パイドラが、継子ヒッポリュトスに宛てた手紙という形の作品であり、エレゲイア詩形で全176行からなる。この作品の背景となる物語は、以下のようなものとして知られる¹。

クレータ王ミーノースの娘でありアリアドネーの妹であったパイドラは、アテーナイ王テーセウスに嫁ぎ、二子を儲ける。一方、テーセウスにはアマゾン族の亡き先妻との間にできた子がおり、それがヒッポリュトスである。彼はパイドラにとっては継子にあたる。そのヒッポリュトスにパイドラはある日激しい恋心を抱くことになる。そのような折、テーセウスが不在となり、パイドラはヒッポリュトスに己の恋心を告げることにする。一方ヒッポリュトスはアルテミス（＝ディアーナ）を崇拝し純潔を誓っていたため、パイドラを拒絶する。拒絶されたパイドラは自分の立場を守るため、また自分を拒絶した彼への報復として、帰還したテーセウスに「ヒッポリュトスに襲われた」と偽りの訴えをなす。これを信じたテーセウスは、ポセイドーン（＝ネプトゥーヌス）にヒッポリュトスを亡き者にしよう願いをかけ、彼を追放する。そして追放されたヒッポリュトスは、馬車で海岸沿いを走っている際に、突然海から現れた牡牛の怪物に遭遇し、そしてそれに驚き暴走した馬に引き摺られ死に至る。またその後パイドラも自ら命を断つ。

この物語はとりわけエウリーピデース『ヒッポリュトス』（以下、*Eur. Hip.*）により名高いものとなっている²。*Eur. Hip.*では、物語が展開される舞台はトロイゼーンとなっており³、パイドラの乳母が彼女の恋心を勝手にヒッポリュトスに告げるものとなっている。また

¹ 以下に示す *Her.* 4 の背景は、アポロドーロス『ギリシア神話』E. 1. 16-19・エウリーピデース『ヒッポリュトス』・オウィディウス『変身物語』15. 492-546 等の叙述から再構成したものである。なお、さらなる背景の詳細については、本論文末に補遺として掲載している *Her.* 4 の解題を参照されたい。

² エウリーピデースは現存する『ヒッポリュトス』（『花冠を捧げるヒッポリュトス』）の前にもう一作パイドラとヒッポリュトスを扱った悲劇を作ったことが知られている（『顔を覆うヒッポリュトス』）。またソポクレスにも『パイドラ』という作品があった（現存しない。なお、これらの散逸した作品については Barrett, W. S., *Euripides Hippolytos*. Oxford 1964, 1-45 参照）。*Her.* 4 はこれらのいずれか一方だけの影響下にあるのではなく、三作品の影響下で創られたと指摘されている（Jacobson, H., *Ovid's Heroides*. Princeton 1974, 142-58）。ただしこれら三作品の中で『ヒッポリュトス』が唯一完全な形で現存する作品である以上、本章での考察はこれとの関連を中心としたものとする。

³ この背景には、テーセウスがアテーナイで叔父パラースの子供たちを王権争いのため殺してしまったということがある。その親族殺しの罪の汚れを清めるためにテーセウスはアテーナイを離れなければならない、彼は妻パイドラを伴い一時的にトロイゼーンに移住していた。

パイドラーは、「ヒッポリュトスに襲われた」という偽りの遺書を手にして自害することになる。

一方 *Her.* 4 は、パイドラーとヒッポリュトスが一つ屋根の下に暮らすようになり、またテーセウスが不在となった時に彼女が書いた手紙である。その手紙の内容は、ヒッポリュトスに自分が恋しているということを伝え、自分とヒッポリュトスが男女関係を結ぶことの正当性と有用性を主張し、ヒッポリュトスに自分の想いを受け入れてもらうよう嘆願する、というものとなっている。

この手紙の内容には、*Her.* 中の他の 14 編の単独書簡と比べて大きく異なる特徴が一つある。それは、パイドラーとヒッポリュトスの間柄が既に恋人関係にあったというわけでもなく、既に婚約関係にあるというわけでもなく、既に夫婦関係にあるわけでもないために、パイドラーがヒッポリュトスに送る手紙の内容は、初めて男女関係を結ぼうと申し寄るものになっているということである。*Her.* 4 以外の他の 14 篇の単独書簡は、いずれも既に恋人関係・婚約関係・夫婦関係にあるもしくはあった間柄による手紙に分類されるため⁴、*Her.* 4 のこのような特徴は、その独自性を把握する上でとりわけ押さえておくべきものであると思われる。

そしてパイドラーとヒッポリュトスの場合、パイドラーがヒッポリュトスに初めて男女関係を結ぼうと申し寄るとするなら、パイドラーにはその想いを遂げる上で二つの困難があるといえる。第一に、パイドラーがテーセウスの妻であることから、パイドラーはヒッポリュトスに自分と不倫の関係を迫ることになるということである。第二に、ヒッポリュトスはディアーナを崇拝してウェヌスを軽侮しており⁵、男女関係を結ぶということに嫌悪感を抱いている、ということである。パイドラーがこの二つの困難を乗り越えてヒッポリュトスに自分の恋心を受け入れさせようとするのなら、彼女が書く手紙には相当の「説得力」が必要になると想定できる。そして説得力に際し力を発揮するのが「弁論術」である。とすると、パイドラーがヒッポリュトスを説得する手紙を書くとするならば、意図的に弁論

⁴ *Her.* 単独書簡の多くは①「自分を捨てた恋人・夫に宛てた手紙」であり、*Her.* 2「ピュリスからデーモポーンへの手紙」・*Her.* 5「オイノーネーからパリスへの手紙」・*Her.* 6「ヒュプシピュレーからイアーソーンへの手紙」・*Her.* 7「ディードーからアエネーアースへの手紙」・*Her.* 10「アリアドネーからテーセウスへの手紙」・*Her.* 12「メーディアからイアーソーンへの手紙」・*Her.* 15「サッポーからパオーンへの手紙」がこのような手紙となっている。また②「婚約者もしくは離れ離れとなった恋人への手紙」があり、これは *Her.* 3「ブリセイスからアキレウスへの手紙」・*Her.* 8「ヘルミオネーからオレステースへの手紙」・*Her.* 11「カナケーからマカレウスへの手紙」・*Her.* 14「ヒュペルメストラからリュンケウスへの手紙」がそうである。さらに③「妻が夫に宛てた手紙」があり、*Her.* 1「ペーネロペーからオデュッセウスへの手紙」・*Her.* 9「デーイアネイラからヘーラクレースへの手紙」・*Her.* 13「ラーオダメイアからプローテシラーオスへの手紙」がそうである。これら①～③のパターンのいずれも、既にできあがっている何らかの男女の関係性に基づいて、手紙の書き手は宛名人に何かを要求するという形のものになっている。*Her.* 4 のみがこれらのいずれのパターンにもあてはまらない。

⁵ cf. Eur. *Hip.* 58-113.

術の手法が用いられているのではないかという想定が成り立つ。本論文序章でも指摘したように⁶、*Her.*は *declamatio*、とりわけ *suasoria* との関連が深い作品である。そして *Her. 4* は、上述のような理由から、他の単独書簡 14 篇よりも一層意識して弁論術の手法が用いられていると思われるのである。にもかかわらず、先行研究においては、*Her.*が *declamatio* と関連深い作品であること自体はこれまで指摘されながらも⁷、実際に各手紙の構成を弁論術の原則から詳細に検討したものはこれまでなかった⁸。それゆえ、*Her.*の単独書簡 15 篇中で特に弁論術の手法が意識して用いられていると思われる *Her. 4* の構成を、弁論術の原則から把握し直すことは、*Her.*全体および *Her. 4* のより良い理解のために必要であると思われる。そこで本章では第一に、*Her. 4* が如何に弁論術の原則に沿った構成になっているかということ、オウィディウスと概ね共通の弁論術のバックグラウンドを持つと考えられるキケローを中心とした古代ローマの弁論術関連のテキストと照らし合わせる形で示す。

またさらに *Her. 4* の大きな特徴の一つとして、背景となる物語上でもなされていることを手紙という形で再現している、ということも挙げることができる⁹。*Eur. Hip.*では乳母がパイドラーに代わってヒッポリュトスに彼女の気持ちを伝えている (575ff.)。またアポドロスの伝承 (E. 1. 16-19) やセネカ『パエドラ』589ff.にもあるように、パイドラー本人がヒッポリュトスに恋心を告白しているものもある¹⁰。このように、「パイドラーのヒッポリュトスへの恋心を、ヒッポリュトスに伝える」ということは、物語展開上必要不可欠のものであり、*Her. 4* ではそれを手紙という形でしているのである。そして *Her. 4* の読者は、その物語展開を先行文学作品で既に知っているため、*Her. 4* はその手紙自体が後続する物語展開を読者に強く想起させるものとなっている。その後続する物語展開とはすなわち、ヒッポリュトスによるパイドラーの拒絶と、パイドラーのテーセウスへの讒言、そしてヒッポリュトスとパイドラー両者の死である。*Her. 4* のこのような特徴のため、先行研究においては「*Her. 4* の手紙中の表現が如何に後の両者の破滅を暗示しているか」という観点からの考察が主流なものとなっている¹¹。たとえば、手紙冒頭の *perlege, quodcumque est: quid epistula*

⁶ 本論文序章, 4-6。

⁷ cf. Knox, P. E., *Ovid: Heroides. Select Epistles*. Cambridge 1995, 14-18.

⁸ ただし、*Her. 4* に関しては、このような研究として Giomini, R., *Anocora sulla struttura retorica nelle Heroides ovidiane: l'epistola di Fedra a Ippolito*. *Cultura e lingue classiche* 3 (1993), 347-358. がある。この文献については本章執筆後に知ったので筆者の調査不足ではあるのだが、本章における *Her. 4* の弁論術の視点からの分析は、Giomini, *art. cit.*と若干重複する点がありながらも、独自の指摘ができているものである。

⁹ この特徴については、他の単独書簡 14 篇においても多かれ少なかれあるものだが、いずれの単独書簡においても、背景となる物語展開上必要不可欠な内容を手紙として再現しているというわけではない。これに対して *Her. 4* の内容は、後述するように、パイドラーとヒッポリュトスの物語展開において必要不可欠なものとなっている。

¹⁰ なお散逸したエウリーピデースの第一作の『顔を覆うヒッポリュトス』やソポクレースの『パイドラー』も、このように直接パイドラーが告白するものであったと考えられる (cf. Barrett, *op. cit.*, 1-45)。

¹¹ Jacobson, H., *op. cit.*, 142-58、Pearson, C. S., *Simile and imagery in Ovid Heroides 4 and 5*. *ICS* 5

lecta nocebit? (3)「内容全てを読み通してください。手紙を読むことがどんな害を与えるでしょう。」という表現は、Eur. *Hip.* 856ff.で、パイドラがテーセウスに宛てて讒訴の手紙（δέλτος）を書いて自殺し、それによりヒッポリュトスが破滅に至ることをアイロニカルに暗示していることが指摘されている¹²。本章でここから更に一步進めて考察したいのは、先述した *Her.* 4 に深く内在すると思われる弁論術の要素が、*Her.* 4 の背景となる物語展開とどのように結び付いているのか、ということである。*Her.* 4 の読者は背景となる物語展開を知っていることから、読者は *Her.* 4 を読んで「このパイドラの手紙によってヒッポリュトスを説得しようとすることは失敗に終わる」ということを想定することになる¹³。とすると、*Her.* 4 において、弁論術の手法を用いて「ヒッポリュトスを説得する」ための工夫が凝らされていれば凝らされているほど、「それほど説得の工夫が凝らされていても結局パイドラはヒッポリュトスに拒絶されることになる」というアイロニーが生じることになる¹⁴。*Her.* 4 の手紙の内容がヒッポリュトスに自分と男女関係を結ぼうと申し寄るものであり、なおかつ背景となる物語展開にパイドラとヒッポリュトスが関係を持ったというような異伝は存在しない以上、その手紙がどれほど説得力を有したものであったとしても、その手紙をヒッポリュトスが拒絶するのが物語展開上必然なのである。そしてそのようなヒッポリュトスの拒絶の様子は、*Her.* 4 の先行作品であり現存する Eur. *Hip.* から知ることができる。ここでは特に、パイドラの気持ちを乳母がヒッポリュトスに告白して、それをヒッポリュ

(1980), 110-29、Davis, P. J., *Rewriting Euripides: Ovid, Heroides 4. Scholia 4* (1995), 41-55、Casali, S., *Strategies of tension (Ovid, Heroides 4). PCPhS 41* (1995), 1-15. また Nanni, F., *P. Ovidii Nasonis Heroidum epistula IV, Phaedra Hippolyto, testo, traduzione e commento*. Ph. D. Diss. Univ. of Parma 2008 は浩瀚なコメンタリであるが、これも概ねそのような観点からのコメントが付されている。

¹² Jacobson, *op. cit.*, 145-6、Davis, *art. cit.*, 41、Casali, *art. cit.*, 1-2, 5、Barchiesi, A., *Future Reflexive: Two Modes of Allusion and the Heroides*. in *Speaking Volumes. Narrative and intertext in Ovid and other Latin poets*. 2001 London, 105-27 (=HSCPh 95 (1993), 333-65), esp.108. また *Her.* 4. 97-100 でのアドーニスやメレアグロスへの言及や、*Her.* 4. 105-108 でのトロイゼーンについての言及も、ヒッポリュトスの死を想起させるものであるとしてこれらの先行研究では指摘されている。

¹³ なお古代の美術作品において、乳母がパイドラから預かった手紙をヒッポリュトスに渡し、ヒッポリュトスがそれを投げ捨てるなどして拒絶する場面を描いたものが残存している。cf. Reinach, S., *Répertoire de peintures grecques et romaines*. Editions Ernest Leroux 1922., 209., *Lexicon Iconographicum Mythologiae Classicae*. vol.5.2. Zürich 1990, 319. これらの美術作品によって、散逸した悲劇作品にもこのような場面があったといえるのか、ということについては意見が分かれているが (cf. Jacobson, *op. cit.*, 146, n.11., Barrett, *op. cit.*, 37, n.2., Sommerstein, A. H., F. David and T. Talbot, *Sophocles: selected fragmentary plays with introductions, translations and commentaries*. Oxford 2006, 278, n.107)、少なくともこのような美術作品からも、*Her.* 4 というパイドラの手紙に、物語展開上続くことになるヒッポリュトスの拒絶を想定することができたと思われる。

¹⁴ そもそも *Her.* 単独書簡全般が「功を奏しない手紙」というアイロニカルな特徴を有するが、*Her.* 4 の場合は、その内容が物語展開上必要不可欠なものであり、なおかつその物語展開を読者が既に知っていることから、そのアイロニーの性質は他の *Her.* 単独書簡と比べて印象的なものであると思われる。

トスが拒絶するという一節である Eur. Hip. 565-669 がそうである。Her. 4 をヒッポリュトスが読むとするならばその際の拒絶の様子はこの Eur. Hip. 565-669 から想定することができる。とすると、上述のようなアイロニーは、Her. 4 が Eur. Hip. 565-669 での表現を巧みに取り込むことで成し遂げられているのではないかという仮説が成り立つ。Her. 4 がヒッポリュトスを説得しようとするものとして弁論術的な側面を強く意識した構成・内容になっているとするならば、そのような構成・内容に、Eur. Hip. 565-669 の表現・内容が結び付けられて、上述のアイロニーが生じるようになっていられるのである。そこで本章では第二に、第一に示した「Her. 4 が如何に弁論術の原則に沿った構成になっているか」ということを踏まえて、Her. 4 を Eur. Hip. での表現・内容との比較から背景となる物語展開との関連について検討し、Her. 4 がその構成・内容にどのように後続する物語展開を取り込んでいるかを明らかにする。

2. Her. 4 の構成と内容における弁論術的特質

2. 1. 弁論の分類と Her. 4

古典弁論術では、弁論の種類 (genus) は大きく三つに分類されている。それは法廷弁論・審議弁論・演説弁論である¹⁵。そして、declamatio における suasoria が審議弁論に分類 (genus deliberativum) される弁論のための練習であり、また審議弁論そのものも説得弁論 (suasoria) と呼ばれ、そして Her. 4 の、パイドラーがヒッポリュトスに「自分と男女関係を結ぶよう申し寄る」という内容は、ヒッポリュトスを「説得する (suadeo) ¹⁶」というものであることから、Her. 4 は審議弁論に相当する形で弁論術の方法論が意識されていると考えることができる。

審議弁論に関して、キケローやクインティリアヌスはその目的として次のように指摘している。「その目指すべきところは「有用性」 (utilitas) にだけあると考える者もいるが、有用性よりもむしろ「品格」 (dignitas) を目指すべきである」ということや、「「高潔さ」 (honestas) あつての utilitas である」ということである¹⁷。これら utilitas と dignitas・honestas

¹⁵ Cic. *De Inv.* 1. 7. 10-8. 1: Aristoteles autem, qui huic arti plurima adiumenta atque ornamenta subministravit, tribus in generibus rerum versari rhetoris officium putavit, demonstrativo, deliberativo, iudiciali. demonstrativum est, quod tribuitur in alicuius certae personae laudem aut vituperationem; deliberativum, quod positum in disceptatione civili habet in se sententiae dictionem; iudiciale, quod positum in iudicio habet in se accusationem et defensionem aut petitionem et recusationem. et, quemadmodum nostra quidem fert opinio, oratoris ars et facultas in hac materia tripertita versari existimanda est.

¹⁶ Quint. *I. O.* 3. 8. 6: pars deliberativa, quae eadem suasoria dicitur, de tempore futuro consultat, quaerit etiam de praeterito. officii constat duobus suadendi ac dissuadendi.

¹⁷ Cic. *De Part. Orat.* 83. 6-8: C.P.: Est igitur in deliberando finis utilitas, ad quem omnia ita referuntur in consilio dando sententiaeque dicenda ... Cic. *De Inv.* 2. 156. 3-5: in deliberativo autem Aristoteli placet utilitatem, nobis et honestatem et utilitatem, ... Cic. *De Orat.* 2. 334: Ergo in suadendo nihil est optabilius quam dignitas; Quint. *I. O.* 3. 8. 1: Deliberativas quoque miror a quibusdam sola utilitate finitas. Ac si quid in his unum sequi oporteret, potior fuisset apud me

の概念に関しても、*Her. 4* の内容と関連してくると予想される。これについては、実際に *Her. 4* の構成・内容をテキストに沿って検討する際にあわせて考慮していく。

2.2. 弁論の構成要素（序言・陳述・立証・結語）と *Her. 4* の対応

Her. 4 の構成をパラグラフに分けると、大きく 4 つのパラグラフに分けることができる。すなわち、

- [1] 挨拶と、手紙を読むことへの促し（1-6）
- [2] 自分が Hip. への恋に落ちた経緯について（7-84）
- [3] 自分と Hip. が男女関係になることへの正当性と利便性について（85-146）
- [4] ひたすら謙っての嘆願（147-176）

である。さて、弁論の基本的な構成要素（pars）は、序言（exordium, principium）・陳述（narratio）・立証（confirmatio）・結語（conclusio, peroratio）からなるとされる¹⁸。ここで、*Her. 4* の 4 つのパラグラフが順にこの構成要素に相当していると予想することができる。すなわち、[1] 序言（1-6）・[2] 陳述（7-84）・[3] 立証（85-146）・[4] 結語（147-176）という形で相当するということである。それでは以下に、*Her. 4* 中の各パラグラフの内容が、各構成要素でなされるべきとされることに則ったものとなっていることを示す。

2.2.1. 序言としての *Her. 4. 1-6*

弁論の始めの部分としてあるのが序言あり、ここでは聴衆の好意・注意・興味を得るようにすることが肝要であるとされる¹⁹。さて、*Her. 4* の手紙冒頭の第 1 パラグラフ（1-6）においては、挨拶と、手紙を読むことへの促しをする。ここではまず、1: Qua, nisi tu dederis,

Ciceronis sententia, qui hoc materiae genus dignitate maxime contineri putat. Nec dubito quin ii qui sunt in illa priore sententia secundum opinionem pulcherrimam ne utile quidem nisi quod honestum esset existimarint.

¹⁸ キケロー『弁論術の分析』では次のように principium, narratio, confirmatio, peroratio の 4 つが示されている。Cic. *De Part. Orat.* 4. 1-4: C. F.: Quid? orationis quot sunt partes? C. P.: Quattuor. Earum duae valent ad rem docendam, narratio et confirmatio, ad impellendos animos duae, principium et peroratio. さらにキケロー『発想論』では、Cic. *De Inv.* 1. 19. 25-27: eae partes sex esse omnino nobis videntur: exordium, narratio, partitio, confirmatio, reprehensio, conclusio. というように 6 つ挙げられている。ここでは partitio「分析」と reprehensio「反駁」が加えられているが、これらはそれぞれ narratio と confirmatio に付随するものである。

¹⁹ Cic. *De Inv.* 1. 20. 1-3: Exordium est oratio animum auditoris idonee comparans ad reliquam dictionem: quod eveniet, si eum benivolum, attentum, docilem confecerit. また Cic. *De Part. Orat.* 28-30, *De Orat.* 2. 80. なおキケローはこれらのことは序言に限ったものでなく、弁論全体になければならないものであるとも指摘している（*De Orat.* 2. 81-82）。

caritura est ipsa, salutem「あなたが与えてくれない限り、自ら得ることはできない——そのような健康を…」と述べるが、これは、まだパイドラーの気持ちを知らないヒッポリュトスに彼女を気遣う気持ちがあるとするならば、「自分が何かしないとパイドラーが健康でいられない状況とは一体どういうことか」とヒッポリュトスに考えるきっかけを起こさせるものである。これは弁論における序言として、聴衆に相当するヒッポリュトスに注意を促すものであるといえる。また 3-4 では、perlege, quodcumque est: ... / te quoque in hac aliquid quod iuvet esse potest.「内容全てを読み通してください。(…) この手紙の中に、何かあなたを喜ばせることもあり得るでしょう」という表現するが、これは、te... iuvet「あなたを喜ばせる」という表現から、手紙の内容がヒッポリュトスにとって喜ばしいものであるということを予期させようとするものであり、これも弁論における序言として、聴衆に相当するヒッポリュトスの好意を得ようとするものであるといえる²⁰。このように *Her. 4* の第 1 パラグラフには、弁論における序言に則った形での言述がなされている。

2. 2. 2. 陳述としての *Her. 4. 7-84*

続いて弁論では陳述がなされる。これは論題となっている起きたことの説明をするものである²¹。この陳述において、説得的であるためになされるべき言述の内容はいくつかあるが、そのうちで *Her. 4. 7-84* との関連で挙げるならば、出来事の原因を示すことや、陳述している当人の信頼性や真つ当な生き方や、信仰に合致していることや、聴衆の見解に合致していることを示すということである²²。さて *Her. 4* の第二パラグラフ (7-84) では、パラグラフ全体において自分がヒッポリュトスへの恋に落ちた経緯を述べる。ここでまずパイドラーは、「自分には恋心を直接口頭で告白するのには強いためらいがあったが、アモル (Amor) が恋心を伝える手紙を書くよう命じたのでやむなくこのような手紙を書いた」ということを述べる (7-16)。ここでは、パイドラーが己の恋心を伝える手紙を書くことの原因を示すものである。次いで「自分は純潔であり、同様に純潔であるヒッポリュトスとそろって一緒に罪を犯すことになるのだ」ということを述べる (17-36)。これは手紙の書き手パイドラーすなわち陳述している当人のこれまでの真つ当な生き方を示すものである。また次いで、「自分が狩りに興じてディアーナを崇めるのは、ヒッポリュトスと同じである」と述べる (37-52)。これはディアーナへの信仰に合致し、聴衆に相当するヒッポリュトスの見

²⁰ また 2 行目の *Cressa puella* という表現も、自分自身を人妻ではなくこのような一少女であると示すことで、ヒッポリュトスの好意を得ようとするものであると思われる。

²¹ Cic. *De Part. Orat.* 31. 3: narratio est rerum explicatio...Cic. *De Inv.* 1. 27. 1-2: Narratio est rerum gestarum aut ut gestarum expositio.

²² Cic. *De Part. Orat.* 31. 3: Probabilis autem erit... si cuiusque facti et eventus causa ponetur: si testata dici videbuntur, si cum hominum auctoritate, si cum lege, cum more, cum religione coniuncta: si probitas narrantis significabitur, si antiquitas, si memoria, si orationis veritas, et vitae fides. Cic. *De Inv.* 1. 29. 13-22: Probabilis erit narratio, ...si causae factorum exstabant; ...si res ... et ad eorum, qui audient, opinionem accommodabitur.

解に合致していることを示すものである。また次いで「自分が恋するのは血統のためであり、運命である」と述べる（53-66）。これは再びヒッポリュトスへの恋に至った原因を示すものである。そして次いで「飾らず逞しいヒッポリュトスを気に入る女は自分だけである」ということを述べる（67-84）。これはそのような自分がそのような趣向であるのを伝えることによって、陳述している当人たる自分がヒッポリュトスの信頼を得るに足る人物であることを示すものである。

このように *Her. 4* の第2 パラグラフには、弁論における陳述に則った形での言述がなされている。さらに付け加えるならば、陳述では関係する人物の品格（*dignitas*）が保持されることも説得的であるために重要であるとされるが²³、この第2 パラグラフでは全体として、上述に述べたような内容からパイドラーの品格が保持されるように言述が展開されているといえる。これは本章 2.1 述べたところの、審議弁論において目指すべきとされる「品格」（*dignitas*）が意識されたものである。

2.2.3. 立証としての *Her. 4. 85-146*

陳述に続くのが立証である。これは論証によって自分の主張に信用と権威と根拠を得させるものである²⁴。さて *Her. 4* の第三パラグラフ（85-146）においては、まずパイドラーとヒッポリュトスの二人が男女関係を結ぶことの正当性を主張し（85-136）、自分とヒッポリュトスならば逢引をする際にも利便性が高いことを主張する（137-146）。

まずこの 85-136 において、論証に際し用いられる「対比」と「模範」²⁵が見て取れる。「対比」とはあることと別のことを類似性に基づいて比較するものであり、「模範」とはある人物や行動の権威や前例に拠るものである²⁶。第三パラグラフではまず 85-104 において、「ケパロスとアウローラ」・「アドーニスとウェヌス」・「メレアグロスとアタランテー」の前例を挙げて「自分とヒッポリュトスは、前例たる関係性に倣うべきである」とする。これはこのような人物や神の前例に拠るものであり、「模範」を用いているものである。次に 105-126 において、テーセウスが自分の兄であるミーノータウロスを殺し姉であるアリアドネーを見捨てたことと、ヒッポリュトスの母であるアマゾーン族の女を殺したことを比較して「テーセウスが妻子の親族に対して残酷な振る舞いをする」という類似性を見出させ、「テーセウスはヒッポリュトスと自分の二人共に仇をなしている」とする。これは「対比」を用い

²³ Cic. *De Inv.* 1. 29. 13-16: Probabilis erit narratio, ... si personarum dignitates servabuntur;

²⁴ Cic. *De Inv.* 1. 34. 1-3: Confirmatio est, per quam argumentando nostrae causae fidem et auctoritatem et firmamentum adiungit oratio.

²⁵ Cic. *De Inv.* 1. 44-49 によると、論証には必然的なもの（*necessaria*）と説得的なもの（*probabilis*）があり、このうち後者で用いられるものに、「徴候」（*signum*）・「蓋然性」（*credibile*）・「決着済み」（*iudicatum*）・「類似」（*comparabile*）がある。この *comparabile* に「対比」（*conlatio*）と「模範」（*exemplum*）は含まれる。

²⁶ Cic. *De Inv.* 1. 49. 5-8: conlatio est oratio rem cum re ex similitudine conferens. exemplum est, quod rem auctoritate aut casu alicuius hominis aut negotii confirmat aut infirmat.

ているものである。そして 129-136 では、サートウルヌス・ユピテル・ユーノー・ウェヌスといった神々に言及し、「近親婚は天上の神々も認めるところのものである」とする。これはそのような神々を権威として拠るものである。これは「模範」を用いているものである。これらは、男女関係を結ぶということについてのものであっても、それには正当性があると主張することであるから、本章 2.1 述べたところの、審議弁論において目指すべきとされる「品格」(dignitas) を目指した形での論証であるといえる。

次いで 137-146 において、「自分とヒッポリュトスならば、親しくしていてもおかしくないので隠す苦労はなく、継母と継子が仲良くしているということで咎められるどころか誉められる」とする。これは、論証に際し用いられる「蓋然性」(証拠を挙げなくても聴衆が考えれば納得すること)²⁷が見て取れる。85-136 に対しこの 137-146 は、ただ逢引の利便性の高さを主張するものであり、dignitas は目指されてはいない。ここでは「有用性」(utilitas) だけが目指されているのである。本章 2.1 述べたとおり、キケローやクインティリアヌスは dignitas や honestas の重要性を強調しているが、この utilitas 自体を目指すこと自体は審議弁論の目的に適ったものである²⁸。以上のように *Her. 4* の第 3 パラグラフには、弁論における立証に則った形での言述がなされている。

2.2.4. 結語としての *Her. 4. 147-176*

そして弁論の最後の部分になるのが結語である。この結語 (conclusio) においてなされるのが、「拡充」(amplificatio) である²⁹。これは論証が終わった後に、その説得性を増幅させるためにする弁論である。この「拡充」は「確定的な事柄に関する拡充」(certae rei amplificatio) と「不確定的な事柄に関する拡充」(dubiae rei amplificatio) に分類され、いずれも「汎用性のあるトpos」(locus communis) が用いられる³⁰。このうち、「確定的な事柄に関する拡充」(certae rei amplificatio) は、論証や立証がなされた後でなければ、空疎にして空虚なものになるので用いてはならないとされる³¹。そしてこの「確定的な事柄に関する拡充」において用いられる「汎用性のあるトpos」のうちのものに「慨嘆」(indignatio) や「哀願」(conquestio) が挙げられる³²。さて、*Her. 4. 147-176* の内容は、立証に相当する 85-146 の後になされるも

²⁷ Cic. *De Inv.* 1. 48. 6-9: credibile est, quod sine ullo teste auditoris opinione firmatur, hoc modo: “nemo est, qui non liberos suos incolumes et beatos esse cupiat.”

²⁸ この 137-146 が *Eur. Hip* での表現・内容と結び付く。これについては後述する。

²⁹ cf. Cic. *De Orat.* 2. 80. ここでは拡充 (amplificatio) については ornandi aut augendi causa digredi 「装飾したり敷衍したりするために逸れること」とされている。

³⁰ cf. Cic. *De Inv.* 2. 48-51、*De Orat.* 3. 104-107. なお locus communis の訳語は『発想論』での片山英男訳では「汎用性のある論点」、『弁論家について』での大西英文訳では「共通のトpos」と訳されている。本章ではそれらの折衷的な訳語とした。

³¹ Cic. *De Orat.* 3. 106. 7-107. 1: quibus uti confirmatis criminibus oportet, aliter enim ieiuni sunt atque inanes; Cic. *De Inv.* 2. 48. 1: quo loco nisi perorata causa non est utendum;

³² cf. Cic. *De Inv.* 2. 48. なお Cic. *De Orat.* 3. 107 ではこれらの「汎用性のあるトpos」は deprecatio 「嘆願」と miseratio 「憐憫」のトposとされる。

のであり、一連の嘆願という形になっている。このことから、この 147-176 は「確定的な事柄に関する拡充」として「汎用性のあるトポス」のうちの「哀願」が用いられているということが予想される。そして、この「慨嘆」や「哀願」は、そもそも弁論における結語 (conclusio) を構成する要素であるともされ³³、特に「哀願」は聴衆の同情 (misericordia) を得ようとして「汎用的なトポス」を用いて「運命の力と人間の弱さ」を全ての人に示すことであるとされる³⁴。キケローは『発想論』において「哀願」におけるトポスを 16 個挙げており³⁵、これらのうちのいくつかが *Her. 4. 147-176* で用いられていると予想される。まず 147-176 では、このパラグラフ全体を統括する表現として 149: *non ego dedignor supplex humilisque precari*. 「私は嘆願者としてひれ伏し、懇願することも厭いません」と述べており、全体としてひたすら己を謙らせ嘆願するというものとなっている。それゆえこれは第 14 の「謙った嘆願の言葉によって懇願しひたすら聴衆に同情を乞う」というトポス³⁶が用いられている。そしてまず 147-156 では、「自尊心を持ち高慢な言葉を発していた、王妃たる自分が今や打ち負かされて懇願しているのだ」と述べる。ここでは第 4 の「被った災いが相応しくない」というトポス³⁷が用いられている。引き続き 157-164 では自分の父や祖父たるミーノース・ユピテル・ソールに言及し自分はそのような高貴な生まれであっても愛の下に倒れるとする。これも上述の第 4 のトポスが用いられていると共に、「運命の力と人間の弱さ」を示しているといえる。そして 165-174 ではヒッポリュトスが心を曲げたり自分を容赦するよう嘆願すると共に、ディアーナやサテュロスやニンフらの加護がヒッポリュトスにあるようお願い、最後に、175-176: *addimus his precibus lacrimas quoque; verba precantis / perlege, sed lacrimas finge videre meas*. 「この懇願には涙も添えます。懇願の言葉を最後まで読み通してください³⁸。しかし同時に、私の涙を見ているのだとも思ってください。」と述べて手紙を終える。これは己の涙について言及し改めてヒッポリュトスの同情 (misericordia) を得ようとするもの

³³ Cic. *De Inv.* 1. 98. 1-3: Conclusio est exitus et determinatio totius orationis. haec habet partes tres: enumerationem, indignationem, conquestionem.

³⁴ Cic. *De Inv.* 1. 106. 3-8: Conquestio est oratio auditorum misericordiam captans. in hac primum animum auditoris mitem et misericordem conficere oportet, quo facilius conquestione commoveri possit. id locis communibus efficere oportebit, per quos fortunae vis in omnes et hominum infirmitas ostenditur;

³⁵ Cic. *De Inv.* 1. 106-109.

³⁶ Cic. *De Inv.* 1. 109. 16-18: quartus decimus, qui per obsecrationem sumitur; in quo orantur modo illi, qui audiunt, humili et supplici oratione, ut misereantur.

³⁷ Cic. *De Inv.* 1. 107. 10-12: quartus, per quem res turpes et humiles et inliberales proferentur et indigna aetate, genere, fortuna pristina, honore, beneficiis, quae passi perpessurive sint.

³⁸ 176 行行頭の読みについては、P 写本の *perlegis et* や、E. J. Kenney の conjecture の *qui legis et* という読みが主流であるが、本章では G 写本の *perlege et* という読みおよび Bentley (Heidicke, E., *Studia Bentleiana. V. Ovidius Bentleianus*. Freienwald 1905), Hunt (Hunt, J. M., Review: *P. Ovidii Nasonis "Epistulae Heroidum"* by Henricus Dörrie. *CP* 70. 3 (1975), 215-224), Casali (Casali, art. cit.)らの支持から *perlege sed* という読みを採用する。この *perlege* の方が、「嘆願」の文脈に即し、なおかつ 3 行目の *perlege* と *ling composition* 的に対応すると考えられるからである。なおこの箇所への読みについては、Ramírez de Verger, A., *On Ovid, Heroides 4.175-6. Mnemosyne* 58(2005), 429-31 が問題点を分かりやすくまとめている。

である³⁹。このように *Her. 4* の第 4 パラグラフには、弁論における結語に則った形での言述がなされている。

以上、*Her. 4* の構成に関して第一パラグラフから検討してきたように、*Her. 4* は各パラグラフの内容が、弁論における序言・陳述・立証・結語に則ったものになっているのである。

3. *Her. 4* における *Eur. Hip.* の表現・内容との対応と、「弁論術」の要素との関連

3. 1. *Eur. Hip.* における表現との対応

さて *Her. 4* には、*Eur. Hip.* の表現と対応する表現があることが随所において観察される。これには、*Her. 4* が *Eur. Hip.* の表現を直接取り込んだのか、あるいは *Eur. Hip.* と共通の源泉となる作品から取り込んだのかは確定することはできない⁴⁰。本節では議論を進める上での前提として、*Her. 4* が *Eur. Hip.* の表現・内容と対応が見られるとして、その箇所を確認し、*Her. 4* は先行作品を取り込むという傾向があることを踏まえておく。

Her. 4. 37-46 でパイドラーは、自分がしたこともなかった森や山で狩りを楽しんでいることを述べる。ここでパイドラーは猟犬で鹿を追いやったり (41-42)、槍を投げたり (43)、草地に身を横たえることを喜んでいと述べ、また馬車 (戦車) を駆るのを楽しんでいると述べる (45-46)。これは *Eur. Hip.* での、第一エペイソディオンにおけるパイドラーが乳母に語る以下の言葉を強く想起させるものである。

πῶς ἄν δροσερᾶς ἀπὸ κρηνίδος
καθαρῶν ὑδάτων πῶμ' ἀρυσαίμαν,
ὑπὸ τ' αἰγείροις ἔν τε κομήτῃ
λειμῶνι κλιθεῖσ' ἀναπαυσαίμαν;

...

πέμπετε μ' εἰς ὄρος· εἶμι πρὸς ὕλαν
καὶ παρὰ πεύκας, ἵνα θηροφόνοι
στείβουσι κύνες
βαλῖαις ἐλάφοις ἐγχριμπτόμεναι·

215

³⁹ このような手紙の書き手の涙についての言及は、本来手紙の冒頭でなされるのがふさわしいものである (cf. Propertius 4. 3. 1-4, Ovid. *Her.* 3. 1-4)。ここで真摯な気持ちの表れである涙への言及が最後に付け足しのようになされることは、ヒッポリュトスへの説得が失敗に終わりそうなものであることを暗示しているかもしれない。

⁴⁰ たとえば、一見 *Eur. Hip.* と *Her. 4* の表現が対応していると思われる箇所も、本来はエウリーピデース第一作の『顔を覆うヒッポリュトス』との対応を意図したものであるかもしれない。しかし検討を進める上での実際問題として、現存する先行作品と比較し対応を見出すしか術がない。また、対応していると思われる箇所がそもそも一般的なモチーフであるともいえるかもしれない。しかしそうであっても、両作品のパイドラーが同じように言及するということは、やはり対応性を感じさせるものである。

πρὸς θεῶν, ἔραμαι κυσὶ θωύξαι
καὶ παρὰ χαίταν ξανθὰν ῥῖψαι
Θεσσαλὸν ὄρπακ', ἐπίλογχον ἔχουσ'
ἐν χειρὶ βέλος.

220

...

δέσποιν' ἀλίας Ἄρτεμι Λίμνας
καὶ γυμνασίων τῶν ἵπποκρότων,
εἴθε γενοίμαν ἐν σοῖς δαπέδοις,
πῶλους Ἐνέτας δαμαλιζομένα.

(Eur. *Hip.* 208-231)

清らかな泉の水にのどを潤すことができたなら、それともポプラの蔭の草原に寝て、心を遣うことができたならねえ。(…) さあ山へ連れて行ってちょうだい。狩りの犬が、斑毛の鹿を追って駆け巡る、樅の林へ登りましょう。おお、矢も楯もたまらない、犬をけしかけ、右手にもった投槍をこの金髪のあたりに構えて投げてみたいこと。(…) 海に沿うリムネの主、またそのあたり、蹄の響く馬場を守りたもうアルテミス様、もしその馬場に、ヴェネティアの駿馬を駆って思う様乗り回すことができましたなら。⁴¹

また *Her.* 4 ではこれに続いて自分がバックイ（バッコス憑きの女）やキュベレーの信徒たちのように狂乱するが、狂気が和らいだ時に自分がそのような様子であったと伝え聞くと述べる（47-51）。これも同様に、Eur. *Hip.*での、パイドラーが乳母に語る以下の言葉を強く想起させる。

δύστηνος ἐγὼ τί ποτ' εἰργασάμην;
ποῖ παρεπλάγχθην γνώμης ἀγαθῆς;
ἐμάνην, ἔπεσον δαίμονος ἄτη.
φεῦ φεῦ, τλήμων.

μαῖα, πάλιν μου κρύψον κεφαλὴν,
αἰδούμεθα γὰρ τὰ λελεγμένα μοι.

(Eur. *Hip.* 239-244)

不仕合せなわたし、なんということをしてしまったのだろう。落着きを失って、どこまで迷い込んでしまったのかしら。どの神様かの祟りで、わたしは気が狂っていたのだったわ。まあ、ほんとに情けないこと。婆や、やっぱりまた顔を隠してちょうだい、さっき口走った言葉が恥ずかしいのですもの。

また *Her.* 4 でパイドラーは、エウローペー・パーシパエー・アリアドネーといった自分の親族・祖先が各々が恋愛沙汰に関係した話を有しており、自分がこの血統を引く最後の

⁴¹ ここで引用する Eur. *Hip.*の訳は、岩波文庫版の松平千秋訳である。場合に応じて適宜訳語を改変している。

者として一族を律する掟（すなわち恋をするということ）に従う、と述べる（53-62）。これも同様に、Eur. *Hip.*での、パイドラーが乳母に語る以下の言葉を強く想起させる。

ὦ τλήμον, οἶον, μήτερ, ἡράσθης ἔρον,

...

σύ τ', ὦ τάλαιν' ὅμαιμε, Διονύσου δάμαρ,

...

τρίτη δ' ἐγὼ δύστηνος ὥς ἀπόλλυμαι.

...

ἐκείθεν ἡμεῖς, οὐ νεωστί, δυστυχεῖς. (Eur. *Hip.* 337-343)

お気の毒なお母様、あなたもなんという悲しい恋をなさいましたことか。（…）それからディオニュソス様に嫁いだ可哀そうな妹。（…）そして三番目にこの私が、みじめに亡んでゆくでしょう。（…）わたしはそういう因縁があるというの。わたしの不幸は昨日今日のものではないのだよ。

また *Her.* 4 では、「自分が長い間ヒッポリュトスへの恋心に抗っていた」ということを述べる（151-152）。これも同様に、Eur. *Hip.*での、パイドラーが乳母に語る以下の言葉を強く想起させる。

τὸ δεύτερον δὲ τὴν ἄνοιαν εὖ φέρειν

τῷ σωφρονεῖν νικῶσα προνοησάμην. (Eur. *Hip.* 397-398)

二番目には、女の操を想ってはこの煩悩に克とうとしてみました。

これらの表現の対応から、*Her.* 4 は少なくとも、Eur. *Hip.*から直接か、あるいは Eur. *Hip.*と共通する源泉から表現・内容を取り込んでいることが分かる。

3.2. 「賢い」ということと、弁論術

さてこのことを踏まえた上で、*Her.* 4 の解釈上で特に問題としたいのが第二エペイソディオンにおける、乳母による告白に対するヒッポリュトスの拒絶の言葉（Eur. *Hip.* 565-669）であり、とりわけそのうちの以下の表現である。

σοφὴν δὲ μισῶ· μή γὰρ ἐν γ' ἐμοῖς δόμοις

εἶη φρονούσα πλείον' ἢ γυναῖκα χρή.

τὸ γὰρ κακοῦργον μᾶλλον ἐντίκτει Κύπρις

ἐν ταῖς σοφαῖσιν· ἢ δ' ἀμήχανος γυνή

γνώμη βραχεία μωρίαν ἀφηρέθη.

(Eur. Hip. 640-644)

とにかく私は賢しい女は嫌いだ。女の分際で賢ぶような女を妻には持ちたくないものだ。とかく色恋の過ちも、賢い女に多いもので、甲斐性のない女は、頭の働きの遅いお蔭で、そういう間違いを犯さずにすむというもの。

ここでヒッポリュトスは σοφή な女を嫌うと述べる。この σοφή という語は Eur. Hip. でも鍵となる概念であり、この前の第一エペイソディオンにおいてもパイドラーが、「自分がパイドラーの恋の手助けをしよう」と申し出る乳母に対して、

δέδοιχ' ὅπως μοι μὴ λίαν φανῆς σοφή.

(Eur. Hip. 518)

でもお前があんまり賢しいことをしはしないかと、恐れるのです。

という言葉にも表れている。この Eur. Hip. 518 と Eur. Hip. 640 の対応から、σοφή という語は物語展開上で重要な位置を占めている。このことを踏まえると、本章 2 で検討したような、Her. 4 が弁論における序言・陳述・立証・結語に則った構成になっていることは、まさにパイドラーをこの σοφή な女であると感じさせるものとなっているのではないだろうか。もちろん、Eur. Hip. のヒッポリュトスが「弁論に長けている女は嫌いである」ということを明確に述べているわけではないし、また σοφός や σοφή という語が必ずしも弁論や弁論家と結び付くわけではない。しかし自分の恋心を伝えて男女関係を結ぼうと申し寄る手紙に、弁論術の手法を凝らすのはまさに「賢しい」というに相応しいものであり、結局そのことが手紙を読むヒッポリュトスの反感を買うことに結び付くのは、この Eur. Hip. 640-644 から十分に想定できる。

このような、恋心の告白や手紙を用いた説得に際しむしろ弁論術的な特質が害となることを別の側面から支持するものとして、オウィディウス『恋の技法』(A. A.) での以下の一節を挙げることができる。

disce bonas artes, moneo, Romana iuventus,

non tantum trepidos ut tueare reos;

460

quam populus iudexque gravis lectusque senatus,

tam dabit eloquio victa puella manus.

sed lateant vires, nec sis in fronte disertus;

effugiant voces verba molesta tuae.

quis, nisi mentis inops, tenerae declamat amicae?

465

saepe valens odii littera causa fuit.

(Ovid. A. A. 1. 459-466)

ローマの若者たちよ、忠告するが、高尚なる学芸を学びなさい。それは不安におののく被告人を護るためだけのものではない。民衆も、厳しい裁判官も、選ばれし元老院も雄

弁には降参するように、女も雄弁には屈して降参するだろう。だがその力は隠しておいて、人前では雄弁ではないようにしておきなさい。大げさな言い回しは避けなさい。頭が悪い奴でない限り、誰がやさしい恋人に向かって弁論口調で語るのか。しばしば手紙が書き手の嫌われる有力な原因にもなるのだ。

ここでの文脈は、オウィディウスは女性を口説こうとする男性に向けて教訓を述べているものである。しかし、この教訓は *Her.* の書き手たる女性にも適用することができる。というのも、*Her.* は「男が女に己の恋心をエレゲイア詩で伝える」というジャンルにおける男と女の立場が入れ替わったものであるからである。

この A. A. 1 での 459 における *bonae artes* 「高尚なる学芸」とは弁論術のことであり、意中の相手を口説くのに弁論術は有用であるということを述べているが、その一方で意中の相手に弁論口調で語る (*declamo*) ということは戒めている (465)。さらにこの 465 の内容を受けて「しばしば手紙が嫌われる有力な原因になる」と述べる (466) のは、そのように弁論口調で手紙を書いてしまうことが嫌われる原因となるのだと述べていると解釈できる⁴²。

ここで *Her.* 4 についての議論に戻るなら、この *Her.* 4 は本章 2 で検討したようにまさに弁論のスタイルに則ったものになっており、そのことと上述の A. A. 1. 459-466 の一節を合わせて考慮するなら、*Her.* 4 はまさにヒッポリュトスがパイドラーを嫌うという蓋然性の高いものになっているのである。

3.3. ヒッポリュトスの嫌悪の trigger としての *Her.* 4 の表現

ここまで、*Eur. Hip.* 640-644 および *Ovid. A. A.* 1. 459-466 との比較検討から、*Her.* 4 は弁論術的に巧みな構成であるからこそヒッポリュトスが拒絶する蓋然性が高いものとなっているということが示された。しかし、弁論術的に巧みな構成であることが相手に意識されないほど巧みであるとするならば、少なくとも「弁論術」の要素が存在すること自体は *Her.* 4 をヒッポリュトスが拒絶する原因にはならないように思われる。そこで考察を一步進めて、*Her.* 4 はその弁論術的な側面に対して特に注意を促し、そして特に嫌悪感を抱かせるような一節があるのではないだろうか。この点で *Her.* 4 との比較対象として以下の *Eur. Hip.* 565-669 の一節を注目したい。まずはパイドラーが館の外で、ヒッポリュトスが乳母を罵る声を次のように耳にした時のヒッポリュトスの言葉である。

καὶ μὴν σαφῶς γε τὴν κακῶν προμνήστριαν,
τὴν δεσπότου προδοῦσαν ἐξαυδᾶ λέχος. (Eur. *Hip.* 589-590)

⁴² Loeb 版の J. H. Mozley 訳では、466 の訳注に“if written in declamatory style.”と注記されている。

おお、はっきりと聞こえます。忌まわしいとりもち婆め、主君の閨を犯すものだと罵る声だ。

続いて、ヒッポリュトスと乳母のやりとり（601-）における、ヒッポリュトスの以下の言葉である。

ὥς καὶ σύ γ' ἡμῖν πατρός, ὦ κακὸν κάρα,
λέκτρων ἀθίκτων ἦλθες ἐς συναλλαγάς· (Eur. *Hip.* 651-652)
現に今もおれに、触れてはならぬ父上の閨に誘いをかけた不埒者め。

このように Eur. *Hip.*におけるヒッポリュトスが、乳母を介したパイドラーの恋心の告白を拒絶するにあたって、その告白内容から怒りを大きく感じた部分が、「父テーセウスの寢床を汚すこと」なのである。

一方 *Her.* 4 では、その手紙全体が「父テーセウスの寢床を汚すこと」への誘いであるという側面を持っているが、とりわけそのことについて直接的かつ具体的に言及しているのが、137-146 において自分とヒッポリュトスが逢引をすることの利便性の高さを主張する一節である。

nec labor est celare, licet peccemus, amorem;
cognato poterit nomine culpa tegi.
viderit amplexos aliquis, laudabimur ambo:
dicar privigno fida noverca meo. 140
non tibi per tenebras duri reseranda mariti
ianua, non custos decipiendus erit;
ut tenuit domus una duos, domus una tenebit;
oscula aperta dabas, oscula aperta dabis;
tutus eris mecum laudemque merebere culpa, 145
tu licet in lecto conspiciare meo. (Her. 4. 137-146)

私たちは過ちを犯すとしても、情事を隠す苦労はありません。親族という名によって、罪は覆われ得るでしょうから。抱き合っているのを誰かに見られたとしても、私たちは二人とも誉められるでしょう。私も自分の継子に誠実な継母と言われるでしょう。あなたには、暗闇を通して厳しい旦那のいる家の扉を開ける必要はないでしょうし、見張りを欺く必要もないでしょう。これまで一つの家が二人を守ってきたように、これからもこの家が二人を守るでしょう。あなたは今まで遠慮なく接吻してくれましたが、これからも遠慮なく接吻できるのです。あなたは私の寢床にいるのを見つけられても、私と共にいることで咎められはしませんし、罪によって賞賛を得ることでしょう。

これは *Her.* 4 中で「父テーセウスの寢床を汚すこと」について最もあからさまに言及するものである。この一節に対して、先に引用した *Eur. Hip.* 589-590, 651-652 でのヒッポリュトスの拒絶の言葉を踏まえるなら、この *Her.* 4. 137-146 は最もヒッポリュトスが受け容れがたい内容のものになっているといえる。さらにこの一節は、本章 2. 2. 3 で検討したように、*dignitas* や *honestas* のない、ただ *utilitas* だけを目指した弁論に相当するものとなっている。それまでの陳述に相当する 7-84 や、立証に相当する部分の前半の 85-136 では、*dignitas*⁴³ を目指していると受け取れるものであることから、この 137-146 はより一層 *utilitas* だけを目指しているということが際立つ。このような、*utilitas* だけを目指すような弁論は、本章 2. 1. で指摘したように、批判される要素を持つものである。それゆえ、137-146 のような *dignitas* や *honestas* 無き *utilitas* の面からの、「逢引の利便性の高さ」についての主張は、これを読むヒッポリュトスに、その「逢引」というヒッポリュトスが嫌悪する内容だけでなく、その実利の追求のみを目指すという姿勢からそのような側面を持つ弁論術的要素をも嫌悪させるものなのである。このことが一つの trigger となって、ひいては *Her.* 4 の手紙の弁論術的な側面全体に対して嫌悪感をヒッポリュトスに抱かせるものとなっているのではないかと考えられるのである。

4. 結論： *Her.* 4 でオウィディウスが描こうとしたパイドラーの手紙

以上の考察をまとめると、オウィディウスが *Her.* 4 で描こうとしたパイドラーの手紙は次のようなものであるといえる。*Her.* 4 は審議弁論（説得弁論）に相当するものとして、弁論における序言・陳述・立証・結語で述べられるべきことに則った形で言述が構成された手紙である。その一方で、*Eur. Hip.* を踏まえた後続する物語展開での表現や *Ovid. A. A.* における弁論術と口説き文句についての言及を考慮すると、*Her.* 4 のその弁論術的な側面こそがヒッポリュトスの拒絶を想起させるものとなる。とりわけ *Her.* 4 中でパイドラーとヒッポリュトスの逢引の利便性の高さを主張する一節は、*Eur. Hip.* でヒッポリュトスが父テーセウスの閨を汚すことについて強い嫌悪を表明していることと連関する一方で、*dignitas* や *honestas* 無き *utilitas* を目指す弁論の側面を提示していることから、その内容と共にその手紙の弁論術的な側面をもヒッポリュトスに嫌悪させるものとなり得る。このように *Her.* 4 では、弁論術と *Eur. Hip.* での表現・内容を巧みに結び付けて取り込んだ手紙となっており、パイドラーは皮肉にも説得のために用いる弁論術を手紙に用いたからこそ拒絶されるという、説得のための努力が裏目に出ることになっているのである。

⁴³ このような *Her.* 4 におけるパイドラーの *dignitas* は、*Eur. Hip.* におけるパイドラーの αἰδώς と関連付けられるかもしれない。この考察についてはまた稿を改めたい。

第2章

第9歌「デーイアネイラからヘーラクレースへの手紙」で描かれるデーイアネイラの手紙

1. 第9歌「デーイアネイラからヘーラクレースへの手紙」の問題と本章の視座

オウィディウス『名高き女たちの手紙』第9歌（*Her. 9*）は、ヘーラクレースの妻デーイアネイラが夫ヘーラクレースに宛てた手紙という形の作品であり、エレゲイア詩形で全168行からなる。*Her. 9*の背景となる物語は、次のようなものとして知られる¹。

ヘーラクレースは、いわゆる「12の功業」の最後の仕事として、冥界の番犬ケルベロスを捕獲するため冥界に行く。そこで、オイネウスの子メレアグロスの亡霊に出会い、彼の妹デーイアネイラを妻に娶ることを約束する。「12の功業」を果たし終えたヘーラクレースは、デーイアネイラに求婚し、同じく求婚者として対立していた河神アケローオスを組み伏せて、彼女を妻とする。その後ヘーラクレースは彼女との旅に出るが、途中、エウエーノス河を渡るため、渡し守のケンタウロス・ネッソスにデーイアネイラを運ぶのを任せる。そこでネッソスが彼女を犯そうとしたので、ヘーラクレースはヒュドラーの毒を塗り付けた矢でネッソスを射殺す。一方ネッソスは死の間際、毒の混ざった己の血を、「夫ヘーラクレースの心を繋ぎ止める媚薬である」と称してデーイアネイラに渡す。十数年後、ヘーラクレースはオイカリアーに遠征し、そこで彼が捕虜としたオイカリアー王女イオレーがデーイアネイラの下へ送られてくる²。このイオレーに夫の愛が移るのを恐れたデーイアネイラは、媚薬だと聞いていたネッソスの血を塗り付けた衣をヘーラクレースに送る。その衣を着たヘーラクレースは、血に混ざっていた毒のため、瀕死の状態に陥る。己が送った衣のせいで夫が死につつあるとの知らせを受けたデーイアネイラは、己の過ちを悔いて自害する。また一方、瀕死のヘーラクレースは、自分自身をオイテー山にて³火葬させる。

このデーイアネイラとヘーラクレースの物語は、ソポクレス『トラキーニアイ』（*Soph. Trach.*）において詳しい。ここではデーイアネイラの下にイオレーが連れてこられてから、デーイアネイラが毒の衣をヘーラクレースに送り、ヘーラクレースが瀕死になり、デーイアネイラが自害し、ヘーラクレースが遺言を息子ヒュッロスに伝えるまでが描かれている。

一方、*Her. 9*の内容もこの作品と概ね並行するものとなっている。この手紙を書いたデー

¹ 以下に示す *Her. 9* の背景は、バッキュリデース『祝勝歌』第5歌・ソポクレス『トラキーニアイ』（*Soph. Trach.*）・アポロドーロス『ギリシア神話』2.4.4-2.7.7・オウィディウス『変身物語』（*Ovid. Met.*）9.1-272での叙述から再構成したものである。なお、さらなる背景の詳細については、本論文末に掲載している、*Her. 9*の解題を参照されたい。

² ここでデーイアネイラがいるのは、*Soph. Trach.*ではトラキーニアイであるが、*Ovid. Met.* 9.1ff.ではティーリュニスであるとされる。*Her. 9*においては、デーイアネイラがトラキーニアイかティーリュニスのいずれににいるかは明確ではない。

³ ヘーラクレースがオイテー山で焼死するという伝承には、いくつか問題がある。これについては、内田次信「ヘラクレースの死」2011年度大阪大学大学院文学研究科共同研究成果報告書『神話表象のアレゴリズム研究——文学・哲学・レトリックに即して』2012, 1-7 参照。

イアネイラの状況は、彼女の下にイオレーが連れて来られて、そしてデーイアネイラが「媚薬」を塗り付けた衣をヘーラクレスに送った後に、彼女が書いた手紙である。さらにこのデーイアネイラの手紙執筆状況の大きな特徴は、デーイアネイラが手紙を書いている途中でヘーラクレス瀕死の報が届く (143ff.)、ということである。このため *Her.* 9 は、1-142 における箇所から、その報せを受けての 143-168 の箇所で、手紙を書くデーイアネイラの目的意識も変化している。

ここで、*Her.* 9 の全体を便宜上パラグラフに分けると、次のように大きく 5 つのパラグラフにまとめることができる。

- [1] 手紙の導入：Herc.が陥落した国の王女 Iole に夢中だと伝え聞いたこと (1-26)
- [2] Herc.の妻としての苦悩と、Herc.の身の危険についての心配 (27-46)
- [3] Herc.の女性関係、特に Omphale に仕えていた時のこと (47-118)
- [4] 自分の眼前に連れて来られた Iole の存在 (119-142)
- [5] Herc.瀕死の報を受けて、自分がとるべき行動 (143-168)

さて *Her.* 9 には、問題として指摘されてきている点が二つある。第一の問題は次のようなものである。このデーイアネイラの手紙は、第 1 パラグラフ (1-26) と第 4 パラグラフ (119-142) での内容から、そもそもはヘーラクレスがイオレーに執心していることに対する非難を目的として書き出されたものであることが分かる。それにもかかわらず、この手紙は、第 3 パラグラフにおいて 55-118 という 64 行に渡って、ヘーラクレスがリュディア女王オンパレーに仕えていた時のことについて述べ、そのことの非難に多くの行を費やしているのである。このことは、*Her.* 9 の構成面において統合性を欠く要素であると考えられてきた⁴。一方でこの箇所について擁護する先行研究もある。そのような先行研究では、次のことが指摘されている。「デーイアネイラは自分がヘーラクレスの妻であることに対して名誉と愛の両面から価値を見出しており、イオレーを愛の篡奪者として非難する一方でオンパレーを名誉の篡奪者として非難している」ということ⁵や、「119 行目 (第 4 パラグラフ) から本格的に始まるイオレーについての嘆きへの前段階として、嘆きの感情を昂ぶらせていく過程として重要な役割を果たしている」ということ⁶である。

そして第二の問題は次のようなものである。デーイアネイラは 143ff. で夫ヘーラクレス瀕死の報が届いたのを述べてから、*impia quid dubitas Deianira mori?* 「不実なデーイアネイラよ、何故お前は死をためらうのですか。」という表現を 4 度に渡って (146, 152, 158, 164) 用いる。このような 4 度現われる同一表現は、リフレインの技法が用いられているもので

⁴ Vessey, D. W. T. C., Note on Ovid, *Heroides* 9, *Classical Quarterly*, 68 (1969), 349-361, 350-355. またこれら *Her.* 9. 55-118 を削除する校訂案もある。cf. Shuckburgh, E. S., *Ovid: Heroides XIII*. London 1879, 1885², ad loc.

⁵ Jacobson, H., *Ovid's Heroides*. Princeton 1974, 238-241.

⁶ Bolton, M. C., In Defence of *Heroides* 9. *Mnemosyne* 50 (1997), 424-435, esp. 429-432.

ある。リフレインは詩においてはしばしば用いられる技法の一つであり、実際、オウィディウス以前の古典作品においても、テオクリトス、ピオーン、モスコス、カトゥッルス、ウェルギリウスといった詩人たちにすでに用いられてきており⁷、オウィディウス自身も『恋の歌』(Amores) 第1巻第6歌で用いている⁸。しかし、Her. 9はエレゲイア詩形で書かれていても「手紙」という体裁をとる以上、リフレインの技法が用いられるのは不適切であると考えられてきた⁹。その一方で、近年はこの Her. 9. 143ff. のリフレインについて肯定的な評価がなされきており、このリフレインは「デーイアネイラが破滅に至る避けがたさと呼び起こすものである」とする指摘¹⁰や、「デーイアネイラの感情の高ぶりを維持し、(繰り返しにより) 危機の始まりに読者を戻し続ける」とする指摘¹¹がなされている。また、その悲劇性が効果的に高められるものとして活用されているという指摘もなされており、この点に関してはピオーン『アドーニス追悼』との関連も指摘されている¹²。またカトゥッルス第52歌は、まさにリフレインで己への死を促そうするもの¹³になっており、とりわけ Her. 9. 152-158でその対応性が顕著であると指摘されている¹⁴。

これらの二つの問題は、一見別々の問題のように思われるかもしれない。しかしこれらの問題とされる箇所に関して、Her. 9の手紙の書き手デーイアネイラが強く関心を抱いている事柄から統合的な視点で解釈できるのではないか、というのが本章での試みである。というのも、たとえ 143ff. でヘーラクレース瀕死の報が届き、デーイアネイラの手紙執筆の目的が変わるものであっても、Her. 9が一つのまとまりある作品として作られているという仮定に基づくならば¹⁵、その作品を統合するデーイアネイラの関心内容が個々の箇所に反映されていると思われるからである。そしてこのデーイアネイラが強く抱いている関心内容を

⁷ Theoc. *Idyl.* 1, 2, Bion *Epitaph. Adon.*, Mosch. *Epitaph. Bion*, Catul. *Carm.* 45, 52, 61, 62, 64, Verg. *Ecl.* 8.

⁸ Ovid. *Amores* 1. 6 では、恋人の家を訪れる語り手が門番に呼びかける形で、tempora noctis eunt: excute poste seram! 「夜の時間は過ぎていく。門から門を振り落とせ」という表現が5度繰り返される (24, 32, 40, 48, 56)。

⁹ このような Her. 9におけるリフレインの否定的な評価は、Her. 9が偽作であるとの根拠にもされてきた。cf. Courtney, E., *Ovidian and Non-Ovidian Heroides. Bulletin of the Institute of Classical Studies*, 12 (1965), 63-66, esp. 66., Vessey, *art. cit.*, 354.

¹⁰ Jacobson, *op. cit.*, 229. また Jacobson は、そもそも Her. 9. 143ff. でヘーラクレース瀕死の報が届くのを述べるというのも、「外的な叙述が介在せず状況が進展しないという書簡の特性を埋め合わせるものである」と指摘している (*Id.* 229.)。

¹¹ Bolton, *art. cit.*, 434-435, esp. 435: “Ovid has chosen to solve this dilemma by using a refrain, a daring and innovative attempt to play with the norms of the epistolary form.”

¹² Barchiesi, A., *Speaking Volumes: Narrative and Intertext in Ovid and Other Latin Poets*. London 2001. 111-112, Casali, S., *P. Ovidii Nasonis Heroidum Epistula IX: Deianira Herculi*. Firenze 1995, 201.

¹³ 以下の全4行からなる。quid est, Catulle? quid moraris emori? / sella in curuli struma Nonius sedet, / per consulatum peierat Vatinius: / quid est, Catulle? quid moraris emori?

¹⁴ Jolivet, J. -C., *Allusion et fiction épistolaire dans les Héroïdes: Recherches sur l'intertextualité Ovidienne*. Paris-Rome 2001, 204-205.

¹⁵ 本章注9でも示したように、Her. 9には偽作説があるが、本章では Her. 9をオウィディウスの真作であるとして扱う。

軸とすることで、*Her.* 9 の個々の問題とされる箇所についての解釈を妥当なものにするとと思われるのである。すなわち、本章は上述の二つの問題ある箇所について、これらを擁護する先行研究とはまた別の観点から検討して、これらの箇所の擁護を試みるものである。

そこで本章ではまず、第 1 パラグラフにおいてデーイアネイラが強く関心を抱いている事柄を明確にし、それに基づいて、ヘーラクレス瀕死の報が届く以前の 1-142 の内容においてデーイアネイラがヘーラクレスに最も主張したい内容が述べられていると思われる第 4 パラグラフについて検討し、そしてその第 4 パラグラフの叙述のために直前の第 3 パラグラフの内容がどのように機能しているかを明確にする。次いでヘーラクレス瀕死の報が届いてからの第 5 パラグラフ 143ff.での叙述も、直前の第 4 パラグラフを受けたものであり、デーイアネイラの一貫した関心に基づいて叙述がなされているということを示す。このように *Her.* 9 を全体として統合的に捉えなおすことを通じて、上述の二つの問題点とされる箇所も、擁護されるべきものであることを新たな視点から示したい。

2. ヘーラクレスにとっての「名誉」と「不名誉」

2.1. 第 1 パラグラフにおけるデーイアネイラの関心内容

Her. 9 の冒頭は、以下のようになっている。

Gratulor Oechaliam titulis accedere nostris,

victorem victae succubuisse queror.

fama Pelasgiadas subito pervenit in urbes

decolor et factis infitianda tuis,

quem numquam Iuno seriesque immensa laborum 5

fregerit, huic Iolen imposuisse iugum. (*Her.* 9. 1-6)

オイカリアーが私たちの名誉に加わることを祝福しますが、勝利者であるあなたが敗者の女に屈したのを私は嘆いています。噂が突然ペラスゴスの都市に達しました。あなたの功業によって否定されるべき、恥ずべき噂です。ユーノーも、数えきれないほど続いた苦難も、決してヘーラクレスを打ち砕くことができなかったのに、イオレーがそのヘーラクレスにくびきをかけたということです。¹⁶

この 1-6 で注目したいのは、ヘーラクレスにとっての「名誉」と「不名誉」が対置される形で述べられているということである。まず 1-2 では *titulis* (1) という語からも分かるように、「オイカリアーを攻略したこと」がヘーラクレスにとっての「名誉」である。そしてこのことに対置する形で、「敗者の女（イオレー）に屈したこと」が述べられており、その

¹⁶ 以下、本稿で引用する *Her.* 9 の邦訳は、筆者による訳である。底本には Rosati, G., *Ovidio: Lettere di eroine*, Milan 2008⁵(1st ed. 1989)を使用した。

ことをデーイアネイラは嘆いている（queror）ことから、これはヘーラクレスにとっての「不名誉」であるといえる。

そして 3-4 ではそのような「恥ずべき噂」（fama... decolor）という「不名誉」と、「あなたの功業」（tua facta）という「名誉」が対置されている。

また 5-6 では、「ヘーラクレスをユーノーも数え切れないほど続いた苦難も打ち砕くことができなかった」と表現する形で、どのようなものにも負けないヘーラクレスの武勇が「名誉」として述べられており、それに対置されるものとして、「イオレーがヘーラクレスにくびきをかけたこと」が「不名誉」として述べられているのである。

Her. 9 の第 1 パラグラフはこれに続いて、ヘーラクレスにとっての「名誉」と「不名誉」の対比がなされていく。すなわち、エウリュステウスが望み、ユーノーが喜ぶのが「不名誉」であり（7-8）、ユピテルがヘーラクレスを宿らせるのに夜を長くし多くの時間を費やさせたことが「名誉」である（9-10）。またユーノーが与えた苦しみはヘーラクレスの「名誉」の原因となった一方で、ウェヌスは愛欲によるイオレーへの屈服というかたちでヘーラクレスに「不名誉」をもたらしているとする（11-12）。

そして、地・海・空にまたがるかたちでなされた功業（13-18）という「名誉」も、

quid nisi notitia est misero quaesita pudori,

si cumulas turpi facta priora nota?

(Her. 9. 19-20)

しかし、あなたがこれまでなした功業を、恥ずべき印を積んで完成させるのなら、あなたは惨めな恥のために周知されることを求めたに過ぎないのではないですか。

というように、「恥ずべき印」（turpis nota）たる「イオレーへの屈服」という「不名誉」が最終的に台無しにしてしまうとする。

これらをまとめると、第 1 パラグラフ全体で主張されていることは、「ヘーラクレスがこれまで積み重ねてきた功業による「名誉」が、イオレーへの屈服という「不名誉」により台無しになるということ」への不満であるといえる。このように、Her. 9 の手紙の書き手デーイアネイラは、ヘーラクレスにとっての「名誉」と「不名誉」に強い関心を抱いているのである。

2.2. イオレーとデーイアネイラ

次に、イオレーについての話題という点で第 1 パラグラフと内容が共通している第 4 パラグラフ（119-142）の内容について検討する。この第 4 パラグラフは、第 2・第 3 パラグラフを経て改めてイオレーの話題に戻るといえるものである。

ここでは、話題を自分の眼前に連れてこられたイオレーについてのことに移し、イオレーの様子を次のように述べる。

dat vultum populo sublimis ut Hercule victo:

Oechaliam vivo stare parente putes.

130

forsitan et pulsa Aetolide Deianira

nomine deposito paelicis uxor erit,

(Her. 9. 129-132)

彼女はヘーラクレースを打ち負かしたかのように、驕って群衆に顔を向けていました。両親が生きており、オイカリアーも健在であるかと思うほどです。おそらく彼女は、アイトーリアー女のデーイアネイラを追い出して、正妻に落ち着いて妾女の名を捨てるつもりなのでしょう。

ここで特に注目したいのは、上記の引用で下線を付した箇所である。ここで「ヘーラクレースを打ち負かす」と表現されていることは、まさにヘーラクレースにとって「不名誉」となることである。このような表現は、第1パラグラフの終わりにおいても、

quem non mille ferae, quem non Stheneleius hostis,

non potuit Iuno vincere, vincit amor.

(Her. 9. 25-26)

千の獣も、敵対するステネロスの子も、ユーノーも打ち負かすことができなかったあなたを、「愛欲」が打ち負かしています。

というように述べられていた。ここからも、「ヘーラクレースを打ち負かすこと」こそがヘーラクレースにとっての不名誉をであることが分かる。すなわちイオレーは、ヘーラクレースを打ち負かす、ヘーラクレースにとって「不名誉」な存在なのである。ここでイオレーを「不名誉」とするならば、そのイオレーが追い出そうとしている（とデーイアネイラが受け止めている）デーイアネイラ本人の存在は、ヘーラクレースにとっての「不名誉」に対置される存在であることから、ヘーラクレースにとっての「名誉」である、と手紙の書き手デーイアネイラ本人は見なしているのではないだろうか。実際、上の引用の 131-132 での「妾イオレーが正妻デーイアネイラを追い出す」ということは、先に引用した 19-20 での「恥ずべき印」がこれまでの功業（facta）を台無しにする」ということと対応すると思われる。

そしてこの 129-132 に続き、デーイアネイラは次のように自分のことについて述べる。

me quoque cum multis, sed me sine crimine amasti:

ne pigeat, pugnae bis tibi causa fui.

cornua flens legit ripis Achelous in udis

truncaque limosa tempora mersit aqua;

140

semivir occubuit in letifero Eveno

Nessus, et infecit sanguis equinus aquas.

(Her. 9. 137-142)

私も多くの女達と共にあなたが愛した女たちの一人ですが、私への愛に罪はありませんでした。後悔なさることになりませんように申しますが、私はあなたにとって二度、戦いの原因になったのです。というのも、アケローオスは湿気た川岸で、泣きながら自らの角を拾い、角の切り落とされた額を泥だらけの水に沈めましたし、半人半獣のネッソスはエウエーノス河で倒れて死に、馬の血で川の水を染めたのですから。

この箇所において、二つの点からデーイアネイラは自分自身がヘーラクレースにとっての「名誉」であることを主張している。

まずデーイアネイラは、自分をヘーラクレースに「罪なくあなたに愛された」(sine crimine amasti (137)) として、自分が正妻であるということを述べる。これは、第3パラグラフの(49-52)で挙げられたヘーラクレースが関係を持った女性たちとは対照をなすものである。デーイアネイラは、正式な結婚により自分がヘーラクレースの妻となっていることを、「ヘーラクレースの評判を貶めるものではない」としているのである。これはすなわち、ヘーラクレースにとっての「名誉」といいかえることができる。

そしてこの正妻である自分は、pugnae bis causa (138)「二つの戦いの原因」となったこと、すなわち、デーイアネイラを妻として得るためにヘーラクレースが河神アケローオスを倒したことと、妻の操を守るためにケンタウロスの渡し守ネッソスを倒したことを挙げる。

ここでデーイアネイラは、この「二つの戦い」をヘーラクレースの「功業」に相当するものと見なしている。そしてこの戦いにより武勇をもってして獲得され、また守られたものであるデーイアネイラ自身を、ヘーラクレースにとっての「名誉」であると見なしているのである。

そしてそのように正妻デーイアネイラを獲得し、また守るということになった戦いについて「後悔なさることになりませんように」(ne pigeat (138)) と述べるのは、第1パラグラフにおいて、

respice vindicibus pacatum viribus orbem,

(Her. 9. 13)

思い出してください。世界が平定されたのは、解放者であるあなたの力によるものだということを。

というように、respice「思い出してください」と述べてヘーラクレースの功業に意識を向けさせるのに通じるものである。このことから、この137-142においてデーイアネイラは自身をヘーラクレースにとっての「功業」の賜物たる「名誉」としてみなしており、そしてイオレーという「ヘーラクレースを打ち負かす」という「不名誉」に対置して、ヘーラクレースにとっての「名誉」たる存在である自分を気にかけるよう促しているのである。

このように第4パラグラフでは、イオレーを「ヘーラクレースを打ち負かす」存在とみ

なすことでヘーラクレスにとっての「不名誉」であるとし、自分自身をヘーラクレスの功業における武勇による賜物とみなすことでヘーラクレスにとっての「名誉」であるとデーイアネイラは主張しているのである。

2.3. オンパレーの下での出来事と、ヘーラクレスの功業

一方、この「不名誉」たるイオレーと「名誉」たるイオレーの対置に至るための前段階としてあるのが、第3パラグラフ(47-118)である。ここでは、これまでのヘーラクレスの女性関係のうちアウゲー、アステュダメイア(オルメノスの孫のニンフ)、テスピオスの50人の娘たち(テウトラスの孫の群れなす姉妹たち)を挙げ(49-52¹⁷)、特に *crimen* (53)「罪」たる存在として、オンパレーを挙げ(53-54¹⁸)、そして64行にも渡り(55-118) オンパレーの下にいた際のヘーラクレスの「不名誉」たる様子について述べていく。

この55-118は、その内容面から大きく三つに分けることができる。すなわち、ヘーラクレスが「女性の装いをして糸紡ぎに従事したこと」(55-80)・「女性の装いをしているのに己の功業について語ったこと」(83-102) および、「オンパレーがヘーラクレスの装いをしたこと」(103-118)である。

ここで注目すべきなのは、これらのようなヘーラクレスが女に屈服する「不名誉」に、ヘーラクレスの武勇による「名誉」をデーイアネイラは対置して述べている、ということである。まずヘーラクレスが「女性の装いをして糸紡ぎに従事したこと」(55-80)については、その装身具が身に付けられる部位がたくましすぎるとしたりヘーラクレスに倒された相手がその様子を目にするということを想定したりする形で、「首で天を支えたこと」・「腕でネメアの獅子を絞め殺したこと」・「手で数多くの難業を達成したこと」・「ディオメーデース・ブーシーリス・アンタイオスといった悪漢を倒したこと」を対置して述べる(55-80)。また「女性の装いをしているのに己の功業について語ったこと」(83-102)については、そのような装いで語るにはふさわしくないことであるとして、ヘーラクレスが倒した相手たちのこと、すなわち、赤子の時に締め倒した二匹の蛇・エリュマントスの猪・ディオメーデース・ゲーリュオネース・ケルベロス・レルネーのヒュドラー・アンタイオス・ケンタウロスたちを挙げる(83-102)。ここでは、「不名誉」な語る様子と「名誉」ある語られる内容、すなわち語るときの装いに示される「不名誉」と語られる内容の「名誉」とを対置している。また、「オンパレーがヘーラクレスの装いをしたこと」(103-118)

¹⁷ *Her.* 9. 49-52: 「私はパルテニオスの谷で犯されたアウゲーのことや、オルメノスの孫のニンフよ、お前の出産のことを言うつもりはありません。テウトラスの孫である、群れなす姉妹たち——その群れから誰ひとりあなたと交わらずに取り残されたものはいませんが——も、あなたの罪ではありません。」

¹⁸ *Her.* 9. 53-54: 「最近の罪として、私はひとりの愛人を挙げましょう。その女から私はリュエディアのラモスの継母にされてしまったのです。」

については、そのオンパレーが奪った「名誉」¹⁹とたる装備品、すなわち、「ネメア（もしくはキタイローン）の獅子の毛皮」・「レルネーのヒュドラーの毒で黒く染まった矢」・「獣どもを圧倒する棍棒」を挙げる。ここでは、ヘーラクレスにとっては「不名誉」なオンパレーの振る舞いに、その奪われた「名誉」たる装備品を対置しているのである。

とりわけ、この「オンパレーがヘーラクレスの装いをしたこと」については、

se quoque nympha tuis ornavit Iardanis armis

et tulit e capto nota tropaea viro.

...

qua tanto minor es, quanto te, maxime rerum,

quam quos vicisti, vincere maius erat.

(Her. 9. 103-108)

イアルダノスの娘のニンフは、あなたの武具で自分を飾りもしました。囚えた男から誉れ高い戦勝品を取り上げたということです。（...中略...）万物最強の勇者よ、あなたが打ち負かした者たちよりもあなたを打ち負かすことの方が偉大だったのだから、その分だけあなたは彼女より劣るのです。

というように、「ヘーラクレスを打ち負かす」こととして、ヘーラクレスがオンパレーに屈服した²⁰ことを「不名誉」として述べている。このように、第3パラグラフの55-118においてデーイアネイラはヘーラクレスがオンパレーの下で仕えたことで生じた「不名誉」の数多くを、これまでヘーラクレスが成し遂げてきた功業とその功業による「名誉」と対置している。そしてその「不名誉」の原因たるオンパレーは「ヘーラクレスを打ち負かす」存在としても描かれている。

一方、この第3パラグラフに連なる第4パラグラフの始めでは、

haec tamen audieram; licuit non credere famae,

et venit ad sensus mollis ab aure dolor.

120

ante meos oculos adducitur advena paelex,

nec mihi, quae patior, dissimulare licet.

(Her. 9. 119-122)

けれど、これらは耳にしかけたことです。噂は信じなくても済みました。それに耳から心にやって来る苦しみは、穏やかなものです。しかし、異国の妾女が連れてこられたのは私の目の前です。現に耐えていることを、耐えていないふりをするなどできません。

¹⁹ cf. Her. 9. 109-110: 「あなたの功績を計る尺度は、彼女に移っているのです。財産を彼女に譲りなさい。その愛人があなたの誉れの相続人なのですから。」

²⁰ cf. Her. 9. 73-74: 「あなたはイオニアの娘たちの間で籠を編み、女主人の脅しにひどく怯えたと言われています。」

と述べられる。ここでデーイアネイラは、イオレーの存在はオンパレーの存在及びそこでの出来事以上に自分にとって苦痛であるとしている。これはすなわち、第 3 パラグラフで数多く挙げたヘーラクレスにとっての「不名誉」は大したことではなく、その数多く挙げられた「不名誉」以上に「不名誉」なものとしてイオレーを提示しているのである。

そして、第 4 パラグラフでの、イオレーについての言及（129-132）とそれに続く自分自身についての言及（137-142）は、第 3 パラグラフでの、「ヘーラクレスにとっての「不名誉」たるオンパレーにヘーラクレスにとっての「名誉」たる功業に関する事柄を対置する」という流れに沿ったものであるといえることができる。このような第 3 パラグラフでの流れに沿っているということからも、デーイアネイラは自分自身を、「不名誉」たるイオレーに対置する「名誉」たる存在として見なしているのである。

このように第 3 パラグラフと第 4 パラグラフはその言述の仕方という点で密接に関連している。そして第 3 パラグラフで述べられた内容以上に重大な懸念要素としてイオレーのことをデーイアネイラは提示している。とすると、第 3 パラグラフで多くの事柄が述べられれば述べられるほど、その多くの事柄以上に深刻なものとして第 4 パラグラフの内容が印象付けられる。つまり、数多くの「不名誉」な存在・出来事の中で、最も「不名誉」なものがイオレーであると提示しているのである。またそれと同時に、数多くの台無しになってしまった「名誉」に次いで、今まさに「正妻たる自分」というヘーラクレスにとっての「名誉」が失われつつあるということを示しているのである。

このように第 3 パラグラフの内容は、続く第 4 パラグラフとの連関という点で重要な位置付けがなされるのであり、そのことはデーイアネイラにとって最大の関心内容であるヘーラクレスにとっての「名誉」と「不名誉」を軸にすることで明瞭に理解することができるのである。そして結局イオレーもオンパレーも名誉の篡奪者であるという点では同じであり、第 4 パラグラフでとりわけイオレーはデーイアネイラという「ヘーラクレスにとっての名誉」の篡奪者であるということを主張し、そして改めてデーイアネイラ自身というヘーラクレスにとっての「名誉」を思い起こすように主張しているのである²¹。

3. ヘーラクレス瀕死の報が届いてからの手紙の内容とリフレイン

3.1. 夫の身を案じる自分が夫を瀕死にしたという皮肉

これまでの検討から、142 までオンパレー、イオレーへの言及を通じてデーイアネイラはヘーラクレスに、「ヘーラクレスを打ち負かしてヘーラクレスの名誉を台無しにする

²¹ この点から、Jacobson が指摘した「デーイアネイラは自分がヘーラクレスの妻であることに対して名誉と愛の両面から価値を見出しており、イオレーを愛の篡奪者として非難する一方でオンパレーを名誉の篡奪者として非難している」（本章注 5 参照）という指摘と本章は意見を異にするものである。

ものを愛するな」と訴えかけているということができる。ただしその「ヘーラクレースを打ち負かす」ということは、先に検討した 107-108 や 132 にあるように、あくまで「ヘーラクレースを虜にする」ということであつた。その一方でデーイアネイラは第 2 パラグラフ (27-46) において、

vir mihi semper abest, et coniuge notior hospes

monstraque terribiles persequiturque feras.

ipsa domo vidua votis operata pudicis

35

torqueor, infesto ne vir ab hoste cadat;

(Her. 9. 33-36)

私の夫はいつも側におらず、夫としてよりも客人としての方が身近で、怪物や恐ろしい獣どもを追いかけています。私自身は、夫のいない家で、貞淑な祈りに励み、害意ある敵によって夫が倒れはしまいかと、心を悩ませています。

と、ヘーラクレースが「身体的に打ち負かされる」ことについて心配しているともしている。そして続く 37-38 では、そのようなヘーラクレースを身体的に打ち負かしうる存在として蛇・猪・獅子・ケルベロスを挙げる²²。ここでもし武勇による「名誉」を誇るヘーラクレースが「身体的に打ち負かされること」があるとすれば、それは彼にとって最大の「不名誉」になるはずである。しかしデーイアネイラはこのようなヘーラクレースが「身体的に打ち負かされること」への心配を、続く第 3 パラグラフの始めで、

haec mihi ferre parum: peregrinos addis amores, (Her. 9. 47)

しかしこれらを耐えることはたいしたことではありません。あなたは、異国の愛人たちを加えたからです。

と述べて、念頭から外している。そのため、第 5 パラグラフの 143ff. でヘーラクレースが瀕死に陥ったとの報を受けて、「自分がヘーラクレースを身体的に打ち負かしてしまった」とデーイアネイラが知るということは、それまで「ヘーラクレースを虜にする」という側面で「ヘーラクレースを打ち負かす」者たちに関してデーイアネイラはヘーラクレースを非難してきたことのために二つの面で逆転が生じている。すなわち、「ヘーラクレースの身を案じる自分がヘーラクレースを害することになった」ということと「ヘーラクレースにとっての不名誉を非難し、自分がヘーラクレースにとっての名誉であると主張していた自分が、ヘーラクレースにとっての不名誉になりつつある」ということである。このように極めて皮肉に満ちた状況がこの手紙によって描かれているのである²³。そしてその皮肉に満ち

²² Her. 9. 37-38: 「蛇や猪や食欲な獅子や、三つの頭で食らいつこうとする犬のことばかり考えて私は翻弄されています。」

²³ この 143ff. での展開はまさに状況の「逆転」であるといえる。これはアリストテレス

た状況は、3行目の fama に基づいて行動を採るデーイアネイラに 144 行目の fama が状況の逆転をもたらす、という形で展開されているのである²⁴。

3.2. リフレインについて(1): 自害という発想に至るには

さて、*Her.* 9 における第二の問題がこの 143ff.におけるリフレインである。本節では、先に検討したヘーラクレースにとっての「名誉」と「不名誉」の視点から、143ff.の内容を検討していく。ここでまず、143-150 を引用する。

sed quid ego haec refero? scribenti nuntia venit
fama, virum tunicae tabe perire meae.
ei mihi! quid feci? quo me furor egit amantem? 145
impia quid dubitas Deianira mori?
an tuus in media coniunx lacerabitur Oeta,
tu sceleris tanti causa superstes eris?
ecquid adhuc habeo facti, cur Herculis uxor
credar? coniugii mors mea pignus erit. (Her. 9. 143-150)

しかしどうして私はこんなことを述べているのでしょうか。書いている私に、夫が私の送った衣の毒で死にかかっているとの報告が来ました。ああ、私は何ということをしてしまったのでしょうか。狂気は私の愛をどこへ駆り立てたのでしょうか。不実なデーイアネイラよ、何故お前は死をためらうのですか。それとも、お前の夫はオイテーの山中で引き裂かれようとしているのに、これほどの災難の原因でありながらお前は生き残ろうというのですか。私がヘーラクレースの妻と信じられるために、今なお一体何を私はなすべきでしょうか——妻の証となるのは、私が死ぬことなのです。

ここでデーイアネイラは、137-142 でヘーラクレースにとっての「名誉」であるとして提示した自分こそが、ヘーラクレースを瀕死に追いやることで、これまでオンパレーやイオレーに関して非難してきたことである「ヘーラクレースを打ち負かす」という状況をもたらしてしまったということを自覚する。デーイアネイラは 137-143 において自分のことを *pugnae bis causa* (138) 「二度の戦いの原因」であるとして、ヘーラクレースの武勇によって得られた「名誉」と関連付けて自分のことを表現していた。一方でこの 143-150 では、自分のことを *sceleris tanti causa* (148) 「これほど大きな災難の原因」というように、「ヘーラクレ

『詩学』第 11 章で論じられる「逆転」(περιπέτεια) に相当するとみなしてよいかもしれない。

²⁴ このような *Her.* 9 中での fama の効果については Bolton, *art. cit.*, 432-435 が的確に指摘している。

ースを打ち負かした」ということと関連付けて表現している。また先述の通りデーイアネイラは、第2パラグラフ(27-46)において、ヘーラクレスが *infestus hostis* (36)「害意ある敵」によって「身体的に打ち負かされること」を心配していた。そしてこの143-150において自分を *impia Deianira* (146)「不実なデーイアネイラ」と表現するのは、まさにこの *infestus hostis* (36)に相当するものである。これらの表現からデーイアネイラは143-150において、自分自身がヘーラクレスにとっての「不名誉」たる存在になりつつあるとみなしているのである。

デーイアネイラはこの手紙での第1パラグラフと第3パラグラフで、ヘーラクレスにとっての「不名誉」にヘーラクレスにとっての「名誉」を対置してきた。そしてそのような文脈の下で第4パラグラフでは、「不名誉」たるイオレーに対置する形で自分を「名誉」たる者として提示した。一方この第5パラグラフではデーイアネイラは自分自身を「不名誉」たる者になりつつあるとみなした。かといってデーイアネイラは、自分自身がヘーラクレスにとっての「名誉」たる者であろうとするのを辞めてはいないということが引用文から窺える。というのも、これまで「不名誉」に「名誉」を対置してきたように、デーイアネイラはここでも「不名誉」たる自分自身に「名誉」を対置しようとするが、その「名誉」もまたデーイアネイラ自身だからである。すなわちここで、*ecquid adhuc habeo facti*²⁵, *cur Herculis uxor / credar? coniugii mors mea pignus erit.* (149-150)「私がヘーラクレスの妻と信じられるために、今なお一体何を私はなすべきでしょうか——妻の証となるのは、私が死ぬことなのです。」と、自分を「ヘーラクレスの妻」(*Herculis uxor*)と述べるのは、先の第4パラグラフの137-142で提示したのと同様の、ヘーラクレスにとっての「名誉」たる者としての自分である。デーイアネイラはここで、先に検討した19-20や129-132で示したような「不名誉」が「名誉」を台無しにする」という状況と、現在の「自分がヘーラクレスを瀕死に追いやった」という事態が同様の性質のものであるとみなしているのである。そして「不名誉」たる行いをした自分を、「名誉」たる自分が排除する」ものとして、自害を決意する(*coniugii mors mea pignus erit* (150)) のである。

3.3. リフレインについて(2): 親族への言及

デーイアネイラはそれほどまでにヘーラクレスにとっての「名誉」と「不名誉」ということに関心を向けている。この143-150に続く箇所も、後述するようにそのような視点から統合して解釈することができる。150に続いて、デーイアネイラは以下のように述べる。

²⁵ ここでの *factum* (149)は、「デーイアネイラの行為」という、この文脈での意味の他に、*Her.* 9. 4, 20, 84, 105でも述べられたような、「ヘーラクレスの功業」という意味も含意されていると思われる。そしてこの *factum* (149)の含意により、「正妻デーイアネイラ」が「不名誉」に対置される「名誉」であることを暗に示していると思われる。

tu quoque cognosces in me, Meleagre, sororem!

impia quid dubitas Deianira mori?

(Her. 9. 151-152)

メレアグロスよ、あなたも、私の中にあなたの妹たる性質を認識することでしょう。不実なデーイアネイラよ、何故お前は死をためらうのですか。

ここでのメレアグロスへの言及は、決して唐突なものではない。というのも、メレアグロスは（冥界において）ヘーラクレースにデーイアネイラを紹介したという点で、ヘーラクレースにとっての「名誉」たる妻という自分の立場にも関わるからである。バッキュリデースによると、冥界を訪れたヘーラクレースに、既に亡くなって冥界にいるメレアグロスが妹デーイアネイラを紹介するという場面がある²⁶。ここでヘーラクレースはメレアグロスに、「メレアグロスと同じくらいの背丈」の娘がオイネウス家にいるかどうか尋ね、そこでメレアグロスはデーイアネイラを紹介する。この「同じくらいの背丈」とは、デーイアネイラに英雄メレアグロスと同等の気質が備わっていることを期待させるものである。すなわち、アルゴー船での冒険とカリュドーンの猪狩りに関して活躍するほどの武勇を有する英雄の妹としての気質である。このことを踏まえるならば、メレアグロスへの言及は、そのような英雄たる兄が仲を取り持った婚姻の筋を通すものであり、また英雄たる兄に相当する勇敢さでもって自害を決意をするためのものだといえる。このようにしてデーイアネイラはメレアグロスに言及し、再び *impia quid dubitas Deianira mori?* と死を促す問いかけを自らにするのである。このようなメレアグロスへの言及は、「勇敢さ」という側面²⁷からもデーイアネイラ自身がヘーラクレースにとっての「名誉」に相応しい者であることを示そうとしていると解釈できる。

また続く 153-158 も、このメレアグロスへの言及と同質のものであると思われる。

heu devota domus! solio sedet Agrios alto;

Oenea desertum nuda senecta premit;

exulat ignotis Tydeus germanus in oris;

155

alter fatali vivus in igne fuit;

exegit ferrum sua per praecordia mater.

²⁶ Bacchylides *Epinicians* 5. 165-175: “ἡ ῥα τις ἐν μεγάροις / Οἰνῆος ἀρηϊφίλου / ἔστιν ἀδμήτα θυγάτρων, / σοὶ φυὰν ἀλιγκία; / τάν κεν λιπαρὰν ἐθέλων θείμαν ἄκοιτιν.” / τὸν δὲ μενεπτολέμου / ψυχὰ προσέφα Μελέα- / γρου: “λίπον χλωραύχενα / ἐν δώμασι Δαϊάνειραν, / νῆϊν ἐτι χρυσέας / Κύπριδος θελξιμβρότου.”

²⁷ なお Ovid. *Met.* では、*Met.* 9.1-272 におけるヘーラクレースとデーイアネイラのエピソードにおいて、デーイアネイラはイオレーに厳しく対処することについて考えを巡らせながら、自らがメレアグロスの妹であることに言及する (9. 149-151: *quod si me, Meleagre, tuam memor esse sororem / forte paro facinus, quantumque iniuria posit / femineusque dolor iugulata paelice testor?*)。このことから、オウィディウスのデーイアネイラは勇敢な振る舞いに際して兄メレアグロスを強く意識する傾向があると思われる。

impia quid dubitas Deianira mori?

(Her. 9. 153-158)

ああ、呪われた家よ。アグリオスは高い王座に座り、見捨てられたオイネウスを惨めな老年が苛んでいます。弟テューデウスは見知らぬ岸边に追放されています。もう一方の兄の生命は、死に至らしめる炎の中でした。母親は剣を突き立て自らの胸を貫きました。不実なデーイアネイラよ、何故お前は死をためらうのですか。

ここでデーイアネイラは、父オイネウス、兄テューデウスの不幸に続き（153-155）、兄メレアグロスの死、そしてメレアグロスを死に至らしめた母アルタイアーの自害に言及する（156-157）。これに続いて *impia quid dubitas Deianira mori?*（158）と述べるのは、「息子を殺し自害した母」に「夫を瀕死に追いやり自害する自分」を重ね合わせるものである²⁸。ここで、王族たる自らの家族に言及しながら最終的に母の行動に倣おうとするのは、王族が身内殺しをしてしまった時に採るべき行動としてのものであり、それは「王族が採るべき行動」という側面からデーイアネイラ自身が、ヘーラクレースにとっての「名誉」に相応しい者であることを示そうとするものなのである。

3. 4. リフレインについて(3): 最後の弁明

そしてデーイアネイラはリフレインの最後のフレーズに繋がる内容として次のことを述べる。

deprecor hoc unum per iura sacerrima lecti,

ne videar fatis insidiata tuis.

160

Nessus, ut est avidum percussus harundine pectus,

‘hic’ dixit ‘vires sanguis amoris habet.’

illita Nesseo misi tibi texta veneno.

impia quid dubitas Deianira mori?

(Her. 9. 159-164)

寝床の神聖な契りにかけて、このことだけはお願いします。私があなたの破滅を謀ったなどと思わないでください。ネッソスが、貪欲な胸を矢で刺された時、この血には愛の魔力がある」と言ったのです。私があなたに送った衣には、ネッソスの毒が塗り込められていたのです。不実なデーイアネイラよ、何故お前は死をためらうのですか。

²⁸ cf. Casali, *op. cit.* ad loc. なお、このような母の自殺に倣うデーイアネイラの態度は、セネカの悲劇においても見られる。Cf. Seneca *Hercules Oetaeus* 953-955: ... natam tuam, / Althaea mater, recipe, nunc ueram tui / agnosce prolem ... また、Soph. *Trach.*におけるデーイアネイラの自殺の様子も、Her. 9.157 で述べられる母の自殺の様子と似たものとなっている。Cf. Soph. *Trach.* 930-931: ὀρῶμεν αὐτὴν ἀμφιπλήγι φασγάνῳ / πλευρὰν ὑφ’ ἧπαρ καὶ φρένας πεπληγμένην.

ここでケンタウロスのネッソスの謀略により自分がヘーラクレスに毒の衣を送ってしまったということを明らかにしておくのは、「自分がヘーラクレスを打ち負かしてしまった」という、自分がヘーラクレスにとっての「不名誉」となりつつあることの不名誉さをできるだけ小さなものにしようとするものである。ここにおいてもデーイアネイラは自分がヘーラクレスにとっての「名誉」であることに強い関心を示しているのである。そうしてリフレインの最後として死を促す問いかけをし（164）、続く 165-168²⁹ではもはや遺書のように別れの挨拶を述べるだけとなる。

以上の *impia quid dubitas Deianira mori?* というフレーズの繰り返しの前後の箇所の検討から、この *Her. 9. 143ff.* でのリフレインは、死への決意を前にしたデーイアネイラに、死の前に述べておくべきことを引き出し、またデーイアネイラが決意を強固にしていく過程を辿るものとして機能している。その述べておくべきこととは、自らができる限りヘーラクレスにとっての「名誉」たる存在であることを示すためのものなのであり、その「名誉」への関心が、最後の言葉を引き出させるものとしてリフレインをなさしめているのである。

4. 結論：Her. 9 でオウィディウスが描こうとしたデーイアネイラの手紙

以上の考察をまとめると、オウィディウスが *Her. 9* で描こうとしたデーイアネイラの手紙は次のようなものであるということが出来る。*Her. 9* において手紙の書き手デーイアネイラは、オンパレー、イオレーを、ヘーラクレスを打ち負かすヘーラクレスにとって不名誉たる者であるとして彼女らとヘーラクレスの関わりを非難し、その不名誉に対置する形でヘーラクレスに、彼のこれまでの功業で成し遂げた武勇による名誉を想起させようとしていく。そしてイオレーがその不名誉のうちで最も厄介なものであり、それに対置する形でデーイアネイラは自分自身を、ヘーラクレスにとっての名誉として提示するのである。一方、ヘーラクレス瀕死の報を受けてからは、逆に自分こそが、ヘーラクレスを身体的に打ち負かすというヘーラクレスにとって最も不名誉たる者になりつつあると自覚する。その不名誉に対して自分が、ヘーラクレスにとっての名誉であり続けるために、デーイアネイラはリフレインの表現を通じて死を決意し、リフレインの表現を用いて死の間際に名誉回復を図るのである。そのような、ヘーラクレスにとっての名誉と不名誉に一貫して強い関心を持ったデーイアネイラの皮肉な様相が *Her. 9* という手紙を通じて描かれているのである。

²⁹ cf. *Her. 9. 165-168*: 「もはや、お元気で、老いた父よ、妹ゴルゲーよ、祖国と、あなたの祖国から追い出された兄よ、私の眼に映るのも最後となる今日の光よ、夫よ、お元気で（ああ、そう適えばよいのですが）、そして息子ヒュッロスよ、お元気で。」

第3章

第12歌「メーディアからイアーソーンへの手紙」で描かれるメーディアの手紙

1. 第12歌「メーディアからイアーソーンへの手紙」の問題と本章の視座

オウィディウス『名高き女たちの手紙』第12歌 (*Her.* 12) は、メーディアがイアーソーンに宛てた手紙という形式の作品であり、エレゲイア詩形で全212行からなる。*Her.* 12の背景となる物語は、次のようなものとして知られている¹。

イオールコス王子イアーソーンは、仲間を連れてアルゴ船で黒海東端の辺境の王国コルキスを訪れる。彼は、叔父ペリアースに奪われていた王位を取り戻すために、金羊毛皮を必要としていた。コルキスの王女メーディアは彼を一目見るなり、彼に激しい恋心を抱く。一方、コルキス王アイエテースは、金羊毛皮を要求するイアーソーンに「火を吐く青銅の牡牛に軛をつけること」と「竜の牙から生え出る兵士を倒すこと」という無理難題を命じる。そこで困り果てたイアーソーンは、メーディアに助力の嘆願をする。彼に恋していたメーディアは、持ち前の魔術で彼を助け、これらの試練を無事に果たさせる。さらに、金羊毛皮は不寝番の竜が守っていたが、メーディアはこの竜を眠らせてイアーソーンに金羊毛皮を奪わせ、彼と一緒にコルキスから逃亡する。逃亡途中、弟アプシュルトスを殺害し、そしてそれゆえに彼女の叔母キルケーによる清めを受けて、そしてパイアーケス人の国での婚礼をあげて追跡者を斥ける。これらを経てイアーソーンとメーディアはイオールコスに着く。ここでメーディアは、イアーソーンの父アイソーンから王位を奪っていたペリアースを、彼の娘たちを欺いて唆すことで殺させる。この事件がもととなり、メーディアとイアーソーンはコリントスに亡命することになる。そして二人の間には二子が儲けられる。しかしやがてイアーソーンはコリントス王クレオーンの娘クレウーサとの結婚を望むようになり、メーディアを追放しようとする。それに対して彼女は復讐することを決意し、自分は追放の要求を受諾したかのように思わせておいて、魔術を施した衣でクレウーサをクレオーンもろとも焼き殺す。さらに自分とイアーソーンの子どもたちをも殺害し、竜車でコリントスを逃げ去る。

このようなメーディアとイアーソーンの物語は、エウリーピデース『メーディア』(以下、*Eur. Med.*) とアポローニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』(以下、*Ap. Arg.*) により名高いものになっている。この両作品のうち「メーディアがイアーソーンに出会いイオールコスに到着するまで」が *Ap. Arg.* で描かれ、「イアーソーンがコリントス王女クレウーサと結婚したためメーディアが報復を遂げ、コリントスを逃げ去るまで」が *Eur. Med.* で描かれ

¹ 以下に概説する物語は、*Her.* 12の先行文学作品であるエウリーピデース『メーディア』やアポローニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』、またアポロドーロスやヒュギーヌス等の物語梗概 (*Apollod. Bib.* 1. 9. 16-28, *Hyg. Fab.* 14-27) に基づいている。なおさらなる背景の詳細については、本論文末に掲載している *Her.* 12の解題を参照されたい。

ている。

一方、*Her. 12*におけるメーディアが手紙を書いた状況は、メーディアとイアーソーンがコリントスに移住してから、メーディアがイアーソーンに離縁を言い渡され（*Her. 12. 133-136*）、イアーソーンとコリントス王女クレウーサが婚礼の式を挙げた後（*Her. 12. 137-158*）というものである。

これは、「*Eur. Med.*で進行していく物語内容より「前」の状況においてメーディアが書いた手紙」であると一般的に考えられている²。このように考えられているのは、*Her. 12*のメーディア像が、「*Eur. Med.*ほどイアーソーンへの復讐の思いに囚われたものではなく、*Ap. Arg.*で描かれているようなイアーソーンを慕う気持ちを未だ残している」ものであると見なされているからである³。実際、*Eur. Med.*においてメーディアはイアーソーンを慕う（慕っていた）気持ちをほとんど表明しない⁴。その一方で *Her. 12* においては、手紙の書き手メーディアはイアーソーンに出会ったときに抱いた恋愛感情や、離縁された後でもイアーソーンの妻としての思いを抱いていたということを述べ（23-158）、そして「復縁の嘆願」と一見思われる⁵表明をするのである（183-206）。*Her. 12*におけるこれらの特徴が、*Ap. Arg.*からのメーディア像を反映するものであると考えられている。

しかし果たして *Her. 12* は「*Eur. Med.*で進行していく物語内容より「前」の状況においてメーディアが書いた手紙」であろうか。このような疑問を生じさせるものとして次の二点が挙げられる。まず第一に、*Her. 12* は *Ap. Arg.*に対応する箇所がある一方で、*Eur. Med.*での表現・内容に対応する箇所がある、ということである。そして第二に、*Her. 12* の冒頭の 1-2 の表現は、手紙としては唐突な始まり方をしており、この手紙以前の時点に何らかのイアーソーンとの「やりとり」があったということを想定させる、ということである。そしてその想定される「手紙以前のやりとり」が *Eur. Med.*において進行していく物語内容及びその表現と結び付けられるならば、*Her. 12* は「*Eur. Med.*で進行していく物語内容と「並行する」状況においてメーディアが書いた手紙」ということになる。このような点から本章では第一に、「*Her. 12*におけるメーディアが手紙を書いた状況・時点」について、特に *Eur. Med.*と比較して検討する。

また一方、*Her. 12* を「*Eur. Med.*で進行していく物語内容と「並行する」状況においてメーディアが書いた手紙」であるとするならば、さらに検討すべき問題がある。それはすな

² Davis, P. J., 'A simple girl?' Medea in Ovid *Heroides* 12. *Ramus* 41 (2012), 33-48, 34.

³ *Her. 12* のメーディア像は、「*Ap. Arg.*におけるイアーソーンに恋する若き日のもの」と「*Eur. Med.*におけるイアーソーンへの復讐を敢行する成熟したもの」の双方が現れていることが指摘されている（Jacobson, H., *Ovid's Heroides*. Princeton 1974, 109-123、Verducci, F., *Ovid's toyshop of the heart: Epistulae Heroidum*. Princeton 1985, 71.）。

⁴ *Eur. Med.*においてメーディアがイアーソーンにかつて抱いた気持ちを述べるのは、イアーソーンに過去の経緯を語る箇所（465-519）においてであるが、ここでは自分がイアーソーンを助けイオールコスまで付いて行った時の己の心境を *πρόθυμος μάλλον ἢ σοφωτέρα* (485)と述べるだけである。

⁵ このことについては本章第3節で議論する。

わち、*Her.* 12 中でメーデイアがかつての恋愛感情や妻としての思いの表現、また「復縁の嘆願」といった、「*Ap. Arg.*からのメーデイア像が反映されている」と考えられている箇所をどのように解釈するかということである。というのも、*Her.* 12 が *Eur. Med.*で進行していく物語内容と「並行する」状況ならば、メーデイアは最早イアーソーンへの復讐の遂行に心が強く傾いていると思われるため、メーデイアがイアーソーンを今なお慕っているような表明をしたり復縁の嘆願をしたりすることは、伝承上のメーデイアとイアーソーンの物語展開に整合しないものとなるからである。とすると、物語展開との整合性を重視するならば、*Her.* 12 におけるかつての恋愛感情や妻としての思いの表現は、その内容をイアーソーンに伝えることで自分が現在もイアーソーンを慕っているということを示すのではないということが予想され、また「復縁の嘆願」はイアーソーンと寄りをもたせようとしてなしているものではないということが予想される。そこで本章では第二に、*Her.* 12 におけるこのような「*Ap. Arg.*からのメーデイア像が反映されている」と考えられている箇所の解釈について検討し、第一の検討を補うものとする。

2. 手紙が書かれた物語展開上での時点について

2. 1. *Her.* 12 の構成と手紙冒頭の表現について

Her. 12 の構成をパラグラフに分けると、大きく 4 つのパラグラフに分けることができる。すなわち、

[1] 手紙の導入 (1-22)

[2] 回想①: コルキスでの Ias. との出会いからイオールコスでの Pelias 殺害まで (23-132)

[3] 回想②: コリントスにて Ias. からの離縁の命令と Ias. と Creusa の婚礼 (133-158)

[4] 現在の境遇への嘆き・「復縁への嘆願」・Creusa らへの報復の示唆 (159-212)

である。

さて、*Her.* 12 の冒頭⁶の 1-2 は以下のようになっている。

At tibi Colchorum, memini, regina vacavi,

ars mea cum peteres ut tibi ferret opem. (*Her.* 12. 1-2)

⁶ 写本伝承上ではこの 1-2 の前に、Exul, inops, contempta novo Medea marito / dicit: an a regnis tempora nulla vacant?とあるが、これは後代の interpolation であると考えるのが定説である。cf. Bessone, F., *P. Ovidii Nasonis Heroidum Epistula XII: Medea Iasoni*. Firenze 1997, ad loc., Heinze, T., *P. Ovidius Naso: Der XII Heroidenbrief: Medea an Jason mit einer Beilage die Fragmente der Tragödie Medea*. Leiden 1997, ad loc. またこのように *Her.*には冒頭に interpolation がなされる傾向があることについては、T. E. Jenkins, *Intercepted Letters. Epistolarity and Narrative in Greek and Roman Literature*. Lanham 2006, 114-122 参照。

しかし——忘れることなどできません——コルキスの王女だった私は、私の魔術があなたに助けをもたらすよう、あなたに求められた時に、時間をあなたに割きました。

この 1-2 は、手紙において一般的に冒頭でなされるはずの挨拶を欠いたものである。この 1-2 には、Ap. Arg. のメーディアの台詞における表現と対応する部分がある。ここでの *memini* (1) 「私は覚えている」という言葉が、Ap. Arg. での、メーディアがイアーソーンからの助力の嘆願を受諾して、感謝するイアーソーンにメーディアが言った以下の一節における *μνησχω* を用いた表現と対応しているのである⁷。

ἀλλ' οἷον τύνη μὲν ἐμεῦ, ὅτ' Ἴωλκὸν ἴκηαι,
μνώεο, σείο δ' ἐγὼ καὶ ἐμῶν ἀέκητι τοκήων
μνήσομαι. ...

...

ὄφρα σ' ἐν ὀφθαλμοῖσιν ἐλεγχείας προφέρουσα
μνήσω ἐμῇ ἰότητι πεφυγμένον. ... (Ap. Arg. 3. 1109-1116)

あなたがイオールコスにお戻りになったら、ただ私のことを思い出してください。私もまた、父母の意に逆らっても、あなたを思い出すでしょう。(…) あなたの目の前に現れてなじり、わたしのおかげで無事逃れたことを思い出させてあげるためです。⁸

先に引用した *Her.* 12. 1-2 は、このような Ap. Arg. でのメーディアの言動を踏まえたものである。この対応だけを見ると、*Her.* 12 のメーディア像は Ap. Arg. のメーディア像を引き継いでいるように思われ、その点から確かに *Her.* 12 は Eur. *Med.* で進行していく物語内容より「前」の状況で書かれた手紙ではないかと予想させる。ただし、この *Her.* 12. 1-2 の表現で特に注目すべきなのは、1 行目の行頭が at 「しかし」で始まることである。これは、この手紙の前に、メーディアには何らかのイアーソーンとのやりとりがあったということが想定されるものであり、そのようなやりとりを受けて、なおかつ話題を転換する⁹形で言葉を始めるものである。それではその *Her.* 12 の前のイアーソーンとのやりとりはどのようなものであると想定できるだろうか。*Her.* 12. 1-2 の内容が「しかし、かつて私があなたを助けたのです」というものであることから、ここからだけで少なくとも「助け」ということについて言及するやりとりであったと思われる。後述するように、この手紙の前に想定されるやりとりが、Eur. *Med.* で進行していく物語内容に対応するものであるならば、*Her.* 12 は Eur. *Med.* より前の状況ではなく、Eur. *Med.* と並行する状況で書かれたものということになる。

⁷ Davis, *art. cit.*, 38.

⁸ 本章での Ap. Arg. の引用文の邦訳は、講談社文芸文庫版の岡道男訳を用いた。

⁹ 冒頭が at から始まるものとしては、Verg. *Aen.* 4. 1: At regina gravi iamdudum saucia cura ... が有名なものであり、これも直前の 3 巻までの話題を転換するものである。cf. OLD s. v. 2.

2. 2. *Her.* 12 と *Eur. Med.* 446-629 との対応

そしてこの *Her.* 12 以前に物語展開上であったと想定できるイアーソーンとメーデイアのやりとりを考察する上で、注目したいのが次の *Her.* 12 と *Eur. Med.* の箇所である。

Her. 12 で注目するのは、手紙の導入部 (1-22) の最後の部分である。これは、

est aliqua ingrato meritum exprobrare voluptas:

hac fruar, haec de te gaudia sola feram. (*Her.* 12. 21-22)

私の功績を思い出させて恩知らずのあなたを非難したいという確かな望みがあります。これを私は楽しむことにしましょう。私はあなたからこの唯一の喜びを得ることにしましょう。

というように述べて、導入部を終わるものとなっている。そしてこれに続いて、

iussus inexpertam Colchos advertere puppim

intrasti patriae regna beata meae. (*Her.* 12. 23-24)

航海経験のない船をコルキスへと向けるよう命じられたあなたは、私の祖国たる美しい王国へと入って来ました。

と、コルキスでのイアーソーンとの出会いへの回想 (第 2 パラグラフ) を始める。

これら 21-24 に対応すると思われるのが、*Eur. Med.* の第 2 エペイソディオンでの、メーデイアの前にやってきたイアーソーンに対する、メーデイアの言葉 (465-519) における以下の箇所である。

... εὖ δ' ἐποίησας μολών·

ἐγώ τε γὰρ λέξασα κουφισθήσομαι

ψυχὴν κακῶς σε καὶ σὺ λυπήσῃ κλύων.

ἐκ τῶν δὲ πρώτων πρώτον ἄρξομαι λέγειν. 475

ἔσφρασά σ', ὡς ἴσασιν Ἑλλήνων ὅσοι

ταύτ' οὖν συνεισέβησαν Ἀργεῶν σκάφος, (*Eur. Med.* 472-477)

でもお顔を見せてくださって結構なことですわ、こちらあなたの悪口を言えば気が晴れましょうし、それを聞くあなたのほうはこたえるでしょうから。さあ、そもそもの初めからお話ししましょう。わたくし、あなたのお命を助けて差し上げました。これは、あのアルゴー船に乗り合せたギリシア人なら皆知っていること。¹⁰

¹⁰ 本章中での *Eur. Med.* の引用文の邦訳は、岩波版ギリシア悲劇全集の丹下和彦訳を用いた。

引用した *Her.* 12. 21-24 も *Eur. Med.* 472-477 も共に、「イアーソーンを非難すること」を宣言してから「アルゴ船」についての回想に移るものとなっている。この点において両者は構造的に明瞭に対応している。

*Eur. Med.*においても *Her.* 12 においても、各々上に引用した箇所が続いて、メーディアは過去の回想を続けていく。この回想は *Eur. Med.*においては 490 行目で一段落し、*Her.* 12 では 158 行目で一段落している。このことから、*Eur. Med.* 472-490 と *Her.* 12. 21-158 は対応していると考えられる。

一方、*Eur. Med.*において、この対応箇所の前の部分のメーディアの言葉である 465-472 は、「自分の前に現れたイアーソーンへの罵倒」¹¹であり、また一方で同様に対応箇所の前の部分である *Her.* 12. 1-20 は、「自分がイアーソーンを助けたことへの後悔の表明」¹²である。それゆえ *Eur. Med.*の第二エペイソディオンでの最初のメーディアの言葉（465-519）と *Her.* 12 全体を比較するならば、それは厳密に対応しているものではない。しかし上に引用した対応箇所を土台として、以下に検討するように *Her.* 12 全体は *Eur. Med.*の第 2 エペイソディオン（446-629）全体と、厳密ではなくとも緩やかに対応しているように思われる。ここで注目すべきなのは、*Eur. Med.*の第 2 エペイソディオンでの最後のメーディアの言葉と *Her.* 12 の最後の一節である 205-212 である。*Eur. Med.* の第 2 エペイソディオンの最後は、

χώρει· πόθωι γὰρ τῆς νεοδμήτου κόρης

αἰρήϊι χρονίζων δωμάτων ἐξώπιος.

νύμφευ· ἴσως γάρ, σὺν θεῶι δ' εἰρήσεται,

γαμεῖς τοιοῦτον ὥστε θρηνεῖσθαι γάμον. (Eur. Med. 623-626)

どうぞお行きなさい、新しい奥様のところに帰りたくてむずむずしているのに、こんなところとんだ長居をさせましたわね。その結婚、どうぞお続けなさいませ。でも神様の許しを得て申し上げておきますが、いずれこんな結婚はもうごめんだと言わせて差し上げますから。

と、イアーソーンとクレウーサの結婚を台無しにするという報復を示唆する形で終えている。一方で *Her.* 12 では、

quod vivis, quod habes nuptam socerumque potentis, 205

なお引用に際し、訳文を適宜改変している。

¹¹ *Eur. Med.* 465-472: ὃ παγκάκιστε, τοῦτο γὰρ σ' εἰπεῖν ἔχω / γλώσσηι μέγιστον εἰς ἀνανδρίαν κακόν· / ἤλθες πρὸς ἡμᾶς, ἤλθες ἔχθιστος γεγάς / [θεοῖς τε κάμοι παντί τ' ἀνθρώπων γένει]; / οὔτοι θράσος τόδ' ἐστὶν οὐδ' εὐτολμία, / φίλους κακῶς δράσαντ' ἐναντίον βλέπειν, / ἀλλ' ἡ μεγίστη τῶν ἐν ἀνθρώποις νόσων / πασῶν, ἀναίδει'.

¹² この原文と邦訳は本論文末に補遺として収めている対訳を参照されたい。

hoc ipsum, ingratus quod potes esse, meum est.
 quos equidem actutum —sed quid praedicere poenam
 attinet? ingentis parturit ira minas.
 quo feret ira, sequar! facti fortasse pigebit;
 et piget infido consuluisse viro. 210
 viderit ista deus, qui nunc mea pectora versat!

nescio quid certe mens mea maius agit. (Her. 12. 205-212)

あなたが生きていることも、権勢ある家の花嫁と舅を得ていることも、またあなたが恩知らずでいられることすらも、私のおかげなのです。確かに彼らをすぐにでも——しかし罰を前もって言っても何になるでしょう。この怒りは大いなる脅威を孕んでいます。怒りが導く所へ私は付き従いましょう。おそらく私は自分の行いを後悔することになるでしょう。しかし今後悔しているのは不実な夫を助けたことです。いま私の胸をかき回している神がその行いを見そなわしますように。私の心は確かに、何か知らない、いつそう大きなことを計り巡らしているのです。

と、こちらも同様に、クレウーサたちへ害をなすという報復を示唆するかたちで手紙を終えているのである。またさらにこの両箇所では、Eur. Med. では σὺν θεῶι δ' εἰρήσεται (625)、Her. 12 では viderit ista deus (211) というように、神に言及するという形での表現上の対応もある。ここから、第2 エペイソディオンでのメーデイアの最後の言葉である Eur. Med. 623-626 と Her. 12 の手紙の締めくくりである Her. 12. 205-212 は対応しているといえる¹³。それゆえ、Eur. Med. の第2 エペイソディオン (446-629) に Her. 12 全体が、内容面全てにおいて厳密に対応しているわけではないが、「非難としての回想に始まり、報復の示唆によって終わる」という流れにおいては対応していることが分かる。そしてこの対応から次のことを類推することができる。すなわち、Eur. Med. 623-626 での報復の示唆が、続く物語展開上のメーデイアの行動に繋がっていくのと同様に、Her. 12. 205-212 での報復の示唆も、後続する物語展開上のメーデイアの行動を強く意識させるものとなっているということである。この Her. 12. 205-212 での手紙の終わり方も、冒頭の Her. 12. 1-2 の始まり方と同様に唐突さを感じさせる終わり方である。しかし一方でそのことは、Her. 12 が、メーディアとイアーソーンの物語が進行していく途中での一場面を描くものであるという印象を強めるものであり、Her. 12. 205-212 以降の物語展開を想定させるのと同様に Her. 12. 1-2 以前のメーディアとイアーソーンのやりとりも想定させるものなのである。

¹³ もちろん、Her. 12 の末尾である 207-212 は、指摘されているように (Bessone, *op. cit.*, ad loc.)、Eur. Med. 1019-1080 のいわゆるメーディアの great monologue (cf. Mastronarde, D. J., *Euripides Medea*. Cambridge 2002, 388-397) における θυμός (1057, 1079) に ira (208, 209) や mens (212) が対応するものでもある。これについても後述する。

向かってイアーソーンに述べるところの言葉」を、*Her.* 12 では手紙という形で述べるものになっているのである。

3. *Her.* 12 における、メーディアの手紙執筆の意図

さて、*Her.* 12 が *Eur. Med.* 以前の時点でメーディアが書いたものではなく、*Eur. Med.* での劇中の展開と並行する形でメーディアが書いたものであることを確認した。これを踏まえると、*Her.* 12 中には、手紙の執筆意図との関連から、改めて考察しなければならない表現箇所がある。それはつまり、これまで *Ap. Arg.* からのメーディア像が反映されていると考えられていた¹⁵、イアーソーンへのかつての恋心や妻としての思いの詳述や、「復縁の嘆願」と見なされている箇所についてである。というのも先述のように、*Eur. Med.* におけるメーディアはもはやイアーソーンにそのような恋愛感情や妻としての思いを有しているとは捉え難く、またイアーソーンに復縁の嘆願をすることもないからであり、*Her.* 12 のメーディアが *Eur. Med.* の劇中の展開と並行するものであるならば、そのような *Eur. Med.* におけるメーディア像との関連で *Her.* 12 の上述のような箇所も捉えなおされなければ、物語との整合性に齟齬が生じるからである。

3. 1. *Her.* 12 での、かつてのメーディアの恋愛感情の表現

それでは問題の箇所の議論に移る。まずは *Her.* 12 においてメーディアがかつてのイアーソーンへの恋愛感情を詳述する箇所である。*Her.* 12 の第 2 パラグラフにおいて、メーディアはイアーソーンへの恋に落ちた様子を次のように表現する。

tunc ego te vidi, tunc coepi scire, quis esses;

illa fuit mentis prima ruina meae.

et vidi et perii nec notis ignibus arsi,

ardet ut ad magnos pinea taeda deos.

et formosus eras, et me mea fata trahebant:

35

abstulerant oculi lumina nostra tui.

perfide, sensisti: quis enim bene celat amorem?

eminet indicio prodita flamma suo.

(*Her.* 12. 31-38)

その時私はあなたを見ました。その時私はあなたが誰であるかを知り始めました。それは私の心の崩壊の始まりでした。私はあなたを見て、生きていられなくなり、知りもしなかった火によって燃えました。ちょうど、偉大なる神々へと捧げる松明が燃えるかのように。あなたは美しく、私の運命は私を引き摺り始めました。あなたの目が私の視線

¹⁵ 本章注 3 参照。

を奪い去っていたからです。裏切り者よ、あなたは感付いていました。実際、誰が上手に愛を隠せるでしょうか。炎は自らの徴候に裏切られて目立っていました。

ここではこのように、己の恋心を炎になぞらえて表現している。このようなかつての己の恋心への言及は Eur. Med. においてはなく、この一節は Ap. Arg. において、エロースがメーデシアに恋の矢を射る以下の箇所¹⁶と、炎を用いた表現の上で対応している。

τόφρα δ' Ἑρως πολιοῖο δι' ἡέρος ἴξεν ἄφαντος,
τετρηχῶς, οἷόν τε νέαις ἐπὶ φορβάσιν οἷστρος
τέλλεται, ὃν τε μύωπα βοῶν κλείουσι νομῆες.
ῶκα δ' ὑπὸ φλιήν προδόμῳ ἐνὶ τόξῳ τανύσσας
ιοδόκης ἀβλήτα πολύστονον ἐξέλετ' ἰόν.
ἐκ δ' ὄγε καρπαλίμοισι λαθὼν ποσὶν οὐδὸν ἄμειψεν
ὀξέα δενδίλλων: αὐτῷ ὑπὸ βαιὸς ἐλυσθεῖς
Αἰσονίδη γλυφίδας μέσση ἐνικάτθετο νευρῇ,
ἰθύς δ' ἀμφοτέρησι διασχόμενος παλάμησιν
ἦκ' ἐπὶ Μηδείῃ: τήν δ' ἀμφασίη λάβε θυμόν.
αὐτὸς δ' ὑπορόφοιο παλιμπετέες ἐκ μεγάροιο
καγχαλόων ἤϊξε: βέλος δ' ἐνεδαίετο κούρη
νέρθεν ὑπὸ κραδίῃ, φλογὶ εἴκελον: ἀντία δ' αἰεὶ
βάλλεν ὑπ' Αἰσονίδην ἀμαρύγματα, καὶ οἱ ἄηνητο
στηθέων ἐκ πυκινὰ καμάτῳ φρένες, οὐδέ τιν' ἄλλην
μνηστὶν ἔχεν, γλυκερῇ δὲ κατεῖβετο θυμόν ἀνίη.
ὥς δὲ γυνὴ μαλερῷ περὶ κάρφεα χεύατο δαλῶ
χερνῆτις, τῇ περ ταλασῆια ἔργα μέμηλεν,
ὥς κεν ὑπωρόφιον νύκτωρ σέλας ἐντύναιτο,
ἄγχι μάλ' ἐγρομένη: τὸ δ' ἀθέσφατον ἐξ ὀλίγοιο
δαλοῦ ἀνεγρόμενον σὺν κάρφεα πάντ' ἀμαθύνει:
τοῖος ὑπὸ κραδίῃ εἰλυμένος αἵθετο λάθρη
οὖλος Ἑρως: ἀπαλὰς δὲ μετετρωπᾶτο παρειὰς
ἐς χλόον, ἄλλοτ' ἔρευθος, ἀκηδείῃσι νόοιο.

(Ap. Arg. 275-298)

その間エロスは灰色の大気を通り抜け、誰にも気づかれずに荒々しく降りてきた。その

¹⁶ Eur. Med. ではメーデシア自身が述べない代わりにイアーソーンがエロースについて指摘する。Eur. Med. 526-531: ἐγὼ δ', ἐπειδὴ καὶ λίαν πυργοῖς χάριν, / Κύπριν νομίζω τῆς ἐμῆς ναυκληρίας / σώτειραν εἶναι θεῶν τε κἀνθρώπων μόνην. / σοὶ δ' ἔστι μὲν νοῦς λεπτὸς— ἀλλ' ἐπίφθοнос / λόγος διελθεῖν, ὥς Ἑρως σ' ἠνάγκασεν / τόξοις ἀφύκτοις τοῦμόν ἐκῶσαι δέμας.

ありさまは、牛飼がうしばえとよぶ虻が草をはむ若い雌牛に襲いかかる時にかくやと思われた。彼は戸口のまぐさの下で素早く弓を張り、一度も使っていない、苦痛に満ちた矢を箆から抜き取ると、四方に鋭い眼を配りながら密かに急ぎ足で敷居をまたいだ。それからアイソンの子のすぐ足もとに低くうずくまり、矢はずを弦の中ほどに当て、両手で弓を引き絞り、メデイアにまっすぐ狙いを定め、矢を放った。乙女は心を奪われて口がきけなくなった。エロスは高い屋根の広間から高笑いしながら外へ飛び出した。矢は深く乙女の胸の中で炎のように燃えた。彼女はきらきら光る目をまっすぐにアイソンの子に向かってたえず投げ、理性は苦痛にゆれて胸の外に追われた。彼女はほかに何も考えることができず、魂は甘い苦悩にあふれた。ちょうど、糸をつむぐ手間賃かせぎの女が早々と起き、まだ夜のうちに屋根の下にあかりをともしため、くすぶる燃えさしのまわりに枯れた小枝をつみ上げると、小さい燃えさしからすさまじい炎が起こり、小枝をことごとく灰にするよう——そのように胸もとに恐ろしい恋がうずくまり、ひそかに燃えた。心は千々に乱れ、やさしい頬は青ざめるかと思えば、紅に染まった。

ここでの対応と、また *Her. 12* にはこのようなメーディアのかつての恋心を詳述する表現がない¹⁷ことから、確かに *Her. 12. 31-38* では *Ap. Arg.*におけるメーディア像が反映されているといえるかもしれない。しかしここで確認しておきたいのは、*Her. 12* の方はあくまでメーディアによる「当時の心境の回想」であり、そのことが直接手紙を書いているメーディアの現在の心境に結びつくというわけではないことである。*Her. 12* の第 2 パラグラフ (23-132) と第 3 パラグラフ (133-158) では、このような己の恋心の表現に続きメーディアがイアーソーンを気遣い、また離縁を言い渡された後も妻としての矜持を有していたことを述べていくが、同様にこれらは当時の心境を詳述しているだけである。そして、この当時の心境の詳述は最終的に、第 4 パラグラフにおける、

deseror, amissis regno patriaue domoque,

coniuge, qui nobis omnia solus erat!

(*Her. 12. 161-162*)

私は王家も祖国も家も失ったのに、私にとって唯一で全てのものだった夫に捨てられたのです。

という表明に収斂することになる。これに引き続き *Her. 12* の第 4 パラグラフでは、177 まですなわち、メーディアは回想において自分がいかにイアーソーンを愛していたか、いかにイアーソーンに尽くしてきたかを詳述することによって、現在の離縁という状況に至らしめたイアーソーンの行動がいかに酷いものであるかを示しているのである。そのようにイアーソーンが現在自分になしている酷さを示すことに結び付けるために、かつての

¹⁷ 本章注 4 参照。

恋心や妻としての思いは詳述されているのである。つまり、そのようなかつての気持ちを表明することは、イアーソーンに哀れんでもらったり寄りを戻そうとしてもらったりするためになされているものではないのである。これらは結局イアーソーンを強く非難するための前段階として述べているのであり、かつての恋心や妻としての思いの詳述は、続く現在の状況への嘆きと合わせて、全体としてイアーソーンへの非難であると解釈すべきもののなのである。Eur. Med. 465-519 でメーディアはかつての恋心等をほとんど述べずにイアーソーンを非難する¹⁸が、結局のところイアーソーンを非難するという点では Eur. Med. 465-519 と Her. 12. 1-177 は同質のものであり、それゆえこの点において Her. 12 のメーディアは Eur. Med. のメーディアと同じ性質を有するものである。

3. 2. 「復縁の嘆願」について

続いて検討するのは、メーディアが「復縁の嘆願」をしていると考えられている Her. 12. 183-207 である。この箇所ですべて確認しておきたいのは、以下の「涙」に関する表現である。

si tibi sum vilis, communis respice natos:

saeviet in partus dira noverca meos.

et nimium similes tibi sunt, et imagine tangor,

et quotiens video, lumina nostra madent. (Her. 12. 187-190)

私があなたにとって価値がなくとも、血を分けた息子たちを気遣ってください。酷い継母が私の産んだ子供たちに辛くあたるでしょうから。そして子供たちはあまりにもあなたに似ており、その姿に私は打たれます。目にする度に私の両眼は涙に濡れるのです。

これは、Eur. Med. において、イアーソーンに偽りの和解をなそうとする第 4 エピソードでの以下の表現に対応している。

Ἰά. αὐτή, τί χλωροῖς δακρύοις τέγγεις κόρας,

στρέψασα λευκὴν ἔμπαλιν παρηίδα;

κοῦκ ἀσμένη τόνδ' ἐξ ἐμοῦ δέχῃ λόγον;

Μή. οὐδέν. τέκνων τῶνδ' ἐννοουμένη πέρι.

925

Ἰά. θάρσει νυν· εὖ γάρ τῶνδ' ἐγὼ θήσω πέρι.

Μή. δράσω τάδ'· οὗτοι σοῖς ἀπιστήσω λόγοις·

γυνὴ δὲ θῆλυ κάπῃ δακρύοις ἔφυ.

Ἰά. τί δῆτα λίαν τοῖσδ' ἐπιστένεις τέκνοις;

Μή. ἔτικτον αὐτούς· ζῆν δ' ὅτ' ἐξηύχου τέκνα,

¹⁸ 本章注 4 参照。

ἐσὴλθέ μ' οἶκτος εἰ γενήσεται τάδε.

(Eur. Med 922-931)

[Ias.] お前、どうして瑞々しい涙で瞳を濡らしているのだ、白い頬を後ろに背けて。お前はこの言葉を私から喜んで受け取ってくれないのか。[Med.] なんでもありません。この子たちについて考えていて。[Ias.] さあ、安心しろ。俺がこの子たちには良くしてやるのだから。[Med.] あなたの言うとおりにしましょう。あなたの言葉を信じないのではないのです。でも女は弱いものでして、生まれつき涙もろいのです。[Ias.] 一体どうしてこの子たちに関してそれほどまでに嘆くのだ。[Med.] この子たちを産んだからです。子供たちが元気であるようあなたが祈っていた時、そうなってくれるだろうかという悲しい気持ちがあったのです。

この Eur. Med.での涙は、対峙するイアーソーンに「自分が子供たちを殺すつもりである」という本心を明かすことなく流す涙である。一方、Her. 12. 187-190 での涙に関する表現は、このような「子殺し」の意図を内に秘めてなされたものであるかは明瞭ではない。ただし少なくとも、「自分の本心からは程遠い、和解をしようとする表現」という点において両表現は同質であると思われる。というのも、このような「自分の本心とは程遠い」ということを「復縁の嘆願」の冒頭で明確に宣言しているからである。

Quod si forte preces praecordia ferrea tangunt,

nunc animis audi verba minora meis!

tam tibi sum supplex, quam tu mihi saepe fuisti,

185

nec moror ante tuos procubuisse pedes.

(Her. 12. 183-186)

しかしもしひょっとして懇願が鉄の胸を打つならば、今この私の心にとって小さすぎる声を聞いてください。あなたがしばしば私に嘆願したのと同じように、私はあなたに嘆願しております。私はあなたの足元にひざまずくのもためらいません。

ここでの animis (184)は、Eur. Med.の第5 エペイソディオンでメーデイアが子殺しを決意する際の以下の表現における、

καὶ μανθάνω μὲν οἷα δρᾶν μέλλω κακά,

θυμός δὲ κρείσσων τῶν ἐμῶν βουλευμάτων,

ὅσπερ μεγίστων αἴτιος κακῶν βροτοῖς.

(Eur. Med 1078-1080)

自分がどれほど非道いことをしようとしているか、理解してはいる。しかし怒りが私の計画を支配しているのだ、人の身にとってこの上なき禍の原因たる怒りが

θυμός (1079)に相当するものである。そして Her. 12. 185 以下から「復縁の嘆願」が展開されていくが、これは 184 にあるように animis verba minora meis「私の心にとって小さすぎる声」

なのである。ここでの *animis... meis* はその直前のクレウーサへの報復の示唆や、θυμός との対応から、報復の意図を示唆するものであるといえる。そしてそれはメーディアの心境の大部分を占めているのに対し、ほんのごくわずかに心境にあるものとして、復縁の嘆願をする言葉が *verba minora* なのである。すなわちこれに続く「復縁の嘆願」とは、「まだ嘆願を望む気持ちが自分にわずかでも残っているならば、次のような内容である」というような、仮定的・想定的な自分の気持ちについての言及なのである。そしてそれは「小さすぎる」ゆえに、この嘆願の箇所の最後において、

quod vivis, quod habes nuptam socerumque potentis, 205

hoc ipsum, ingratus quod potes esse, meum est.

quos equidem actutum —sed quid praedicere poenam

attinet? ingentis parturit ira minas.

(Her. 12. 205-208)

あなたが生きていることも、権勢ある家の花嫁と舅を得ていることも、またあなたが恩知らずでいられることすらも、私のおかげなのです。確かに彼らをすぐにでも——しかし罰を前もって言っても何になるでしょう。この怒りは大いなる脅威を孕んでいます。

というように中断されることになり、再び報復の示唆にメーディアは移るのである。これは結局、183-208 の流れ全体において、「嘆願を願う自分の気持ちはたとえ残っていても小さすぎて復讐心に押しつぶされるものである」ということを示しているのである。それゆえ手紙最後の 212 では、*nescioquid* certe mens mea *maius* agit というように、*verba minora* (184) と *nescioquid maius* が、*minora* と *maius* という対を示す形でメーディアは報復を示唆している。

以上をまとめると次のようになる。Eur. *Med.* の第 4 エピソード（866-975）でメーディアがなそうとするのは「偽りの和解の試み」であり、Her. 12. 183-207 は「結局復讐心に押し潰されることになる、復縁嘆願の思い」である。これらの、Eur. のメーディアが和解の言葉を述べたり Her. 12 のメーディアが復縁嘆願の言葉を述べるというのは、双方ともメーディアにとって本質的な気持ちから為される言述ではないという点で共通するものである。この点において Her. 12. 183-207 は巧みに Eur. *Med.* 866-975 を変容させて取り込んでいく。そしてこの点においても、Her. 12 のメーディアは Eur. *Med.* のメーディアと共通する特質を示しているのである。

そして上述の引用のように手紙は結局、クレウーサたちへの報復の示唆で終わる。このことから、Her. 12 の手紙のメーディアの執筆意図は、もはや自分は報復行動に移るということを告げる、いわば「最後通牒」を意図してのものなのである。「最後通牒」の目的は、相手がほとんど受け入れる可能性がない条件を示しながら、受け入れないなら、自分はこの行動を取らざるを得ない、と相手に対して自分の行動を正当化することにある。ここでは、復縁することがイアーソーンの「受け入れる可能性がない条件」であり、クレウ

ーサたちへの報復が通告して正当化する行為である。これは、手紙の分量の多くがイアーソーンへの尽力、つまり、「正しい」行為を述べていたこととも整合する。なお、もちろんこの *Her.* 12. 207-212 の表現には、物語展開を知っている読者には分かる形で、*nescioquid maius* (212)にクレウーサたちへの報復だけでなくメーディアの「子殺し」が含意されていると考えることができる。

4. 結論： *Her.* 12 でオウィディウスが描こうとしたメーディアの手紙

以上の考察をまとめると、オウィディウスが *Her.* 12 で描こうとしたメーディアの手紙は次のようなものであるといえる。 *Her.* 12 は、「*Eur. Med.*で進行していく物語内容と「並行する」状況においてメーディアが書いた手紙」である。そして *Her.* 12 のメーディア像は *Eur. Med.*と共通する性質のものであり、イアーソーンを非難し、復縁の道もはやないということを自覚して、イアーソーンに自分はもうクレウーサたちへの報復をするしかない状態であるということを通達することをメーディアが意図して書いた手紙なのである。

第4章

第13歌「ラーオダメイアからプロテシラーオスへの手紙」で描かれるラーオダメイアの手紙

1. 第13歌「ラーオダメイアからプロテシラーオスへの手紙」の問題と本章の視座

オウィディウス『名高き女たちの手紙』第13歌 (*Her.* 13) は、ラーオダメイアが夫プロテシラーオスに宛てた手紙という形の作品であり、エレゲイア詩形で全166行からなる。*Her.* 13の背景となる物語は、次のようなものとして知られている¹。

テッサリアの都市ピュラケーの王プロテシラーオスは、ラーオダメイアとの結婚後すぐにトロイアに出征することになる。ギリシア人たちの間では、「トロイアに最初に上陸した者は死ぬことになる」という神託が下されており、この神託通りに彼はヘクトールに殺される。新婚でありながらすぐに死別することになった二人を憐れんだ神々は、プロテシラーオスを一時的に冥界から連れ戻し、再会させる。この後、彼は再び冥界に連れて行かれる。ラーオダメイアは、夫との別離の苦しみに耐えられず、夫そっくりの像を造り、その像を寝室に置き慈しむようになる。それを知った彼女の父は、像を焼き捨てようとするが、彼女はその火中に身を投じて自殺する²。

Her. 13はこの物語を背景としており³、「トロイアに向けて出発した夫プロテシラーオスに宛ててラーオダメイアが書いた手紙」という形のものとなっている。ここで全体の構成を大きく4つのパラグラフに分け、さらにその内容の概要を示すと、次のようになる⁴。

[1] 手紙の導入と夫プロテシラーオス出発時のことの回想 (1-42)

挨拶の言葉を述べた後、出港するプロテシラーオスを見送った時のことを回想する。未練を残したままの別れとなってしまったこと (1-14)、船をいつまでも見送り、

¹ 以下に概説する物語は、Hyginus *Fabulae* 103-104に基づいている。これは、散逸した Euripides *Protesilaus* (fr. 646a-657 Kannicht)の筋に沿っているとされる。

² Apollodorus *Epitome* 3.30では、ラーオダメイアは夫の死後、夫との再会の前に像を作って慈しんでいる。なお、プロテシラーオスとラーオダメイアの物語の伝承は Hom. *Il.* 2.695-702にまで遡る。ここではトロイア戦争においてプロテシラーオスが故郷に妻を残したままで死んだことが簡略に述べられている。また *Cypria* においてもプロテシラーオスの死が述べられていたと考えられる。これらについては岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』創文社、1988、219-222参照。

³ Jacobson, H., *Ovid's Heroides*, Princeton 1974, 198, Fulkerson, L., (Un)sympathetic Magic: a Study of *Heroides* 13, *AJPh* 123 (2002), 61-88, esp. 64は、*Her.* 13が Eur. *Protesilaus* に多くを負っていることを指摘している。

⁴ なお、オウィディウス以前のラテン文学作品において、この物語は Catul. 68.73-85, 105-130, Prop. 1.19.7-10で付随的に言及される。これについては、Lyne, R. O. A. M., *Love and Death: Laodamia and Protesilaus in Catullus, Propertius, and others*, CQ 48 (1998), 200-212参照。また、Catul. 68におけるこの物語の扱いの考察は、高橋宏幸『ギリシア神話を学ぶ人のために』世界思想社、2006、272-277に詳しい。

その後で気を失ったこと (15-30)、そして身なりを気にせずさまよい、夫の労苦を思
って過ごしていること (31-42) を述べる。

[2] 夫への忠告と、夫に関係する者たちへの呼びかけ (43-102)

メネラーオスやヘレネー、パリスやヘクトールについて述べ、トロイアについて恐
れ、神々に夫の無事を願ったりトロイア人たちに夫を容赦するよう願ったりする
(43-62)。また不吉な予兆を恐れ、夫自身にも敷居に躓くという予兆があったこと、
ギリシア人たちにも「トロイアの地を最初に踏む者」に悲惨な運命が待ち構えてい
るという神託があったことを述べ、夫は決して戦に逸ることのないよう、トロイア
には最後に上陸するよう忠告する (63-102)。

[3] 夫がいないことによる己の振る舞いと、理想的な情景の想像 (103-158)

夢で夫に会おうとし、夢での夫の姿に疑問を感じたことと、夫との再会の理想的な
様子の想像を述べる (103-122)。またギリシア人たちに神が出港を禁じているとして
帰って来るよう忠告する (123-136)。そして戦場のトロイア人夫婦の様子について想
像し (137-148)、それに対し自分は、夫そっくりの蠟像を夫の代わりとしていること
を述べる (149-158)。

[4] 誓いの言葉と手紙の結び (159-166)

夫が行くところにはどこにでもついていくと誓い、自分を気遣うなら夫自身を気遣
うよう忠告し、手紙を終える。

プローテシラーオスとラーオダメイアの物語では「死後の再会」と「像への献身」とい
うモチーフが特徴的であるため、この *Her.* 13 でしばしば問題とされているのが、「夢」と
「像」の叙述 (107-114, 151-158) である。*Her.* 13 においてラーオダメイアは、*Aulide te fama
est vento retinente morari*; (3) 「噂では、風が引き止めるせいであなたはアウリスで留まってい
るとのことです」⁵と、夫はまだトロイアに着いていないと想定している。にもかかわらず、
彼女は夢で死んだような様子の夫に会ったことと、既に夫の像を作り愛でていることを述
べている。これについて先行研究では、背景となる物語との関連で解釈が二つに分かれて
いる。一つは、「彼女が夢で会った夫はあくまで彼女の空想の産物である」・「夫の像を作る
のに夫の死というきっかけは必要なかった」とする解釈である⁶。もう一つは、「夫は既に死
んでおり夢を通じて彼女に会いに来ているが、彼女は死んだ夫自身だと気付かない」・「彼
女が夫の像を既に作っているのは、temporal marker として既に夫が死んでいることを示して

⁵ 本稿で引用するテキストは、Rosati, G., *Ovidio: Lettere di eroine*, Milan 2008⁵ (1st ed. 1989)を
である。なお、一行目の punctuation のみ、Reeson, J., *Ovid Heroides 11, 13, and 14. A Commentary*,
Leiden 2001 を採用した。訳文は拙訳である。

⁶ 代表的なものとして、Jacobson, *op. cit.*, 211-212. Jacobson は特に、「死後の再会そのものが
ラーオダメイアの一方向的な想像に過ぎないものだった」というように、オウィディウスが
神話を修正しているとする。

いる」とする解釈である⁷。

これらの解釈が問題としているのは、「*Her. 13* のラーオダメイアはどのような状況下におかれているか」ということである。一方で本章では、これら先行研究の二つの解釈のいずれかを支持するためのものではない。「ラーオダメイアの視点」でのみ描かれている *Her. 13* からだけでは、「彼女が手紙を書いた時点」でのプローテシラーオスの生死を確定することはできないと思われるからである。それよりもむしろ、*Her. 13* は「ラーオダメイアの視点」でのみ描かれているということをさらに深く掘り下げて、「ラーオダメイアはどのような意図・態度・心理に基づいて「夢」と「像」について叙述しているのか」ということを明確にすることが、*Her. 13* のより良い解釈に繋がるとと思われる。

ここで議論の土台を為すものとして、*Her. 13* におけるラーオダメイアの、夫への態度が象徴的に現れている冒頭の表現を検討する。

Mittit —et optat amans quo mittitur ire— salutem

Haemonis Haemonio Laodamia viro.

(*Her. 13. 1-2*)

テッサリアのラーオダメイアが、テッサリアの夫に健康を送ります。送られたところへ届くよう、愛する心で願っています。

これは挨拶の言葉でありながら、挿入句の内容からも窺えるように、「健康」が届くことすなわち夫が戦で死なずに生きて帰ることをまさに願うものである。ここでの *salutem mittit* という表現は、「差出人が宛名人に「挨拶を言う」(*salutem dicit*)」という表現と同様に手紙冒頭で用いる定型的な挨拶の文句である。しかしここでは、その *mitto* 「送る」という表現が *et optat amans quo mittitur ire* 「送られるところへ届くよう愛する心で願っている」という挿入句で強調されることから、単なる定型的な挨拶の文句というよりは、文字通り *salus* 「健康」を夫プローテシラーオスのもとに送ることに力点が置かれている。しかし一方で、ここでの *optat* 「願っている」という表現は、「健康」が無事届けられるかどうか分からないという不安——すなわちトロイア戦争に出征しているという夫プローテシラーオスの現状において、夫が本当に無事 (*salus*) な状態でいられるかどうか分からないという不安からなされるものと読み取ることもできる。実際、後述するように、*Her. 13* には、「夫の死の運命」を彼女が察知していることを窺わせる叙述が多くある。この、「夫の死の運命」を認識しながらでの、「夫は無事に生きて帰って来る」という彼女の願いは、問題の「夢」と「像」の叙述にも反映されているのではないだろうか。本章ではこのような観点から、*Her. 13* における「夢」と「像」についての叙述を、「ラーオダメイアの願い」という視点から解釈する

⁷ 代表的なものとして、Reeson, *op. cit.*, 114-115, 171-175, 203. Reeson は、*Apollod. Epit. 3.30* での、ラーオダメイアが夫との再会の前に既に像を作っているという内容を「ラーオダメイアは夫の死を知らないまま像を作り、死後の再会の際も彼女は夫がトロイアから生きて帰って来たと思った」と解釈し、オウィディウスもその内容を *exploit* したとする。

のを試みる。

2. 夢で見た夫の姿

まず、問題とされていることの一つである、夫の現れる「夢」に関する叙述を検討する。ラーオダメイアは、「夫のことが昼も夜も苦しみとして心に浮かんで来るが、その苦しみは共寝ができないことを実感させる夜の方が大きい」ということを述べた後（103-106⁸）、次のように述べる。

aucupor in lecto mendaces caelibe somnos;
dum careo veris, gaudia falsa iuvant.
sed tua cur nobis pallens occurrit imago?
cur venit a verbis multa querela tuis? 110
excutior somno simulacraque noctis adoro;
nulla caret fumo Thessalis ara meo:
tura damus lacrimamque super, qua sparsa relucet,
ut solet adfuso surgere flamma mero. (Her. 13. 107-114)

夫のいない寝床で、私は嘘つきの夢を得ようと求めます。本当の喜びを欠きながらも、うわべだけの喜びが私を満足させるのですから。でも、どうして私の前に現れるあなたの姿は青ざめているのでしょうか。どうしてあなたの言葉からは長々とした悲嘆が出てくるのでしょうか。私は夢から振り落とされ、夜の霊に祈ります。テッサリアの祭壇で、私の捧げ物の煙を欠くものはひとつもありません。お香を捧げその上に涙がこぼれると、振り撒かれた涙で炎は再び輝き出します。ちょうど生酒が注がれるといつも炎が立ち上がるように。

ここで *dum careo veris, gaudia falsa iuvant* (108) という表現は、この時に見た夢の内容を表しているというよりは、これから見ようと願う夢の性質を述べていると解釈すべきであろう⁹。その願いが裏切られるという形で、実際に見た夢の内容が 109 以下で *sed...* と続くのである。

さて、109-110 において、*pallens* (109) という語から¹⁰、ラーオダメイアは「死んだような様子の夫」に夢で会っているのは間違いない。それゆえ *imago* を「幻・幽霊」の意味で解

⁸ Her. 13. 103-106: *sive latet Phoebus seu terris altior exstat, / tu mihi luce dolor, tu mihi nocte venis; / nocte tamen quam luce magis: nox grata puellis / quarum suppositus colla lacertus habet.*

⁹ ただし Reeson, *op. cit.*, 174-175, 182-183 は、これをラーオダメイアとプローテシラーオスが愛の交わりを遂げたかのように解釈している。

¹⁰ *pallens* やそれと同根の *palleo* や *pallor* はしばしば死者の姿を形容するのに用いられる。Cf. Verg. *Georg.* 1.477, Ovid. *Met.* 11.691, Apul. *Met.* 8.8.

釈することもできよう¹¹。しかし、そのように解釈するならば、*sed tua cur nobis pallens occurrit imago?* (109)は、*sed tu cur nobis pallens occurris imago?*「でも、どうしてあなたは青ざめた幻で私の前に現れるのですか」と述べられるべきではないだろうか。というのも、これならば *pallens imago* が *tu* と述語的同格になり、彼女が疑問を感じるのは「夫が幻であること」になるからである。しかし 109 では、*tua imago* の述語的同格として *pallens* と述べられている。すなわち、彼女が疑問を感じるのは「*tua imago* が青ざめていること」である。とすると、引用文の訳にも示したように *imago* (109)は「姿」の意味で解釈することに妥当性が出てくる。

もちろん、彼女が「夢で見るのは実体のない幻だ」と最初から想定していれば *imago* (109)を「幻」として「どうしてあなたの幻は青ざめているのか」と解釈できるかもしれない。しかし直前の *dum careo veris, gaudia falsa iuvant* (108)という表現は「夢で夫と愛の営みを交わしたい」と読み取れるものである以上、彼女がそのような想定の下にあったとは考えにくい。また、ここでの *imago* (109)が *double meaning* として「幻・幽霊」を含意することは十分に考えられる。そうであっても、それはオウィディウスが暗示として含ませた意味であり、手紙の書き手ラーオダメイアの意図する意味としては「姿」だけであろう。このように夫の姿が *pallens* であり死を窺わせることから、並列的に続く 110 の *multa querela*「長々とした悲嘆」についても、彼女は「夫の死を窺わせるもの」として捉えているといえる。

続く *excutor somno* (111)という表現は、受動相の表現ではあるが、自ら夢を振り払うような能動性を感じさせる¹²ものである。ここで手紙の書き手ラーオダメイアは、意図的に夢を自らの心の中から斥けようとしていると捉えることができる。それでは、続く 112-114 の「儀式」の叙述も含め、どうして彼女はこのような行動に出たのか。そこで、ラーオダメイアの「夫の夢」への態度を理解するうえで、彼女が「夫の死」という事態に対してどのような態度でいるかを、改めて *Her.* 13 全体から検討したい。

3. 予兆への危惧と、夫が死ぬという事態の想定を明言することへの忌避

まず彼女は、「不吉な予兆」に強い関心を払っている。彼女はメネラーオスの復讐が多く
の者たちの涙の原因となること（すなわち多くの戦死者が出ること）を述べた後（47-48）、

di, precor, a nobis omen removete sinistrum, (Her. 13. 49)

神々よ、どうか私たちから不吉な予兆を取り払ってください。

¹¹ Reeson, *op. cit.*, ad loc.

¹² *excutor somno* という表現は、*Verg. Aen.* 2.302 でアエネアースが眠りから覚める時にも用いられている。Austin, R. G., *P. Vergilii Maronis Aeneidos Liber Secundus*, Oxford 1964, ad loc. はこれを“I shake myself free of sleep”と能動的な表現として解している。もちろんこれは中動相的に解釈してもよいと思われる。

と願う。またさらに、自らの言動にも気を付けており、

nunc fateor: volui reuocare, animusque ferebat;

substitit auspicii lingua timore mali. (Her. 13. 85-86)

今私は告白します。私はあなたを引き止めたいと思い、心はそう逸っていました。しかし、それは凶兆になると恐れて、舌が思い止まったのです。

と述べる¹³。彼女はこれに続き、夫が出発に際して家を出る時に、夫の足が敷居に躓いたのに気付いたことを、

cum foribus velles ad Troiam exire paternis,

pes tuus offenso limine signa dedit. (Her. 13. 87-88)

あなたがトロイアに向かって父祖の館の扉から出ようとした時、あなたの足は敷居に躓きました。それは予兆ととれました。

と述べる。それはもちろん凶兆なのである¹⁴が、彼女はそれを、

ut vidi, ingemui tacitoque in pectore dixi:

“signa reversuri sint, precor, ista viri.” (Her. 13. 89-90)

それは予兆ととれました。私はそれを見た時、うめいて、黙って胸の中でこう言いました。「どうかこれは、夫が近いうちに戻ってこられるという予兆でありますように。」

と、吉兆であるよう願う。49 や 85-86 の表現にはラーオダメイアには不吉な予兆への強いこだわりが窺われるが、その極みとしてラーオダメイアは 90 の表現のように凶兆を吉兆だと願おうとするのである。

また彼女は、「夫が死ぬ運命にあること」にそれとなく気付いていると思われる。彼女は、

sors quoque nescioquem fato designat iniquo,

qui primus Danaum Troada tangat humum. (Her. 13. 93-94)

神託もまた、誰かは知りませんが、ギリシア勢のうちでトロイアの地を最初に踏む者に対して、不当な運命を示しています。

¹³ このような凶兆を避ける態度は、アウリスからの出港を思いとどまるよう呼びかける (123-134) 後に *sed quid ago? revoco? revocaminis omen abesto*, (135) と、その直前まで述べていた自らの呼び戻しの言葉を否定してまで不吉な予兆を避けようとすることから窺える。古代ギリシア・ローマでは出発する者を呼び戻すことは極めて不吉な予兆になると考えられていた。 Cf. Palmer, A., *P. Ovidi Nasonis Heroides*, Hildesheim 1967 (Oxford 1898), ad loc.

¹⁴ Cf. Palmer, *op. cit.*, ad loc., Reeson, *op. cit.*, ad loc.

と、トロイアに最初に上陸する者¹⁵が「不当な運命」すなわち死ぬことになるという神託¹⁶があったことを述べる。これに続き、夫は千番目に海を航海していくよう（97-98¹⁷）、船からも最後に降りるよう（99-100¹⁸）、くどいまでに夫に忠告を述べるのは、神託が夫に対するものであると彼女が薄々感付いていることを窺わせる。先に指摘した「不吉な予兆」に対する態度も、神託が夫に対するものではと恐れるあまりのものであると捉えることができよう。

そして、彼女は「夫が死ぬという事態」については仮定的であっても極力明言しないようにしていると思われる。これは、「夫が死ねば自らも死ぬ」ということを、かなり遠回しな言い方で何度か述べることから窺える。戦地で夫はどのように振舞うべきかを述べる一節（63-84）で彼女は、

Hectora, quisquis is est, si sum tibi cara, caveto: (Her. 13. 65)

もし私があなたにとって大切ならば、ヘクトールがどのような者であれ、彼に気を付けてください。

と、ヘクトールを避けるよう忠告する。また、

et facito dicas, quotiens pugnare parabis:

“parcere me iussit Laodamia sibi.” (Her. 13. 69-70)

そして、戦いの準備をするたびに、あなたは自らにこう言い聞かせてください。「ラーオダメイアのことを大切にしよう私は言いつけられたのだ。」

と忠告する。さらに、トロイア人たち¹⁹に呼びかけ、

¹⁵ primus Danaum 94 はプロテシラーオスの名前が πρώτος と λαός からなると語源的に解釈されていることを暗示しているとされる。 Cf. Jacobson, *op. cit.*, 202, Reeson, *op. cit.*, ad loc. この暗示内容自体はオウィディウスが意図したものであろう。しかし、ラーオダメイアの視点から考えるならば、ここで彼女は神託が夫に適用されるという暗示を意図せず述べてしまったと解釈できる。

¹⁶ Apollodorus *Epitome* 3. 29: Ἀχιλλεῖ δὲ ἐπιστέλλει Θέτις πρῶτον μὴ ἀποβῆναι τῶν νεῶν: τὸν γὰρ ἀποβάντα πρῶτον πρῶτον μέλλειν τελευτήσειν. Hyginus *Fabulae* 103: Achiuis fuit responsum, qui primus litora Troianorum attigisset perituum.

¹⁷ Her. 13. 97-98: inter mille rates tua sit millensima puppis, / iamque fatigatas ultima verset aquas!

¹⁸ Her. 13. 99-100: hoc quoque praemoneo: de nave novissimus exi; / non est, quo properes, terra paterna tibi.

¹⁹ Il. 2.695-702 でプロテシラーオスを殺したのは Δάρδανος ἀνὴρ (701) とだけ述べられるが、ここで「トロイア人たち」と解釈した Dardanidae 79 はオウィディウスによる Il. 2.701 の暗示かもしれない (Cf. Il. 2.698-702: τῶν αὖ Πρωτεσίλαος ἀρήϊος ἡγεμόνευε / ζωὸς ἐών: τότε δ' ἤδη ἔχεν κατά γαῖα μέλαινα. / τοῦ δὲ καὶ ἀμφιδρυφῆς ἄλοχος Φυλάκη ἐλέλειπτο / καὶ δόμος ἡμιτελής: τὸν δ' ἔκτανε Δάρδανος ἀνὴρ / νηὸς ἀποθρόσκοντα πολὺν

parcite, Dardanidae, de tot, precor, hostibus uni,

ne meus ex illo corpore sanguis eat!

(Her. 13. 79-80)

トロイア人たちよ、これほど多くの敵の中から、ただ一人を容赦してください、夫の体から私の血を流させないために。

と願う。これらの言葉で彼女が夫に伝えたいことは、「あなたが戦で死んでしまったら私も後を追って死ぬので、私の命を大切に思うのならあなたの命を大切にしてください」ということであろう²⁰。ここで特に注目したいのは、その「あなたが死んでしまったら」という仮定を明言しないがゆえに遠回しな表現になっていることである。ここから、「夫が死ねば自らも後を追うのだ」ということを伝えたいながらも、夫の死の運命を察知し、その実現性を恐れるあまりに、「夫が死ぬという事態」を仮定的であっても明言したくない」というラーオダメイアの心理を読み取ることができよう。先に引用した 93-94 で、「死」を *fato... iniquo* 「不当な運命」と婉曲的に表現する (*euphemism*) のも、このためだと分かる。

また彼女は手紙の最後で、*iuro... / me tibi venturam comitem, quocumque vocaris* (159-163) 「誓います。あなたがどこへ呼ばれようとも、私はあなたのお伴として行きます」と誓い、その際、*sive —quod heu! timeo— sive superstes eris.* (164) 「たとえあなたが——ああ、それを私は恐れています——……としても、生還されるとしても」というように、「たとえあなたが死んでしまったとしても」ということを述べようとして途中でやめるということ (*aposiopesis*) をする。ここでまさに彼女は「夫が死ぬという事態」を恐れ明言を避けているといえる。

以上、本節での検討から、*Her. 13. 111* 以下において、ラーオダメイアが *excutor somno* (111) と「夢」を振り払ったのは「夫の死の運命に薄々感付きながらも、夫の死を想定するのを強く恐れる」からこそであり、*simulacra noctis adoro* (111) と「夜の霊」²¹に祈り、儀式を行ったのは、自分が見た夢を「不吉な予兆」と理解し、これを取り払おうとした²²からこそだといえる。

πρώτιστον Ἀχαιῶν.)。プロテシラーオスを殺したのは誰かという伝承の問題については岡、前掲書、219-222 参照。なお *Ovid. Met.* では、プロテシラーオスはヘクトールに殺されたことが述べられている。Cf. *Ovid. Met.* 12. 67-69: ... et Hectorea primus fataliter hasta, /

Protesilae, cadis, commissaque proelia magno / stant Danaïs, fortisque animae nece cognitus Hector;
²⁰ これは、“two lives in one” (Reeson, *op. cit.*, ad loc.), “two deaths in one” (Fulkerson, *art. cit.*, 77) というモチーフであると指摘されている。*Her. 13* 末尾の *si tibi cura mei, sit tibi cura tui!* (166) もこのモチーフであろう。

²¹ Palmer, *op. cit.*, ad loc., Rosati, *op. cit.*, ad loc. は、*simulacra noctis* を *Ovid. Fasti* 5.419ff で知られる、迷い出る死霊 *lemures* だと解釈している。

²² 夢を不吉な予兆として払い清めようとする類例はギリシア劇にも見られる。Cf. *Aesch. Pers.* 200-204, *Eur. Hec.* 68-72, *Ar. Ran.* 1331-1340.

4. 理想的な再会の様子の想像

次に、この「夢」の叙述の直後になされる、夫との再会の様子を想像する叙述（115-122）を検討する。これは「夢」に関する直接的な叙述ではないが、その直後だけあって「夢」に対するラーオダメイアの態度を理解する手がかりが現われていると思われる。

quando ego, te reducem cupidis amplexa lacertis, 115
languida laetitia solvar ab ipsa mea?
quando erit, ut lecto mecum bene iunctus in uno
militiae referas splendida facta tuae?
quae mihi dum referes, quamvis audire iuvabit,
multa tamen rapies oscula, multa dabis: 120
semper in his apte narrantia verba resistunt;
promptior est dulci lingua referre mora. (Her. 13. 115-122)

いったいいつ私は、帰って来たあなたを待ち侘びた腕で抱きしめ、喜びのあまり自ら力尽きるほどに疲れ果てるのでしょうか。いったいいつなののでしょうか、あなたが私とひとつの寝床でぴったりと結ばれ、あなたの軍務の輝かしい功績を語ってくれるのは。あなたがそれらのことを私に語る間、聞くこともきっと楽しいでしょうが、でも口付けをたくさん奪い、またたくさん与えることでしょう。巧みに物語るあなたの言葉はこのような妨げに絶えず止まりますが、舌は甘美な途切れでより滑らかに語ることができるのです。

まず、115-118 の quando... ? quando... ?の対句表現に注目したい。これは、直前の「夢」の叙述における 109-110 の cur... ? cur... ?の対句表現と呼応するように思われる。これは、夢について述べた直後に、このような似た構文の表現で自らが理想とする再会を思い描くことで、夢の内容を「再会ではない」と打ち消していると解釈できるように思われる。

また te reducem (115)「帰って来たあなたを」と述べるのも、直前の「夢の」叙述における nobis... occurrit (109)を「夫が帰って来た様子のものではない」として否定し打ち消すかのようである。

また 117-122 と、帰って来た夫が自分に戦功を語り自分が聞く様子を詳細に描写するのは、「これこそが無事帰って来た夫の語る言葉であり、「夢」で耳にした multa querela (110)「長々とした悲嘆」は再会の時に聞く夫の言葉ではない」と思いたいからこそであろう。

またこの 115-122 と以下の箇所も関連してくる。ラーオダメイアは第 1 パラグラフの 1-14 での手紙の導入において、

oscula plura viro mandataque plura dedissem,

et sunt quae volui dicere multa tibi.

(Her. 13. 7-8)

もっと沢山の口付けを、もっと沢山の忠告を、夫に与えることができたでしょうに。そしてあなたに言いたかったことはたくさんあります。

というように、出発する夫との別れ際に「口づけ」や「忠告」を満足いくまでできなかったことを述べ、また、

solvor ab amplexu, Protesilae, tuo,

linguaque mandantis verba imperfecta reliquit;

(Her. 13. 12-13)

プロテシラーオスよ、私はあなたの抱擁から解かれ、舌は忠告の言葉を最後まで言えないままにしまいました。

と、「口付け」や「抱擁」が彼女の満足しないうちに終わってしまったことを述べていた。一方でこの 115-122 の再会の想像では、*amplexa* (115)や *oscula* (120)といった語から窺えるように、そのようなことが十分になされている。この再会の想像は、そのような夫との別離の記憶による苦しみを癒そうとするものでもあるといえる。

また、*lecto... in uno* (117)「ひとつの寝床で」という表現は、107-114 の「夢」を見た状況である *in lecto... caelibae* (107)「夫のいない寝床で」という表現と相関する。この 117 の表現は、107 の表現に意味的な連関を持たせて、「自らの思い描く再会の場景が、「夢」を見た状況に取って代わるようにしている」のである。すなわちここでは、「(夫のいない) 独りの寝床で」という状況に「ひとつの寝床で」という場景が取って代わっているのである。

同様に、*te... amplexa... / languida laetitia solvar ab ipsa mea* (115-116)「あなたを…抱きしめ、喜びのあまり自ら力尽きるほどに疲れ果てるのでしょうか」という表現も、1-14 における出発の別れの際の *solvor ab amplexu... tuo* (12)「私はあなたの抱擁から解かれ」という表現と相関する。これも、別れの際の描写に用いた *solvo* を、その際の描写と同様に *amplector* と結びつけながらも、再会の喜びの表現として用いる——すなわち「解かれる」という意味から「力尽きる」の意味で用いることで、「自らの思い描く再会のイメージが別れの記憶に取って代わるようにしている」のである。つまり、「抱擁から解かれる」という記憶に「喜びのあまり力尽きる」というイメージが取って代わっている。

さらに *semper in his apte narrantia verba resistent; / promptior est dulci lingua referre mora.* (121-122)「巧みに物語るあなたの言葉はこのような妨げに絶えず止まりますが、舌は甘美な途切れでより滑らかに語ることができるのです。」という表現は、先述の、凶兆を恐れたラーオダメイアの舌 (*lingua*) が思い止まった (*substitit*) こと (86) と相関する。ここでも、「自らの舌 (*lingua* (86)) は凶兆への恐怖で思い止まった (*substitit* (86))」という記憶に、「再会の際の夫の舌 (*lingua* (122)) は、その舌の出す言葉が止まる (*resistent* (121)) としても口付けによってであり、それによってより滑らかに語る」というイメージが取って代わるよ

うにしている。

このように彼女は、これまで用いた二人の別離や凶兆に関わる表現を、語・意味を似通わせながらも自分の理想に即した内容に代えて用いているといえる。後述するように、このような表現は以後の 151-158 の「像」についての叙述においても見ることができる。

5. トロイア人夫妻の様子と、蠟像の夫の姿

それでは、問題とされていることのもう一つである、夫の像に関する叙述の検討に移る。夫の像への言及 (151-158) は、その直前の以下のトロイア人夫婦についての想像 (137-148) と対比的になされる。

Troasin invideo: quae si lacrimosa suorum
funera conspicient nec procul hostis erit,
ipsa suis manibus forti nova nupta marito
imponet galeam Dardanaque arma dabit. 140
arma dabit, dumque arma dabit, simul oscula sumet
—hoc genus officii dulce duobus erit—
producetque virum, dabit et mandata reverti
et dicet: “referas ista fac arma Iovi!”
ille ferens dominae mandata recentia secum 145
pugnabit caute respicietque domum;
exuet haec reduci clipeum galeamque resolvet
excipietque suo corpora lassa sinu. (Her. 13. 137-148)

トロイアの女たちを私は羨みます。たとえ彼女たちは、大切な人の涙に満ちた葬儀を目にすることになろうとも、敵が近くにいようとも、まさに新婚の妻でさえ自らの手で勇敢な夫に兜を被せ、トロイアの武具を渡せるでしょう。武具を渡し、渡す間、それと同時に口付けを受け取るでしょう——この種の務めは、双方にとって甘美なものとなるでしょう。そして夫を送り出し、無事戻るよう忠告を与え、こう言うのです。「この武具をユピテルに再び奉納できるようになさってください。」夫の方は、受けたばかりの女主人の忠告を自らに携え、用心深く戦い、家のことを顧みることでしょう。夫が戻れば、妻は楯を外し兜を脱がせ、疲れた体を自らの胸に迎え入れることでしょう。

ここで手紙の書き手ラーオダメイアは、戦場となる地の夫婦の間にこそ自らが理想とするやりとりがなされるということを思い描く。ここでも、プロテシラーオスとの別れ際に十分にできなかった「口付け」や「忠告の言葉をかけること」に関する想像がなされる (141-146)。さらにここで特徴的なのは、exuet haec reduci clipeum galeamque resolvet /

まずここで押さえておきたいのは、*imago* (155)の意味である。いくつかの近代語訳はこれを「像」すなわち *cera* (152)の言い換えと解釈している²⁵。つまりこれらの近代語訳は 155 を「像は像と思われる以上のものである」と解釈している。*imago* は「像」という意味も含意される以上、この解釈自体に矛盾はない。しかし、155-156 は、文脈上「夫の像」がどのようなものであるかを説明するものなので、*imago* を「姿」と解釈し、*videatur* (155)の補語に *cera* を考え、「その姿は像と思われる以上である」と述べていると解釈するのが妥当ではないだろうか。すなわちここでは、「*cera* の姿が *cera* とは思えないほどにプロテシラーオスそっくりである」ということを述べているのである。それゆえ、*adde sonum cerae...*(156)「蠟の像に声さえ加われれば」と続く。もちろん、*imago* を「姿」ととるにしても、ラーオダメイア自身も「像」の意味を含意して述べていると解釈することは可能であろう。しかし、ここでの彼女の意図する中心的な *imago* の概念は「姿」であると考えられる。すなわち、彼女は「夢」での *imago* (109)と同じ「姿」の意味で *imago* (155)を用いているのである。

imago (109) / *imago* (155)と *querela* (110) / *queror* (158)の呼応の特質は、本章前節で検討した *lectum* や *soluo*、*lingua* の表現と同質のものであると思われる。すなわち *imago* (109) / *imago* (155)の呼応においてラーオダメイアは、「夢での夫の *imago*」に「夫の像の *imago*」が取って代わるようにしているのである。同様に *querela* (110) / *queror* (158)の呼応においては、「夫の *querela*」に「自らの *queror*」が取って代わるようにしているのである。

この際、「像」の叙述において考慮すべきなのが *hanc... teneo... sinu* (157)「この像を…胸に抱き」の *sinu* である。これは先に見た 77-78 や 147-148 での表現から、「無事に戻って来た夫」に対する表現であると解釈できる。すなわちここでラーオダメイアは、夫の像に「無事に戻って来た姿」を見出しているのである。それゆえ *imago* (109) / *imago* (155)の呼応において彼女は、「死んだような姿の夫」に「無事な姿の夫」が取って代わるようにしていると解釈できる。同様に *querela* (110) / *queror* (158)の呼応についても、「死んだような姿の夫が嘆く」ということに「私が訴えかける」ということが取って代わるようにしていると解釈できる。*adde sonum cerae* (156)や *tamquam possit verba referre* (158)といった「像が語る言葉」についての想像しての言及も、先に検討した 117-122 と同じ態度から為すものだといえよう。すなわちここで彼女は、「無事戻って来た夫が語る言葉」を夫の像の口に思い描いているのである。

ここで Reeson は「夢」と「像」のモチーフの結びつき (Cf. Aesch. *Agam.* 416-426, Eur. *Alc.* 348-356, Meleag. *AP* 5.166, Prop. 4.11.81-84) を指摘している。これについては、Borthwick, E. K., *Meleager's Lament: A note on Anth. Pal.* 5.166, *CPh* 64 (1969), 173-5 も参照。

²⁵ 松本克己訳 (泉井久之助他訳『ローマ文学集』筑摩書房, 1966, 343)、Hardie, P., *Ovid's Poetics of Illusion*, Cambridge 2002, 136, Rosati, *op. cit.*, ad loc. これらはいずれも *cera* (152)と *imago* (155)を同じ語 (人形・image・immagine) で訳している。一方、Fulkerson, *art. cit.*, 81 は *cera* (152)を *an wax statue*、*imago* (155)を *an image* と訳していることから、*imago* (155)を本稿のように「姿」と解釈していると思われる。

6. 結論：Her. 13 でオウィディウスが描こうとしたラーオダメイアの手紙

以上の考察をまとめると、オウィディウスが Her. 13 で描こうとしたラーオダメイアの手紙は次のようなものであるといえる。Her. 13 において手紙の書き手ラーオダメイアは、夫プローテシラーオスがトロイア戦争から生きて帰ってくることを強く願っている。その願いからラーオダメイアは、「夫の死の可能性を実感させるものから目を背けたい」とまでに至っており、悪い予兆すら良い予兆であると思ひ込もうとするほど、不都合なことから目を背け都合の良いことを考えるという傾向を持っている。それゆえ彼女は、「死を思わせるような姿の夫」の出てきた夢を斥けて、夫との理想的な再会の想像をしたり、自分と夫を重ね合わせる形で、理想的なやりとりを交わすトロイア人夫婦の様子を想像するのである。そのような想像の延長上として、ラーオダメイアは蠟像の夫に対し、理想的な送り出しの振る舞いと無事の帰還を迎え入れる振る舞いをする。これは蠟像に「無事生きて帰って来る夫」の姿を思い描くことで、夢で見た「死を思わせるような姿の夫」から目を背け、「無事生きて帰って来る夫」の姿がそれにとって代わるようにするものである。このように、夫の死を暗示する夢を拒絶したうえで夫の像に夫の生還を重ね合わせるほどに、夫の生への願いに強く執着するラーオダメイアの様相が、Her. 13 という手紙を通じて描かれているのである。

結論

本論文のこれまでのオウィディウス『名高き女たちの手紙』についての検討をまとめると、次のようになる。

第1章では、第4歌「パイドラーからヒッポリュトスへの手紙」(Her. 4)について検討した。Her. 4は、パイドラーがヒッポリュトスを説得するため、特に審議弁論の規範に則る形で弁論術の手法が用いられている。その一方でエウリーピデース『ヒッポリュトス』におけるヒッポリュトスが乳母を介してのパイドラーの恋心の告白を拒絶する場面を踏まえると、Her. 4においてそのように弁論術の手法を凝らされていることや、とりわけその手法との関連でパイドラーとヒッポリュトスの逢引の利便性の高さを主張することなどが、この手紙を読むヒッポリュトスがパイドラーを拒絶するということを予期させるものとなっていることが分かる。このように、Her. 4は説得のために用いる弁論術を手紙に用いたからこそ皮肉にもパイドラーはヒッポリュトスに拒絶されることになるという手紙になっているのである。

第2章では、第9歌「デーイアネイラからヘーラクレスへの手紙」(Her. 9)について検討した。Her. 9でデーイアネイラは、オンパレーとイオレーをヘーラクレスを打ち負かすという点でヘーラクレスにとって不名誉たる存在であると非難し、その不名誉に対置するものとしてヘーラクレスの武勇により成し遂げられた名誉を想起させ、そしてデーイアネイラ自身をもそのようなヘーラクレスにとっての名誉たる存在であることを示す。その一方でヘーラクレスの瀕死の報を受けて自分がヘーラクレスを実際に打ち負かすという事態になってからは、逆に自分自身こそがヘーラクレスにとっての不名誉になりつつあると自覚する。そして自分がヘーラクレスにとっての名誉たる存在であり続けるためにリフレインにより死の決意を引き出すと共に名誉の回復を図るのである。このようにHer. 9は、自分がヘーラクレスにとっての名誉たる存在であることを示そうとしながら、不名誉たる存在になってしまいそうになり、死を決意するというデーイアネイラの皮肉な様相が描かれる手紙となっているのである。

第3章では、第12歌「メーデシアからイアーソーンへの手紙」(Her. 12)について検討した。Her. 12はこれまで、アポローニオス『アルゴナウティカ』からの影響の関係から、エウリーピデース『メーデシア』において進行していく物語内容の以前の状況で書かれた手紙であると考えられていたが、『メーデシア』との詳細な比較検討をすると、その物語内容以前ではなく、その物語内容と並行する状況において書かれた手紙であるとするのが妥当である。また一方で、Her. 12においてメーデシア自身のかつての恋愛感情やイアーソーンとの復縁を嘆願する表現の箇所は、そのようなことがもはや意味をなさなくなるのを示すためのものとしてあるのであり、最終的に報復の最後通牒という形でまとまるという手紙になっているのである。

第4章では、第13歌「ラーオダメイアからプロテシラーオスの手紙」(Her. 13)につ

いて検討した。*Her.* 13 でラーオダメイアは、夫プロテシラーオスがトロイア戦争から生きて帰ってくることを強く願っており、夫の死の可能性を実感させるものをできるだけ認めないようにしている。それゆえ彼女は、「死を思わせるような姿の夫」の出てきた夢を斥けて、夫との理想的な再会の想像をしたり、自分と夫を重ね合わせる形で、理想的なやりとりを交わすトロイア人夫婦の様子を想像するのである。そのような想像の延長上として、ラーオダメイアは蠟像の夫に対し、理想的な送り出しの振る舞いと無事の帰還を迎え入れる振る舞いをする。これは蠟像に「無事生きて帰って来る夫」の姿を思い描くことで、夢で見た「死を思わせるような姿の夫」に「無事生きて帰って来る夫」の姿が取って代わるようにするものである。このように *Her.* 13 は、夫の死を暗示する夢を拒絶したうえで夫の像に夫の生還を重ね合わせるほどに、夫の生への願いに強く執着するラーオダメイアの様相が描かれる手紙となっているのである。

以上の *Her.* 4, 9, 12, 13 の 4 つの手紙の検討を通じて、各々の手紙が、先行作品も含めた背景となるそれぞれの神話の伝承を活用しながら、独自の個性を有した一人称の書き手によるものとして作られていることが明らかになった。この結果は、『名高き女たちの手紙』にかつてなされていた「似たり寄ったりの状況における、女性の不満の独白を集めた単調なもの」という評価をさらに改めさせるのに十分なものである。そして『名高き女たちの手紙』の特色として、*Her.* 4, 9 において観察された「皮肉」な状況や、*Her.* 12, 13 において観察された手紙の書き手の入り組んだ心理の描かれ方は、『変身物語』にも連なっていくオウィディウスの詩作の特色としてとりわけ注目すべき要素である。このような「オウィディウスらしさ」を、今回は取り上げなかった『名高き女たちの手紙』の他の手紙や、『変身物語』においても見出せるように研究を進めていくことを今後の課題としたい。

補遺

『名高き女たちの手紙』第 4, 9, 12, 13 歌 解題・ラテン語日本語対訳・訳注

オウィディウス『名高き女たちの手紙』のテキストは、Rosati, G., *Ovidio: Lettere di eroine*. Milan 2008⁵(1st ed. 1989)を底本とした。第 4 歌については、Hauptli, B.W., *Ovid: Liebesbriefe; Heroides-epistulae*. Zürich 1995 (Tusculum)と Casali, S., *Strategies of tension (Ovid, Heroides 4). Proceedings of the Cambridge Philological Society* 41(1995), 1-15 による読みを一部採用した。また第 9 歌については、Casali, S., *P. Ovidii Nasonis Heroidum Epistula IX: Deianira Herculi*. Firenze 1995 による読みを一部採用した。また第 13 歌については、Reeson, J., *Ovid Heroides 11, 13, and 14. A Commentary*. Leiden 2001 による読みを一部採用した。底本との異同は以下の通りである。

第 4 歌

26 cui Hauptli quae Rosati
108 carior Hauptli gratior Rosati
137 nec labor est celare, licet peccemus, amorem; Hauptli
nec labor est celare licet †pete munus ab illa† Rosati
176 perlege, sed Casali qui legis, et Rosati

第 9 歌

105 facta Casali gesta Rosati
126 tacente Casali †tagente† Rosati

第 12 歌

(Rosati との異同なし)

第 13 歌

1 Mittit —et optat amans quo mittitur ire— salutem Reeson
Mittit et optat amans, quo mittitur, ire salutem Rosati

第4歌「パイドラーからヒッポリュトスへの手紙」対訳

第4歌「パイドラからヒッポリュトスへの手紙」背景

パイドラは、英雄・アテーナイ王テーセウスの妻でありながら、血の繋がらない継子ヒッポリュトスに激しい恋心を抱いたことでよく知られている。この手紙は、まさにその自身の恋心をヒッポリュトスに伝える手紙である。

パイドラは、クレータ王ミーノースと王妃パーシパエーが儲けた多くの子のうちの一人である。ある時、その子たちのうちの一人アンドロゲオースが、アテーナイで不審な死を遂げる。その償いの為アテーナイは、クレータの牛頭の怪人ミーノータウロスに定期的に一定数の少年少女を生贄として捧げなければならなくなる。ミーノータウロスは、王妃パーシパエーが牡牛と交わり産んだ子であり、亡命者の工匠ダイダロスが造った迷宮に幽閉されていた。この怪人への生贄を装い、迷宮に潜入しミーノータウロスを倒したのが、アテーナイの英雄テーセウスである。彼には、パイドラの姉アリアドネーが、迷宮を迷わず脱出できるように糸玉を授けるという手助けをしていた。彼女はテーセウスに惚れ込んでいたためである。しかしアリアドネーは、テーセウスと共にクレータを脱出する一方、ナクソス島に置き去りにされてしまう（この時点でアリアドネーが書いた手紙が『名高き女たちの手紙』第10歌である）。そしてテーセウスはアテーナイに戻り王位を継ぐ。

しばらくして、パイドラの兄のデウカリオーン（後のクレータ王）が、テーセウスとの仲を取り持ち、二人は結婚することになる。ただしテーセウスは、この結婚より前にアマゾン族のヒッポリュテ（彼女の名前には諸説ある）と交わり一子ヒッポリュトスを儲けていた。そして彼女が、アマゾン族を引き連れて、テーセウスとパイドラの結婚を台無しにしようと襲撃してくる。この際、ヒッポリュテは死んでしまう。そしてヒッポリュトスは、テーセウスの生まれ故郷であり彼の祖父ピッテウスの治める、アルゴリス地方のトロイゼーンで育てられることになった。またパイドラはテーセウスとの間に二子アカマースとデーモポーンを儲けた。

しばらくして、テーセウスは、叔父パラスの子たち（パランティダイ）と王位継承権に関して争い、彼らを殺してしまう。この親族殺しの汚れの清めのためテーセウスとパイドラは、ヒッポリュトスの暮らすトロイゼーンに身を寄せることになる。パイドラはかつてエレウシースでヒッポリュトスを目にしたことがあり、その時既に、彼に並々ならぬ気持ちを抱いていた。そしてとうとうパイドラはヒッポリュトスと一つ屋根の下で暮らすことになり、自らの恋心はいや増すばかりであった。そんな折、テーセウスは用事のためトロイゼーンを不在にする。『名高き女たちの手紙』第4歌は、この時にパイドラがヒッポリュトスに宛てて書いた手紙である。

伝存するエウリーピデースの悲劇『ヒッポリュトス』もこの状況を題材としている。ここでは、パイドラはヒッポリュトスへの恋心を乳母に打ち明け、その乳母がヒッポリュトスに彼女の気持ちを伝えるというものになっている。『名高き女たちの手紙』第4歌の手紙も、もし手紙が渡される状況を想定するならば、パイドラの乳母がヒッポリュトスに

渡すというものになるだろう。

そもそも、このパイドラの恋には、愛の女神アプロディーテ（＝ウェヌス）の大きな意志が働いていた。純潔を尊び狩りや馬術を楽しむヒッポリュトスは、日々、処女神アルテミス（＝ディアナ）を崇める傍ら、アプロディーテを軽侮していた。そのことに激しい怒りを覚えたアプロディーテは、パイドラを使ってヒッポリュトスを破滅に追い込むことにしたのである。当然、純潔を誓っていたヒッポリュトスは、パイドラの道ならぬ恋心を知って冷酷なまでに拒絶する。そして恥ずべき立場となったパイドラは、自分の息子たちを守るため、またヒッポリュトスへの意趣返しのため、「ヒッポリュトスに襲われた」と偽りの遺書を手にし自害するのである（エウリーピデース『ヒッポリュトス』の場合。その偽りを直接テーセウスに告げたとの伝承もある）。トロイゼンに戻ってきたテーセウスは、パイドラの遺体と遺書を見て、ヒッポリュトスを追放し、ポセイドーン（＝ネプトゥーヌス）にヒッポリュトスを亡き者にするようお願いをかける。そしてヒッポリュトスは、馬車で海岸沿いを走っている際に、突然海から現れた怪物に驚いて暴走する馬に引き摺られ死に至る。

この後アルテミスが、医神アスクレーピオスに頼み、ヒッポリュトスを生き返らせた。ローマの伝承では、ディアナ（＝アルテミス）が、復活したヒッポリュトスをローマ近郊のネーミの森に匿い、老人の姿に見えるようにしてウィルビウスと改名させたとされる。オウィディウス『変身物語』15.479-546では、ウィルビウスとなったヒッポリュトスが、このような己の経緯を語っている。

IV. PHAEDRA HIPPOLYTO

Qua, nisi tu dederis, caritura est ipsa, salutem
mittit Amazonio Cressa puella viro.
perlege, quodcumque est: quid epistula lecta nocebit?
te quoque in hac aliquid quod iuvet esse potest.
his arcana notis terra pelagoque feruntur; 5
inspicit acceptas hostis ab hoste notas.
ter tecum conata loqui ter inutilis haesit
lingua, ter in primo destitit ore sonus.
qua licet et sequitur, pudor est miscendus amor;
dicere quae puduit, scribere iussit amor. 10
quidquid Amor iussit, non est contemnere tutum:
regnat et in dominos ius habet ille deos.
ille mihi primo dubitanti scribere dixit:
“scribe: dabit victas ferreus ille manus.”
adsit et, ut nostras avido foveat igne medullas, 15
figat sic animos in mea vota tuos.
non ego nequitia socialia foedera rumpam:
fama, velim quaeras, crimine nostra vacat.
venit amor gravius, quo serior: urimur intus;
urimur, et caecum pectora vulnus habent. 20
scilicet ut teneros laedunt iuga prima iuencos,
frenaque vix patitur de grege captus equus,
sic male vixque subit primos rude pectus amores,
sarcinaque haec animo non sedet apta meo.
ars fit, ubi a teneris crimen condiscitur annis; 25
cui venit exacto tempore, peius amat.
tu nova servatae carpes libamina famae,
et pariter nostrum fiet uterque nocens.
est aliquid, plenis pomaria carpere ramis
et tenui primam deligere ungue rosam. 30
si tamen ille prior, quo me sine crimine gessi,
candor ab insolita labe notandus erat,
at bene successit, digno quod adurimur igni:
peius adulterio turpis adulter obest.

第4歌「パイドラーからヒッポリュトスへの手紙」

あなたが与えてくれない限り、自ら得ることはできない——そのような健康を

クレータ島の娘¹が、アマゾン族の息子²に祈ります。

内容全てを読み通してください。手紙を読むことがどんな害を与えるでしょう³。

この手紙の中に、何かあなたを喜ばせることもあり得るでしょう。

このような手紙によって、秘密は陸や海を渡ります。

5

敵対する間柄でも、手紙を受け取れば吟味するものです。

三度、私はあなたに話しかけようとして、三度、舌が役に立たずにくっつきました。

三度、声が口から出掛かって留まりました。

恥じらいは愛に伴う限り、愛と結び合うべきものです。

言うのを恥らったことを、「愛」⁴が書くよう命じました。

10

アモルが命じたことは何であれ、軽んじるのは危険です。

かのアモルは主たる神々に対してさえ、君臨し権限を行使するからです。

私が手紙を書くのを最初ためらっていると、私にかのアモルは言いました。

「手紙を書きなさい。そうすれば、彼が鉄の心の持ち主でも、降参の手を差し出すだろう」

アモルが私を助けてくださいますように。食欲な炎で私の骨の髄を熱くしたように、

15

私の願いに応じて、あなたの心を貫いてくださいますように。

私は浮気心から婚姻の掟を破るつもりなのではありません⁵。

私の評判は——お尋ねいただければと思います——落ち度のないものです。

愛がやって来たものの、遅く来た分それだけいっそう激しかったのです。私は内側で焼かれています。

私は焼かれて、胸には見えない傷を負っています。

20

そう、若い雄牛が初めての軛に傷つくように、

群から連れてこられた子馬が初めての手綱にほとんど耐えられないように、

そのようにひどく、うぶな私の胸は、初めての愛に耐えきれないほどに耐えています。

こんな重荷は私の心にうまく乗りません。

若い年頃から過ちを十分に学んでいれば、愛は技術になりますが、

25

時宜を逸して愛がやって来ると、その者にとって、愛することはより苛酷になるのです。

私の評判は守られてきました。あなたはそのままの捧げ物を取るようになるのです。

そして私たちが二人とも罪を犯すことになるのは、対等のことなのです。

それは枝の繁る果樹園で果実をもぎ取ることや、

柔らかい爪で初咲きのバラを摘むことのようなものです。

30

私はこの清らかな純潔によってもともと過ちなく振舞ってきましたが、

しかしもしこの純潔がこれまで無縁だった汚れで印をつけられることになったとしても、

この純潔に相応しい炎で焼かれているのがせめてもの幸いでした。

密通の相手が恥知らずだと、密通そのもの以上にひどく害になりますから⁶。

si mihi concedat Iuno fratremque virumque, 35
 Hippolytum videor praepositura Iovi.
 iam quoque, vix credes, ignotas mittor in artes:
 est mihi per saevas impetus ire feras;
 iam mihi prima dea est arcu praesignis adunco
 Delia: iudicium subsequor ipsa tuum. 40
 in nemus ire libet, pressisque in retia cervis
 hortari celeris per iuga summa canes;
 aut tremulum excusso iaculum vibrare lacerto,
 aut in graminea ponere corpus humo.
 saepe iuvat versare leves in pulvere currus 45
 torquentem frenis ora fugacis equi.
 nunc feror, ut Bacchi furiis Eleleides actae,
 quaeque sub Idaeo tympana colle movent,
 aut quas semideae Dryades Faunique bicornes
 numine contactas attonuere suo. 50
 namque mihi referunt, cum se furor ille remisit,
 omnia; me tacitam conscius urit amor.
 forsitan hunc generis fato reddamus amorem,
 et Venus ex tota gente tributa petat.
 Iuppiter Europen —prima est ea gentis origo— 55
 dilexit, tauro dissimulante deum;
 Pasiphae mater, decepto subdita tauro,
 enixa est utero crimen onusque suo;
 perfidus Aegides, ducentia fila secutus,
 curva meae fugit tecta sororis ope. 60
 en, ego nunc, ne forte parum Minoia credar,
 in socias leges ultima gentis eo.
 hoc quoque fatale est: placuit domus una duabus:
 me tua forma capit, capta parente soror.
 Thesides Theseusque duas rapuere sorores: 65
 ponite de nostra bina tropaea domo.
 tempore quo nobis inita est Cerealis Eleusin,
 Gnasia me vellem detenuisset humus!
 tunc mihi praecipue (nec non tamen ante placebas)
 acer in extremis ossibus haesit amor. 70

もしユーノーが兄であり夫でもあるユピテルを私に譲るとしても、35
私はユピテルよりもヒポリュトスを選ぶだろうと思います⁷。
信じられないかもしれませんが、今や私も、したこともなかった技芸にのめり込んでいます。
荒々しい獣たちの間を進みたいという衝動に駆られるのです⁸。
今や私にとって第一の神様は、しなる弓で名高い
デーロス島の女神ディアーナ⁹です。私自身もあなたの見解に追従しているのです。40
森へ行ったり、尾根の頂を渡り俊足の獵犬をたきつけて
鹿を網へ追いやったり、
あるいは腕を振って狙いを定めて、しなる槍を投げつけたり、
あるいは草繁る大地に体を横たえたりするのが私を喜ばせるのです。
馬を疾駆させ、その首を手綱で曲げて、45
砂塵を巻き上げ軽快に馬車を旋回するのをしばしば楽しめます¹⁰。
今や私が向かう様は、バックス神の狂気に駆られた女たち¹¹のようであり、
またイダ山のふもとでタンバリンを打ち鳴らすキュベレーの信徒たち¹²のようであり、
あるいはまた半神のドリュアスたち¹³や二本の角をもつファウヌスたち¹⁴の
神聖な力に触れて狂乱した女たちのようです。50
実際、このような狂気が和らいだ時に、全てを私は耳にするのです。
事情を話さないでいる私を、内情に通じている「愛」が焼きます。
この愛はおそらく、私の一族の運命に帰することができます。
ウェヌスが私の血統全体から捧げ物を求めているのでしょう¹⁵。
ユピテルは、神の姿を雄牛に変えて、エウローペー¹⁶を愛しました。55
このエウローペーが私の血統の祖です。
私の母パーシパエー¹⁷は、牡牛を欺いて身を委ね、
自らの腹から重い過ちを産みました。
私の姉アリアドネー¹⁸の助けで、アイゲウス¹⁹の子である不実なテーセウス²⁰は、
導きの糸を辿って曲がりくねった迷宮を脱出しました。60
そう、私は今、「ひょっとしてミーノースの娘ではないのでは」と思われないように、
血統を引く最後の者として、一族を律する掟に従うのです。
これも運命が定めたのです。一つの家が二人の女に気に入られました。
あなたの美しさが私を捕え、あなたの父が姉を虜にしたのです²¹。
テーセウスとテーセウスの子が二人の姉妹を奪いました。65
私たちの家についての、一対の戦勝記念碑をあなたたちは建てればよいのです。
私がケレース女神²²の聖地エレウシース²³を訪れようとした時、
クレータの大地が私を引き留めてくれればよかったのに。
以前からあなたを好ましく思っていました、その時はとりわけ
鋭い愛が骨の隅々にまで染み渡ったのです。70

candida vestis erat, praecincti flore capilli.
 flava verecundus tinxerat ora rubor,
 quemque vocant aliae vultum rigidumque trucemque,
 pro rigido Phaedra iudice fortis erat.
 sint procul a nobis iuvenes ut femina compti: 75
 fine coli modico forma virilis amat.
 te tuus iste rigor positique sine arte capilli
 et levis egregio pulvis in ore decet.
 sive ferocis equi luctantia colla recurvas,
 exiguo flexos miror in orbe pedes; 80
 seu lentum valido torques hastile lacerto,
 ora ferox in se versa lacertus habet;
 sive tenes lato venabula cornea ferro—
 denique nostra iuvat lumina, quidquid agis.
 tu modo duritiam silvis depone iugosis: 85
 non sum materia digna perire tua.
 quid iuvat incinctae studia exercere Dianae
 et Veneri numeros eripuisse suos?
 quod caret alterna requie, durabile non est:
 haec reparat vires fessaque membra novat. 90
 arcus —et arma tuae tibi sunt imitanda Dianae—
 si numquam cesses tendere, mollis erit.
 clarus erat silvis Cephalus, multaeque per herbam
 conciderant illo percutiente ferae,
 nec tamen Aurorae male se praebebat amandum: 95
 ibat ad hunc sapiens a sene diva viro.
 saepe sub ilicibus Venerem Cinyraque creatum
 sustinuit positos quaelibet herba duos.
 arsit et Oenides in Maenalia Atalanta:
 illa ferae spoliū pignus amoris habet. 100
 nos quoque quam primum turba numeremur in ista!
 si Venerem tollas, rustica silva tua est.
 ipsa comes veniam, nec me latebrosa movebunt
 saxa neque obliquo dente timendus aper.
 aequora bina suis oppugnant fluctibus Isthmon, 105
 et tenuis tellus audit utrumque mare.

衣服は白く輝き、髪は花冠で締められて、
黄金色の顔に恥じらいの赤みが差していました。
表情が頑なで厳しいと言う女たちもありますが、
このパイドラーの考えでは、頑なというよりむしろ男らしいものでした。
女のように自分を飾る若者たちは、私から離れていてください。 75
適切な限度で飾られてこそ、男の美しさは引き立つのです。
あなたに似合っているのは、あなたのその厳格さと無造作に整えられた髪、
そして際立った顔に付いている細かな砂ぼこりです。
あなたが狂暴な馬の抗う首を曲げると、
狭い馬場で馬の足並みが曲がるのを見て私は賛嘆します²⁴。 80
またあなたが強靱な腕でしなる槍を振り回すと、
あなたの力強い腕は私の目を捉えて離しません。
またあなたが幅広の穂先を付けた、ミズキの柄の狩猟槍を握むと――
要するに、あなたがすることは何でも、私の目を喜ばせるのです。
あなたはただその厳しさを、山地の森に棄ててください。 85
あなたのその性格のせいで、私が身を滅ぼすのは相応しくありません。
帯を締めたディアーナの仕事²⁵に励んでも、
ウェヌスからその信徒を奪ってしまつては²⁶、何が楽しいのでしょうか。
間に休息を挟まなければ、仕事は長続きしません。
この休息が力を回復させ、疲れた手足を元気づけるのです。 90
弓も、ずっと弦が張られていたら、弱くなるでしょう。
あなたの信奉するディアーナの武具²⁷を見習うべきです。
ケパロス²⁸は森で名高く、彼に突き刺されて、
多くの獣が草地に倒されていました。
でも、その彼もアウローラ²⁹に身を委ねて愛されるのを憚らなかつたのです。 95
賢明な女神は老いた夫から彼のもとに通つたものでした。
ウェヌスとキニューラスの子アドーニス³⁰は、しばしばウバメガシの木の下で、
あたりの草の上に二人で身を横たえました。
オイネウス³¹の子メレアグロス³²はマイナロス山³³のアタランテー³⁴に恋の炎を燃やしました。
彼女は愛の証として、獣の皮を手に入れました。 100
私たちも、できるだけ早くこの仲間の中に数えられるようになりましょう。
あなたがウェヌスを遠ざければ、あなたの森は粗野なままです。
私が自らお伴いたしましょう。何が隠れているか分からない岩場も、
反り立つ牙で脅かす猪も、私をくじくことはないでしょう。
二つの海がその潮流で地峡へ襲いかかり、 105
狭い陸地が両側の海の音を聞いています。

hic tecum Troezena colam, Pittheia regna;
 iam nunc est patria carior illa mea.
 tempore abest aberitque diu Neptunius heros:
 illum Pirithoi detinet ora sui; 110
 praeposuit Theseus, nisi si manifesta negamus,
 Pirithoum Phaedrae Pirithoumque tibi.
 sola nec haec ad nos iniuria venit ab illo:
 in magnis laesi rebus uterque sumus.
 ossa mei fratris clava perfracta trinodi 115
 sparsit humi; soror est praeda relictā feris.
 prima securigeras inter virtute puellas
 te peperit, nati digna vigore parens:
 si quaeras, ubi sit, Theseus latus ense peregit;
 nec tanto mater pignore tuta fuit. 120
 at ne nupta quidem taedaeque accepta iugali—
 cur, nisi ne caperes regna paterna nothus?
 addidit et fratres ex me tibi, quos tamen omnis
 non ego tollendi causa, sed ille fuit.
 o utinam nocitura tibi, pulcherrime rerum, 125
 in medio nisu viscera rupta forent!
 i nunc, sic meriti lectum reverere parentis,
 quem fugit et factis abdicat ipse suis!
 nec, quia privigno videar coitura noverca,
 terruerint animos nomina vana tuos. 130
 ista vetus pietas, aevo moritura futuro,
 rustica Saturno regna tenente fuit.
 Iuppiter esse pium statuit, quodcumque iuvaret,
 et fas omne facit fratre marita soror.
 illa coit firma generis iunctura catena, 135
 imposuit nodos cui Venus ipsa suos.
 nec labor est celare, licet peccemus, amorem;
 cognato poterit nomine culpa tegi.
 viderit amplexos aliquis, laudabimur ambo:
 dicar privigno fida noverca meo. 140
 non tibi per tenebras duri reseranda mariti
 ianua, non custos decipiendus erit;

ピッテウス³⁵が治めるこの国トロイゼーン³⁶に、私はあなたと住みたいと思っています。
今やもう、この地は私の祖国より愛しく感じられます。
ネプトゥヌスの子である英雄テーセウス³⁷は、丁度おらず、不在は長くなるでしょう。
彼の親友ペイリトオス³⁸の国に引き留められているからです。 110
テーセウスが優先したのは、明白なことを否定するというのでない限り、
私よりもペイリトオスであり、あなたよりもペイリトオスなのです。
彼による私たちへの不当な振る舞いは、これだけではありません。
私たちは二人とも、被害を受けてひどい境遇にあったのです。
私の兄は、骨を三つ瘤の棍棒で打ち砕かれ、 115
大地に撒き散らされました³⁹。姉は獣たちの餌食として棄てられました⁴⁰。
あなたを産んだのは、斧持つ娘たちの中で武勇にかけては随一の女性です⁴¹。
産んだ子の力強さに相応しい母親でした。
その母親がどこにいるのかとあなたが尋ねるのなら——テーセウスが剣で脇を貫きました⁴²。
母親でありながら、これほどの息子という証があっても、安全ではなかったのです。 120
でも、彼女は花嫁として、婚礼の松明によって迎えられてすらいないのです。
これは、あなたを私生児にして父の王位を継がせないため以外に、どんな理由がありましょう。
あなたにとって弟となる者たちまで、私との間から加えました⁴³が、
弟たちを皆嫡子として養育する理由は、私ではなくテーセウスにあったのです。
ああ、世界で最も美しいあなた、このお腹があなたに害をなすことになるのなら、 125
産みの苦しみの最中に引き裂かれてしまえばよかったのです。
さあ、お行きなさい。このような報いに値する父親の寢床を崇めるのです。
彼はそこから逃げ、その行いで自分のものではないと彼自ら言っているのですから。
それに、継母である私が、継子と一緒にしろうとしていると思われるからといって、
そのような実を伴わない名で、あなたの心が怖気づきませんように。 130
そのような古い道徳は、やがて来る時代には滅び去るでしょうが、
サートウルヌス⁴⁴の統治する時代においても粗野なものでした。
ユッピテルは、喜びをもたらすものは何であれ、道徳に適うと決めました。
ユーノーも妹でありながら兄と結婚したのだから、どんなことも許されるのです。
ウェヌスご自身が結び目を作った鎖だからこそ、 135
親族の鎖は固い絆で結びつくのです。
私たちは過ちを犯すとしても、情事を隠す苦労はありません。
親族という名によって、罪は覆われ得るでしょうから。
抱き合っているのを誰かに見られたとしても、私たちは二人とも誉められるでしょう。
私も自分の継子に誠実な継母と言われるでしょう。 140
あなたには、暗闇を通して厳しい旦那のいる家の扉を開ける必要はないでしょうし、
見張りを欺く必要もないでしょう⁴⁵。

ut tenuit domus una duos, domus una tenebit;
 oscula aperta dabas, oscula aperta dabis;
 tutus eris mecum laudemque merebere culpa, 145
 tu licet in lecto conspiciare meo.
 tolle moras tantum properataque foedera iunge:
 qui mihi nunc saevit, sic tibi parcat Amor!
 non ego dedignor supplex humilisque precari.
 heu! ubi nunc fastus altaque verba? iacent. 150
 et pugnare diu nec me summittere culpae
 certa fui, certi siquid haberet amor:
 victa precor genibusque tuis regalia tendo
 braccia; quid deceat, non videt ullus amans.
 depuduit, profugusque pudor sua signa reliquit. 155
 da veniam fassae duraque corda doma!
 quod mihi sit genitor, qui possidet aequora, Minos,
 quod veniant proavi fulmina torta manu,
 quod sit avus radiis frontem vallatus acutis,
 purpureo tepidum qui movet axe diem, 160
 nobilitas sub amore iacet: miserere priorum,
 et, mihi si non uis parcere, parce meis!
 est mihi dotalis tellus Iovis insula, Crete:
 serviat Hippolyto regia tota meo.
 flecte, ferox, animos: potuit corrumpere taurum 165
 mater: eris tauro saevior ipse truci?
 per Venerem, parcas, oro, quae plurima mecum est!
 sic numquam, quae te spernere possit, ames;
 sic tibi secretis agilis dea saltibus adsit,
 silvaeque perdendas praebeat alta feras; 170
 sic faveant Satyri montanaque numina Panes,
 et cadat adversa cuspide fossus aper;
 sic tibi dent nympphae, quamvis odisse puellas
 diceris, arentem quae levet unda sitim!
 addimus his precibus lacrimas quoque; verba precantis 175
 perlege, sed lacrimas finge videre meas.

これまで一つの家が二人を守ってきたように、これからもこの家が二人を守るでしょう。

あなたは今まで遠慮なく接吻してくれましたが、これからも遠慮なく接吻できるのです。

あなたは私の寝床にいるのを見つけられても、

145

私と共にいることで咎められはしませんし、罪によって賞賛を得ることでしょう。

ただ躊躇いを取り除いてください。急いで誓いを結び合わせてください。

そうすれば、今は私に厳しいアモルが、あなたには容赦することでしょう。

私は嘆願者としてひれ伏し、懇願することも厭いません。

ああ、私の自尊心と高慢な言葉は今やどこでしょう——地面に倒れています。

150

私は長い間戦い、罪に屈しはしないと決心していました——

——「愛」がそのような決心を許すならば。

私は打ち負かされて懇願し、王妃の腕をあなたの膝に差し伸べています。

愛するものは誰も、己に相応しい振舞いが何なのか分からないのです。

私の恥じらいの心は恥を捨て、軍旗を棄てて逃げ出しました。

155

告白する私を許してください。そしてあなたの厳しい心をやわらげてください。

海を領有するミーノース⁴⁶が私の父であっても、

手から雷電を投げ落とすユピテル⁴⁷が祖先であっても、

鋭い光芒で額を囲まれ、

光り輝く車駕で暖かい日輪を運ぶソール⁴⁸が私の祖父であっても、

160

高貴な生まれは愛の下に倒れます。祖先たちを憐れんでください。

そして私を容赦したくなくても、私の血統を容赦してください。

私の婚資とする地所には、ユピテルの島クレータ⁴⁹があります。

王宮全てが私のヒッポリュトスに仕えるようにしましょう。

残酷なお方よ、心を曲げてください。私の母は牡牛を誘惑することができました⁵⁰。

165

あなたご自身は乱暴な牡牛よりも厳しいのでしょうか。

私にとって何よりも大切なウェヌスにかけてお願いします。どうか私を容赦してください。

どうかあなたを軽蔑するような女を決して愛さないでください。

どうか俊敏な女神ディアーナが、人気のない森であなたを守ってくださいますように。

また深い森は獲物となる獣を与えてくださいますように。

170

どうかサテュロス⁵¹たちや山の神パーン⁵²の加護がありますように。

また猪はあなたの槍の切っ先で貫かれて倒れますように。

たとえあなたが娘たちを憎んでいると言われていても、

どうかニンフたちがあなたに、ひどい渴きを癒す水を与えますように。

この懇願に私は涙も添えています。懇願する私の言葉を読み通してください。

175

しかし同時に、私の涙を見ているのだと想像してください。

- ¹ パイドラーのこと。パイドラーは、クレータ王ミーノースを父とするクレータの王族であった。パイドラーの兄(弟)デウカリオン(彼はミーノースからクレータ王位を継ぐ。また彼の子イードメネウスは後にクレータ王となりトロイア戦争で活躍すること有名)が取り持つことで、パイドラーはアテーナイ王テーセウスの妻になる(アポロドーロス『ギリシア神話』E.1.17)。
- ² ヒッポリュトスのこと。アテーナイ王テーセウスは、パイドラーを娶る前に、アマゾン族を攻め、その際アマゾン族の女を得、(彼女の名前はヒッポリュテとも、メラニッペーとも、アンティオーペーともいわれる)、一子ヒッポリュトスを儲けていた。ヒッポリュトス自身は、テーセウスの祖父ピッテウスの治めるトロイゼーンで育てられていた。なおヒッポリュトスの母は、テーセウスとパイドラーが婚礼を挙げる際に、アマゾン族を率いて婚礼を台無しにしようとして現れ、その際彼女はテーセウスに殺されたとも伝えられる(アポロドーロス『ギリシア神話』E.1.17、)。
- ³ エウリーピデース『ヒッポリュトス』856ff.では、パイドラーの遺体の手に「ヒッポリュトスに襲われた」という讒訴の手紙があるのをテーセウスが見つke、この手紙のせいでヒッポリュトスはテーセウスに追放され呪いをかけられることになる。この「手紙が仇なす」ということを、『名高き女たちの手紙』第4歌3行目の表現は、アイロニカルに先取りして暗示している、と解釈できる。
- ⁴ ここでは普通名詞として「愛」(amor)と述べているが、続く行では明確に愛の神アモル(Amor)として述べている。これはギリシア神話のエロースと同一視してよい。「アモルが書き手に強いる・命じる」というモチーフはしばしばローマの恋愛詩にも見られるものである。
- ⁵ ただしパイドラーは、すでに夫テーセウスとの間にアカマースとデーモポーンを儲けている。このようなパイドラーの表現は、テーセウスとの婚姻と出産が本当の愛に基づくものではないと主張しているように窺わせるものである。
- ⁶ すなわち、パイドラーの恋の対象は、純潔を重んじるヒッポリュトスであるため、純潔を重んじる己にも相応しいということ。
- ⁷ 「ユピテルよりも好む」というのは、女性が男性を愛する時に言うひとつの定型的な言葉であるが、定型的な意味では「あの崇高偉大なユピテルよりも」という意味で用いられるのに対し、ここではむしろ「好色・恥知らずなユピテルは自分には相応しくない」という意味で用いられていると解釈できる。
- ⁸ エウリーピデース『ヒッポリュトス』215-222でも、パイドラーは乳母に狩りへの欲求を伝えている。
- ⁹ 女神アルテミスのローマ名。デーロス島でアルテミスは兄アポッローンと共に女神レートーから生まれたことから、Delia「デーロス島の女神」とも呼ばれる。ゼウスの子を身籠ったレートーは女神ヘーラーから出産のための大地を奪われたが、デーロス島で産むことができた(アポロドーロス『ギリシア神話』1.4.1)。
- ¹⁰ エウリーピデース『ヒッポリュトス』228-231でも、パイドラーは馬を駆りたいとの欲求を乳母に伝えている。
- ¹¹ 酒神ディオニューソス(=バックス)を崇拝する、マイナスとも呼ばれる女たち。ディオニューソスによって狂気に陥ると、テュルソスという杖を持ち、半裸で山林を練り歩き、野獣を殺し生肉を喰らう。
- ¹² 小アジアのプリュギアを中心に崇拝されていた女神。コリュバースと呼ばれる信者たち(男根を切り落とした去勢者であり、女性とみなされた)は笛や太鼓(タンバリン状のもの)で耳をつんざくほどの音を立てて踊り歌う。
- ¹³ ニンペー(ニンフ)のうち、木の精霊のもの。ハマドリュアスともいう。
- ¹⁴ 半人半獣の神パーンと同一視される神。ファウヌス自体にはローマ固有の伝説があるが、ここでは単純にパーンのことのみを指していると解釈してよい。上半身は毛むくじゃらの人間で頭に二本の角を持ち、下半身は山羊である。好色な神格であり、しばしばニンフを追いかけていた。眠りを妨げられると恐慌(Panic)をもたらすという。
- ¹⁵ 以下パイドラーは、祖母・母・姉が受けた恋の話に触れ、自分もそれらに連なるということを述べる。エウリーピデース『ヒッポリュトス』337-343でもパイドラーは乳母に同様のことを述べている(ここでは母・姉にのみ言及している)。
- ¹⁶ エウローペーは、フェニキアのテュロス王アゲーノールの娘。ゼウス(=ユピテル)に見初められ、テュロスの海岸から牛に変身したゼウスの背中に乗せられて、クレータ島に付き、そこでゼウスとの間にミーノースらを産んだ。ゼウス(=ユピテル)がエウローペーを連れ去る様子はオウィディウス『変身物語』

2.836-875 に詳しく描写されている。

¹⁷ パーシパエーは、太陽神ヘーリオスとペルセーイスの娘。ミーノースの妻となった後、牡牛に欲情して交わり、怪物ミーノータウロスを産んだ。アポロドーロス『ギリシア神話』3.1.3-4 によると、彼女が牡牛に欲情したのは、ミーノースがボセイドンへの犠牲を怠ったため、そのように仕向けられたためだという。

¹⁸ クレータの怪物ミーノータウロスには、定期的にアテーナイから生贄として少年少女が捧げられていた。アテーナイ王アイゲウスの息子テーセウスは、生贄を装いミーノータウロスのいる迷宮に潜入してこの怪物を倒すが、その際、彼に惚れていたミーノースの娘アリアドネーは、迷宮で迷わず帰れるよう糸玉をテーセウスに授けた。ミーノータウロスを退治した後、アリアドネーはテーセウスと共にクレータ島を脱出するが、アテーナイへの帰路の途中、ナクソス島に置き去りにされた。その後彼女はナクソス島を訪れた酒神ディオニューソスに娶られた。『名高き女たちの手紙』第 10 歌は、ナクソス島に見捨てられたアリアドネーがテーセウスに宛てた手紙という形のものである。

¹⁹ テーセウスの前のアテーナイ王。彼の統治時にミーノースの息子アンドロゲオースがアテーナイで死んだため、その代償としてミーノータウロスにアテーナイから定期的に人身御供が捧げられることとなった。テーセウスがミーノータウロスを倒しアテーナイに船を寄せつつある時、テーセウスが死んだことを示す黒い帆が誤って掲げられていたため、アイゲウスは息子が死んだものと思って投身自殺した。

²⁰ アテーナイ王。テーセウスは手紙ではここではじめて言及される。パイドラーにとってはテーセウスは現在の夫であるが、ここではさםそうではないかのように言及されている。

²¹ ここでも、パイドラー自身はテーセウスの妻であるにもかかわらず、ヒポリュトスはパイドラーを、テーセウスはアリアドネーを虜にしたということが強調される。

²² 豊饒の女神デーメーテルのローマ名。ケレース自体にも固有の伝承はあったが、ギリシアのデーメーテルと同化した。

²³ アテーナイ近くの都市で、デーメーテル(=ケレース)の祭儀の中心であった。デーメーテルの祭儀は「エレウシースの秘儀」と呼ばれ、その詳細はよくわかっていない。

²⁴ ヒポリュトスは馬を大切に扱っていた。エウリーピデース『ヒポリュトス』110-112 でもその様子は描かれている。しかし、最終的にヒポリュトスはその馬のせいで命を落とすことになる。1355-1357 では大切に育てた馬によって死に至らしめられることへの嘆きが述べられる。

²⁵ すなわち狩猟のこと。女神アルテミス(=ディアーナ)は、処女神であると共に狩猟の女神でもある。

²⁶ すなわち、ウェヌスの仕事=男女の情事を疎かにすること。

²⁷ 狩猟の女神アルテミス(=ディアーナ)は、常に弓矢を携えた姿で知られていた。

²⁸ ケパロスの出生には諸説あるが、アイオロスの子デーイオーンの子とするのが一般的である。彼は、アテーナイ王だったエレクトウスの娘プロクリスを娶ったが、曙の女神エーオース(=アウローラ)にさらわれた。このことについては、オウィディウス『変身物語』7.700-713 でケパロス自身が語っている。

²⁹ 曙の女神エーオースのこと。彼女はトロイア王ラーオメドーンの子ティートーノスをさらい夫とした。彼女は夫に永遠の命が授けられることをゼウスに願い、それはかなえられたが、永遠の若さを願うことを忘れたため、ティートーノスは不老不死の女神に対して老いさらばえていった。

³⁰ ウェヌスが美少年アドーニスを受でたことは、オウィディウス『変身物語』10.519-739 で描かれている。ここでアドーニスは猪狩りの際に猪に殺されてしまい、ウェヌスは彼を同名の花に変えた。なお、彼の父キニュラースとアドーニス出生に至るまでの話も、同 10.243-518 で描かれている。

³¹ カリュドーン王。メレアグロス、デーイアネイラ、テューデウスらの父。デーイアネイラは『名高き女たちの手紙』第 9 歌の「手紙の書き手」である。

³² メレアグロスはカリュドーンの猪狩りに際し活躍し、共に活躍したメレアグロスが恋焦がれる相手でもあったアルカディア出身のアタランテーに、獲物の毛皮を与えた。なおこのことが原因でメレアグロスは手柄争いに巻き込まれ叔父たちを殺してしまい、そのため母により死に至らしめられてしまう(オウィディウス『変身物語』8.267-546)。

³³ アルカディア地方の山。

³⁴ アタランテーの出生については諸説あるが、母親が牝熊に変えられたアルカディア王アルカースの子孫であることは確かである。彼女は生まれると同時に棄てられたが、牝熊が乳を与え、狩人に拾われて育てられた。カリュドーンの猪狩りに参加した際のメレアグロスとの物語の他、求婚者と徒競走をし敗れた相手を殺していたことでも知られる(オウィディウス『変身物語』10.560-707)。

³⁵ ペロプスの子でありトロイゼーン王。アテーナイ王アイゲウスが子を得るための相談にトロイゼーンを訪れた際、娘アイトラーをアイゲウスと交わせ、その後テーセウスが生まれた。

³⁶ トロイゼーンはペロポネーソス半島東端にあり、105-106 の説明にもあるように、そこからさらに地峡をなす形で半島が突き出ている。

³⁷ テーセウスの本当の父親はポセイドーン(=ネプトゥーヌス)であるという伝承もあった。テーセウスがトロイゼーンを不在にしていたのはエウリーピデース『ヒッポリュトス』では神託伺いのためとされるが、ここでは親友ペイリトオスのもとに滞在していたためとされる。

³⁸ イクシーオーンの子で、テッサリアのラピタイ族の王。テーセウスとは戦いをきっかけに親友同士となった。ヒッポダメシアとの結婚式を挙げる際、ケンタウロス族と戦いになり、この戦いにテーセウスも加勢した。この戦いの様子はオウィディウス『変身物語』12.210-535 でネストールが語っている。またペイリトオスが冥界の王妃ペルセポネーをさらいに冥界に下る際、テーセウスもこれに同行した。この時、ペイリトオスとテーセウスは冥界で捕縛されたが、テーセウスのみヘーラクレースに救われて地上に戻ることができた。

³⁹ ミーノータウロスがテーセウスに倒されたときのこと。ミーノータウロスはパイドラーやアリアドネーにとっては異父兄弟にあたる。

⁴⁰ アリアドネーのこと。注 18 参照。

⁴¹ 注 1 参照。

⁴² 注 1 参照。

⁴³ アカマースとデーモポーンのこと。テーセウスの死後、デーモポーンがアテーナイ王位を継いだ。

⁴⁴ ゼウスの父でありティーターン神族のクロノスのローマ名。この神の治世は、五時代説話のうちの黄金時代とされる。

⁴⁵ このような様子は、ローマの恋愛詩においてしばしば描かれる情景である。

⁴⁶ クレータ王ミーノースは、強い制海権を有していた。

⁴⁷ ゼウス(=ユピテル)は、ミーノースの父である。

⁴⁸ 太陽神ヘーリオスのローマ名。パイドラーの母パーシパエーの父がヘーリオスである。

⁴⁹ ゼウス(=ユピテル)は、女神レアから産まれた際、クロノスに食べられないように匿われた。その際、クレータ島で養われた(ヘーシオドス『神統記』477-484)。

⁵⁰ 注 17 参照。なお、パーシパエーは、工匠ダイダロスの手による、内部を空洞にした木製の牝牛の中に入り、牝牛と交わった(アポロドーロス『ギリシア神話』3.1.4)。

⁵¹ 山野の精霊。ファウヌスやパーンとも同一視され、好色で酒を好む。酒神ディオニューソスの従者でもある。

⁵² 注 14 参照。

第9歌「デーイアネイラからヘーラクレースへの手紙」対訳・註

第9歌「デーイアネイラからヘーラクレスへの手紙」背景

デーイアネイラは、ギリシア最大の英雄ヘーラクレスの妻として有名である。ヘーラクレスには非常に多くの逸話が伝えられているが、彼女が夫に宛てた手紙においてもその多くの逸話が言及されていく。また手紙では彼女自身の有名な親族についても言及されることから、第9歌の背景となる物語の大きさは、『名高き女たちの手紙』中で最大といえるだろう。

デーイアネイラは、アイトーリア地方の都市カリュドーンの王オイネウスと王妃アルタイアーを両親に持つ。彼女の兄メレアグロスが英雄として名を馳せていたが、彼はカリュドーンの猪狩りでの手柄争いで母の兄弟を殺してしまったため、母アルタイアーにより死に至らしめられた（母自身も自害した）。そのような折、死後冥界にいるメレアグロスが、ヘーラクレスと出会う。ヘーラクレスは冥界の番犬ケルベロスを捕獲するために冥界を訪れていたのである。彼はメレアグロスに似た女性を妻にと望み、メレアグロスは妹デーイアネイラのことをヘーラクレスに伝えた。

ヘーラクレスは、ティーリュンス出身のアンピトリュオーンが殺人の汚れの清めのために妻アルクメーネーと共にテーバイに身を寄せていた時、その妻を主神ゼウスが身籠らせることにより生まれた。このことにより、ヘーラクレスは女神ヘーラーの嫉妬を一身に受けることになる。成長した彼はテーバイの王女を娶り、子を儲け幸せに暮らしていたが、ある日ヘーラーに送り込まれた狂気のため、自分の子供たちを殺してしまう。この罪の清めの為、ヘーラクレスはミュケーナイ王エウリュステウスの課す難業を果たさなければならなくなる。エウリュステウスもヘーラクレスも共に英雄ペルセウスの子孫であり血縁であるが、エウリュステウスはヘーラクレスが自分の地位を脅かすのではとひどく恐れていたため、彼に無理難題を次々と課していく。その彼の課した十二の難業のうちの最後が、冥界の番犬ケルベロスを捕獲して地上に連れてくることであった。

武勇の誉れに高いだけでなく大変好色であったヘーラクレスは、難業を果たしていく間にも幾人かの女性と交わり子をなしていたが、難業を全て果たしたヘーラクレスは改めて新しく妻を得るべく、デーイアネイラに求婚する。彼女は既に河の神アケローオスに結婚を迫られていたが、ヘーラクレスは決闘してアケローオスを打ち負かし、デーイアネイラを正式に妻とし、息子ヒュッロスを儲けた。

その後ヘーラクレスとデーイアネイラは、トラークースに身を寄せることになる。これは、ヘーラクレスがオイネウスの近親者を誤って殺したためとも、オイカリアー王エウリュトスの子イーピトスを殺したためともされる。このイーピトス殺しには、エウリュトスの娘イオレーをヘーラクレスが欲したという経緯があった。この罪の為さらにヘーラクレスは、リュディア女王オンパレーの下でしばらく奴隷として仕えることになる（なおこの間ヘーラクレスはオンパレーとの間にも子をなしている）。奉公の期間を終えた後、ヘーラクレスはオイカリアーを攻め落としエウリュトスを殺害し、イオレーを

捕虜とし、そして愛妾にするべく、デーイアネイラのいるトラークースに送る。

一方デーイアネイラは、イオレーを目にし、夫の愛情がこの女に移るのを危惧した。そこで夫に、かつて媚薬と聞いて受け取っていた、半人半馬ケンタウロスのネッソスの血を、夫ヘーラクレースの着る衣服に塗りつけて、それを夫のもとへ送るのである。『名高き女たちの手紙』第9歌は、まさにこの「媚薬」を塗った衣服をデーイアネイラが夫ヘーラクレースに送った直後に、彼女が夫に宛てて書いた手紙という形のものである。

このネッソスの血は、かつてヘーラクレースとデーイアネイラが旅をしていて、急流のエウエーノス河を渡ろうとした時、渡し守をしていたネッソスがデーイアネイラを運ぶことを申し出、ヘーラクレースはネッソスに妻を委ねた。ところがネッソスは妻を襲おうとしたので、ヘーラクレースはネッソスを弓矢で射殺した。この矢には、ヘーラクレースが「十二の難業」で倒したレルネーのヒュドラーの毒が塗られてあった。そしてネッソスは死の間際に、この毒入りの自分の血を、「ヘーラクレースの心を繋ぎとめたい時に使え」といってデーイアネイラに授けたのである。

この血を塗りつけられた衣服を着たヘーラクレースは、耐えがたい苦痛に絶え間なく襲われ、自ら死ぬことを決意する。そしてその報せを聞いたデーイアネイラは、自らの行いを悔い自害するのである。一方ヘーラクレースは、息子ヒュッロスにイオレーを娶るよう命じ、トラークース近郊のオイテー山の山頂に運ばれて、自分自身を火葬させた。この後ヘーラクレースは天上に迎え入れられ、女神ヘーラーとも和解した。

デーイアネイラとヘーラクレースの一連の物語は、悲劇詩人ソポクレーズが『トラークーニアイ』で描いており、『名高き女たちの手紙』第9歌もこの影響下にある。またオウィディウス自身も後に『変身物語』9.1-272で再度この物語を描いている。

IX. DEIANIRA HERCULI

Gratulor Oechaliam titulis accedere nostris,
victorem victae succubuisse queror.
fama Pelasgiadas subito pervenit in urbes
decolor et factis infitianda tuis,
quem numquam Iuno seriesque immensa laborum 5
fregerit, huic Iolen imposuisse iugum.
hoc velit Eurystheus, velit hoc germana Tonantis,
laetaque sit vitae labe noverca tuae;
at non ille velit, cui nox (si creditur) una
non tanti, ut tantus conciperere, fuit. 10
plus tibi quam Iuno nocuit Venus: illa premendo
sustulit, haec humili sub pede colla tenet.
respice vindicibus pacatum viribus orbem,
qua latam Nereus caerulus ambit humum.
se tibi pax terrae, tibi se tuta aequora debent; 15
implesti meritis Solis utramque domum.
quod te laturum est, caelum prius ipse tulisti:
Hercule supposito sidera fulsit Atlans.
quid nisi notitia est misero quaesita pudori,
si cumulas turpi facta priora nota? 20
tene ferunt geminos pressisse tenaciter angues,
cum tener in cunis iam Ioue dignus eras?
coepisti melius quam desinis; ultima primis
cedunt: dissimiles hic vir et ille puer.
quem non mille ferae, quem non Stheneleius hostis, 25
non potuit Iuno vincere, vincit amor.
at bene nupta feror, quia nominer Herculis uxor,
sitque socer, rapidis qui tonat altus equis.
quam male inaequales veniunt ad aratra iuvenci,
tam premitur magno coniuge nupta minor. 30
non honor est sed onus species laesura ferentis:
siqua voles apte nubere, nube pari.
vir mihi semper abest, et coniuge notior hospes
monstraque terribiles persequiturque feras.

第9歌「デーイアネイラからヘーラクレースへの手紙」

オイカリアー¹が私たちの名誉に加わることを祝福しますが、

勝利者であるあなたが敗者の女に屈したのを私は嘆いています。

噂が突然ギリシアの都市に達しました。

不名誉で、あなたの功業によって否定されるべき噂です。

ユーノー²も、数えきれないほど続いた苦難も、決してヘーラクレースを

5

打ち砕くことができなかったのに、イオレー³がそのヘーラクレースにくびきをかけたということです。

エウリュステウス⁴もこれを望むでしょうし、雷を鳴らすユピテル⁵の妹ユーノーも

これを望み、あなたの継母でありながら、あなたの生涯の汚点に喜ぶでしょう。

しかしユピテルは喜ばないでしょう。これほど強大なあなたを宿らせるには、

一晚の長さでは足りなかった⁶のですから(もし信じられるならの話です)。

10

ユーノーよりもずっとあなたに害を与えたのはウェヌス⁷です。前者はあなたを

苦しめることで高めました⁸が、後者は卑しい足の下にあなたの首を抑えつけています。

思い出してください。世界が平定されたのは、解放者であるあなたの力によるものだということ⁹を。

紺碧のネーレウス¹⁰が広大な大地を取り囲むこの世界を、です。

大地の平和はあなたのおかげですし、海が安全なものあなたのおかげです。

15

あなたは日の出と日没の太陽の家を両方とも功績で満たしたのです。

あなたを支えることになる天¹¹を、それより先にあなた自らが支えました。

そしてヘーラクレースに代わって、アトラス¹²が星々を担いだのです。

しかし、あなたがこれまでなした功業を、恥ずべき印を積んで完成させるのなら、

あなたは惨めな恥のために周知されることを求めたにすぎないのではないですか。

20

あなたが二匹の蛇を掴んで押さえつけた¹³といわれているのは、揺りかごの中にいる

幼い時でしたが、その時すでにユピテルに相応しかったのではないですか。

功績を締めくくる時よりも始めるときの方が良かったのです。最後が最初に屈しています。

大人になった今のあなたは、子供だったあの頃のあなたと、似ていません。

千の獣も、敵対するステネロスの子¹⁴も、

25

ユーノーも打ち負かすことができなかったあなたを、「愛」が打ち負かしています。

それでも私は、ヘーラクレースの妻と呼ばれ勢いある戦車から

天高く雷鳴を轟かす神¹⁵ユピテルが舅であるのだから良き結婚をしたのだ、と人々に言われています。

しかし、力の釣り合わない雄牛どもを同じ犁には上手くつなげないのと同様に、

夫より劣る妻は、偉大な夫に押しつぶされるのです。

30

それは、誉ではなく、運ぶ者を傷つけることになる形をした重荷です。

女が不満のない結婚をしたいのなら、自分に釣り合う人と結婚をすることです。

私の夫はいつも側におらず、夫としてよりも客人としての方が身近で、

怪物や恐ろしい獣どもを追いかけしています。

ipsa domo vidua votis operata pudicis	35
torqueor, infesto ne vir ab hoste cadat;	
inter serpentes aprosque avidosque leones	
iactor et haesuros terna per ora canes.	
me pecudum fibrae simlacraque inania somni	
ominaque arcana nocte petita movent.	40
aucupor infelix incertae murmura famae	
speque timor dubia spesque timore cadit.	
mater abest queriturque deo placuisse potenti,	
nec pater Amphitryon nec puer Hyllus adest;	
arbiter Eurystheus irae Iunonis iniquae	45
sentitur nobis iraque longa deae.	
haec mihi ferre parum: peregrinos addis amores,	
et mater de te quaelibet esse potest.	
non ego Partheniis temeratam vallibus Augen,	
nec referam partus, Ormeni nympha, tuos;	50
non tibi crimen erunt, Teuthrantia turba, sorores,	
quarum de populo nulla relictæ tibi est.	
una, recens crimen, referetur adultera nobis,	
unde ego sum Lydo facta noverca Lamo.	
Maeandros, terris totiens errator in isdem,	55
qui lassas in se saepe retorquet aquas,	
vidit in Herculeo suspensa monilia collo	
illo, cui caelum sarcina parua fuit.	
non pudit fortes auro cohibere lacertos,	
et solidis gemmas opposuisse toris?	60
nempe sub his animam pestis Nemeaea lacertis	
edidit, unde umerus tegmina laevus habet!	
ausus es hirsutos mitra redimire capillos!	
aptior Herculeae populus alba comae.	
nec te Maeonia lascivæ more puellæ	65
incingi zona dedecuisse putas?	
non tibi succurrit crudi Diomedis imago,	
efferus humana qui dape pavit equas?	
si te vidisset cultu Busiris in isto,	
huic victor victo nempe pudendus eras!	70

私自身は、夫のいない家で、貞淑な祈りに励み、35
敵の攻撃によって夫が倒れはしまいかと、心を悩ませています。
蛇¹⁶や猪¹⁷や食欲な獅子¹⁸や、三つの頭で食らいつこうとする犬¹⁹のことばかり考えて
私は翻弄されています。
家畜の内臓²⁰や、夢に見る空虚な幻影や、
秘密の夜に求められる前兆に私はかき乱されます。40
私は不幸にも不確かな噂のざわめきを追い求めます。
恐れは不確かな希望に屈したり、希望は恐れに屈したりします。
あなたの母親²¹は傍におらず、権能ある神に気に入られたことを嘆いています。
父親のアムピトリュオーン²²も息子のヒュッロス²³も傍にいません。
エウリュステウスは敵意あるユーノーの怒りの行使者であると、45
そしてその女神の怒りは久しいと私には感じられます。
しかしこれらを耐えることはたいしたことではありません。あなたは、異国の愛人たちを
加えたからです。あらゆる女に、あなたから生まれた子供の母親になる可能性があるのです。
私はパルテニオスの谷で犯されたアウゲー²⁴のことや、
オルメノスの孫のニンフ²⁵よ、お前の出産のことを言うつもりはありません。50
テウトラスの孫である、群れなす姉妹たち²⁶——その群れから誰ひとりあなたと交わずに
取り残されたものはいませんが——も、あなたの罪ではありません。
最近の罪として、私はひとりの愛人を挙げましょう。
その女から私はリュエディアのラモスの継母にされてしまった²⁷のです。
同じ土地で何度も向きを変え、55
蛇行に疲れた水を自分の方へと何度も向けるマイアンドロス河²⁸は、
ヘーラクレースの首に首飾りが掛っているのを見ました——
その首にとっては天さえも軽い荷物²⁹だったのに。
屈強な腕を金の飾りで締め付けていたのを、
固い筋肉に宝石をつけたのを恥ずかしいと思わなかったのですか——60
ネメアの災禍³⁰がその腕の下で息を絶やし、
それからあなたの左の肩はその毛皮を身につけているのは確かだというのに。
あなたは大胆にもヘアバンドを毛深い頭に巻いています。
ヘーラクレースの髪には、白いポプラ³¹のほうがより相応しいのに。
奔放な少女たちのように、マイオニア³²の腰帯をあなたに巻きつけるのは65
相応しくなかったと思わないのですか。
野蛮にも人間を餌にして牝馬どもを養った、
残忍なディオメデース³³の姿があなたには思い浮かびませんか。
もしあなたがそのような格好をしているのをブーシーリス³⁴が見たら、
勝ったあなたが、負けた彼に、きっと恥ずかしく思われたことでしょう。70

detrahat Antaeus duro redimicula collo,
 ne pigeat molli succubuisse viro.
 inter Ioniacas calathum tenuisse puellas
 diceris et dominae pertimuisse minas.
 non fugis, Alcide, victricem mille laborum 75
 rasilibus calathis imposuisse manum
 crassaque robusto deducis pollice fila,
 aequaque formosae pensa rependis erae?
 a! quoitens, digitis dum torques stamina duris,
 praevalidae fusos comminuere manus! 80
 [crederis infelix scuticae tremefactus habenis]
 ante pedes dominae [pertimuisse minas...
 eximiis pompis, immania semina laudum]
 factaque narrabas dissimulanda tibi:
 scilicet immanes elisis faucibus hydros 85
 infantem, caudis inuoluisse manum,
 ut Tegeaeus aper cupressifero Erymantho
 incubet et vasto pondere laedat humum.
 non tibi Threiciis adfixa penatibus ora,
 non hominum pingues caede tacentur equae; 90
 prodigiumque triplex, armenti dives Hiberi
 Geryones, quamvis in tribus unus erat;
 inque canes totidem trunco digestus ab uno
 Cerberos implicitis angue minante comis;
 quaeque redundabat fecundo vulnere serpens 95
 fertilis et damnis dives ab ipsa suis;
 quique inter laevumque latus laevumque lacertum
 praegrave compressa fauce pependit onus;
 et male confisum pedibus formaque bimembri
 pulsum Thessalicis agmen equestre iugis. 100
 haec tu Sidonio potes insignitus amictu
 dicere? non cultu lingua retenta silet?
 se quoque nympha tuis ornavit Iardanis armis
 et tulit e capto nota tropaea viro.
 i nunc, tolle animos et fortia facta recense: 105
 quod tu non esses, iure vir illa fuit.

アンタイオス³⁵は、こんななよなよとした男に屈したのを悔まないために、
あなたの固い首から首飾りを奪い取るでしょう。
あなたはイオニア³⁶の娘たちの間で籠を編み、
女主人の脅しにひどく怯えたと言われています。
アルカイオスの孫³⁷よ、あなたは千の難行を成し遂げた手を
なめらかな籠作りに従事させることを拒まなかったのですか。 75
ぎっしりとした糸を逞しい指で紡ぎ、
割り当てられた仕事を全うして美しい女主人³⁸に返済したのですか。
ああ、あなたが固い指で糸を撚る時、
力あふれるあなたの手は、何度錘を壊したことでしょ。 80
[...] ³⁹
女主人の足元で、[...]
[...]
あなたは、あなたにとって隠されるべき功業を語っていたのです。
すなわち、巨大な蛇どもが喉を締め付けられながら、 85
幼子のあなたの手に尻尾で巻き付いたこと⁴⁰や、
どのようにしてテゲアの猪が糸杉の生えるエリュマントス山に棲みつき、
果てしない重さで土地を荒らしていたか⁴¹を、です。
また、トラークアの館に打ち付けられていた人間の頭や、
人間の血肉を食べて肥え太った牝馬どものこと⁴²も、あなたは語らずにはおれませんでした。 90
また、イベリアの家畜を豊かに持つ、三つ首の怪物ゲーリュオネース⁴³
——三つの頭でも体は一つなのですが——のことや、
同じく一つの首から三つ首の犬の頭に分かれ、
絡み合う髪の毛が人を脅かす蛇であるケルベロス⁴⁴のことや、
傷が増えればその分再生し、 95
その損害を受けることで返って自ら増える蛇⁴⁵のことや、
あなたの左の脇と左の腕の間で
喉を押さえつけられて、ぐったりと重くぶら下がった者⁴⁶のことや、
テッサリアの尾根から追われてきた騎馬の一団⁴⁷が、
自らの足と半人半馬の体に自信の持てなくなったことも、語らずにはおれませんでした。 100
これらのことを、あなたはシドンの衣服⁴⁸で飾り立てられて
語ることができたのですか。装いのせいで舌が縛り付けられて黙るということはなかったのですか。
イアルダノスの娘のニンフ⁴⁹は、あなたの武具で自分を飾りもしました。
囚えた男から誉れ高い戦勝品を取り上げたということです。
さあさあ、意気を高めて勇ましい功業を数え上げなさい。 105
あなたはもう「男」ではないのだから、当然、彼女が「男」であつたわけです。

qua tanto minor es, quanto te, maxime rerum,
 quam quos vicisti, vincere maius erat.
 illi procedit rerum mensura tuarum,
 cede bonis: heres laudis amica tuae. 110
 o pudor! hirsuti costis exuta leonis
 aspera texerunt vellera molle latus!
 falleris et nescis: non sunt spolia illa leonis,
 sed tua, tuque feri victor es, illa tui.
 femina tela tulit Lernaëis atra venenis, 115
 ferre gravem lana vix satis apta colum,
 instruxitque manum clava domitrice ferarum,
 vidit et in speculo coniugis arma sui.
 haec tamen audieram; licuit non credere famaë,
 et venit ad sensus mollis ab aure dolor. 120
 ante meos oculos adducitur advena paelex,
 nec mihi, quae patior, dissimulare licet.
 non sinis averti: mediam captiva per urbem
 invitis oculis aspicienda venit.
 nec venit incultis captarum more capillis, 125
 fortunam vultu fassa tacente suam;
 ingreditur late lato spectabilis auro,
 qualiter in Phrygia tu quoque cultus eras.
 dat vultum populo sublimis ut Hercule victo:
 Oechaliæ vivo stare parente putes. 130
 forsitan et pulsa Aetolide Deianira
 nomine deposito paelicis uxor erit,
 Eurytidosque Ioles et Aonii Alcidae
 turpia famosus corpora iunget Hymen.
 mens fugit admonitu, frigusque parambulat artus, 135
 et iacet in gremio languida facta manus.
 me quoque cum multis, sed me sine crimine amasti:
 ne pigeat, pugnae bis tibi causa fui.
 cornua flens legit ripis Achelous in udis
 truncaque limosa tempora mersit aqua; 140
 semivir occubuit in letifero Eveno
 Nessus, et infecit sanguis equinus aquas.

万物最強の勇者よ、あなたが打ち負かした者たちよりも
あなたを打ち負かすことの方が偉大なのだから、その分だけあなたは彼女より劣るのです。
あなたの功績を計る尺度は、彼女に移っているのです。
財産を彼女に譲りなさい。その愛人があなたの誉れの相続人なのですから。 110
ああ、恥ずべきことです。剛毛の獅子の脇腹から剥がれた
粗い毛皮が、柔らかい女の体を覆ったのです。
あなたは勘違いして気付いていないのです。彼女が身につけたのは獅子からの戦利品ではなく、
あなたからの戦利品なのです。獣を打ち負かしたのがあなたで、あなたを打ち負かしたのが彼女です。
羊毛で重くなった糸巻き棒の重みを支えるのもほとんど十分にはできない女のくせに、 115
彼女はレルネーの蛇の毒で黒く染まった矢を携え、
獣たちを圧倒する棍棒で手を武装し、
連れ合いの武具を身につけた自分を鏡に映して見たのです。
けれど、これらは耳にしただけのことです。噂は信じなくても済みました。
それに耳から心にやって来る苦しみは、穏やかなものです。 120
しかし、異国の妾女⁵⁰が連れてこられたのは私の目の前です。
現に耐えていることを、耐えていないふりをするなどできません。
あなたのしたことは私に視線をそらすことも許さないのです。捕らわれの女が
街の真ん中をやってきて、私は見たくないのに目を向けねばならないのですから。
この女は捕虜にそぐわず髪が手入れされており、 125
黙りこくった顔⁵¹で自らの境遇を表していました。
彼女は歩くにしても、たっぷりの黄金で辺りに広く目立ち、
まるでブリュギアであなたが飾られていた時⁵²と同じようでありました。
彼女はヘーラクレースを打ち負かしたかのように、驕って群衆に顔を向けていました。
両親⁵³が生きており、オイカリアーも健在であるかと思うほどです。 130
おそらく彼女は、アイトーリアー⁵⁴女のデーイアネイラを追い出して、
正妻に落ち着いて妾女の名を捨てるつもりなのでしょう。
エウリュトスの娘のイオレーとアーオニア⁵⁵のアルカイオスの孫の
恥ずべき体どうしを、悪名高い結婚の神が結び合わせるのでしょう。
考えるだけで気が遠くなり、寒気が身体中に行き渡り、 135
手は力を失くして膝に落ちます。
私も多くの女達と共にあなたが愛した女たちの一人ですが、私への愛に罪はありませんでした。
後悔なさることになりませんように申しますが、私はあなたにとって二度、戦いの原因になったのです。
というのも、アケローオス⁵⁶は湿気た川岸で、泣きながら自らの角を拾い、
角の切り落とされた額を泥だらけの水に沈めましたし、 140
半人半獣のネッソス⁵⁷は、死をもたらすエウエーノス河⁵⁸で倒れて、
馬の血で川の水を染めたのですから。

sed quid ego haec refero? scribenti nuntia venit
 fama, virum tunicae tabe perire meae.
 ei mihi! quid feci? quo me furor egit amantem? 145
 impia quid dubitas Deianira mori?
 an tuus in media coniunx lacerabitur Oeta,
 tu sceleris tanti causa superstes eris?
 ecquid adhuc habeo facti, cur Herculis uxor
 credar? coniugii mors mea pignus erit. 150
 tu quoque cognosces in me, Meleagre, sororem!
 impia quid dubitas Deianira mori?
 heu deuota domus! solio sedet Agrios alto;
 Oenea desertum nuda senecta premit;
 exulat ignotis Tydeus germanus in oris; 155
 alter fatali vivus in igne fuit;
 exegit ferrum sua per praecordia mater.
 impia quid dubitas Deianira mori?
 deprecor hoc unum per iura sacerrima lecti,
 ne videar fati insidiata tuis. 160
 Nessus, ut est avidum percussus arundine pectus,
 “hic” dixit “vires sanguis amoris habet;”
 illita Nesseo misi tibi texta veneno.
 impia quid dubitas Deianira mori?
 iamque vale, seniorque pater germanaque Gorge, 165
 et patria et patriae frater adempte tuae,
 et tu lux oculis hodierna novissima nostris
 virque —sed o possis!— et puer Hylle, vale!

しかしどうして私はこんなことを述べているのでしょうか。書いている私に、
夫が私の送った衣の毒で死にかかっているとの報告が来ました⁵⁹。
ああ、私は何ということをしてしまったのでしょうか。狂気は私の愛をどこへ駆り立てたのでしょうか。 145
不実なデーイアネイラよ、何故お前は死をためらうのですか。
それとも、お前の夫はオイテーの山中⁶⁰で引き裂かれようとしているのに、
これほどの罪の原因でありながらお前は生き残ろうというのですか。
ヘーラクレースの妻だと信じられるために、私が今なお果たすべきことは
一体何でしょうか——妻の証となるのは、私が死ぬことなのです。 150
メレアグロス⁶¹よ、あなたも、私の中にあなたの妹たる性質を認識することでしょう。
不実なデーイアネイラよ、何故お前は死をためらうのですか。
ああ、呪われた家よ。アグリオス⁶²は高い王座に座り、
見捨てられたオイネウス⁶³を惨めな老年が苛んでいます。
弟テューデウス⁶⁴は見知らぬ岸边に追放されています。 155
もう一方の兄⁶⁵の生命は、死に至らしめる炎の中でした。
母親は剣を突き立て自らの胸を貫きました⁶⁶。
不実なデーイアネイラよ、何故お前は死をためらうのですか。
寢床の神聖な契りにかけて、このことだけはお願いします。
私があなたの破滅を謀ったなどと思わないでください。 160
ネッソスが、食欲な胸を矢で刺された時、
「この血には愛の魔力がある」と言ったのです⁶⁷。
私があなたに送った衣には、ネッソスの毒が塗り込められていたのです。
不実なデーイアネイラよ、何故お前は死をためらうのですか。
もはや、お元気で、老いた父よ、妹ゴルゲー⁶⁸よ、 165
祖国と、あなたの祖国から追い出された兄⁶⁹よ、
私の眼に映るのも最後となる今日の光よ、
夫よ、お元気で(ああ、そう適えばよいのですが)、そして息子ヒュッロスよ、お元気で。

¹ エウボイア島の都市。エウリュトスが統治していた。エウリュトス自身は弓の達人であり、幼少時のヘーラクレースに弓を教えている。エウリュトスは、自分とその息子たちを弓術で負かした者に娘イオレーを与えると布告していた。ヘーラクレースは十二の難業の達成後、イオレーを得ようとしてエウリュトスたちを弓術で制するが、エウリュトスはイオレーを渡すのを断る。その後、怒りゆえか女神ヘーラーに送られた狂気ゆえか、ヘーラクレースはエウリュトスの息子イーピトスを殺害する。このことへの償いと清めのためにヘーラクレースはリュエディアの女王オンパレーの下で奴隷としてしばらくの間（一年間もしくは三年間）奉公しなければならなくなる。奉公の後、ヘーラクレースはオイカリアーに攻め込みエウリュトスを殺害し、イオレーを手に入れた。（アポロドーロス『ギリシア神話』2.4.9-2.7.7、ソポクレース『トラキーニアイ』248-290）

² 女神ヘーラーのローマ名。ヘーラーは、夫ゼウス（＝ユピテル）が人間の女性アルクメーネーと交わりヘーラクレースを儲けたのに嫉妬して、様々な方法でヘーラクレースを苦しめ続けた。

³ オイカリアー王エウリュトスの娘。ヘーラクレースは、捕虜にしたイオレーを愛妾にするため、妻デーイアネイラの下に送り付ける。なおソポクレース『トラキーニアイ』488-489 では、伝令のリカースがデーイアネイラに、「あらゆるものに勝るヘーラクレースがイオレーへの愛に負けた」と報告している。

⁴ ミューケーナイ王。ヘーラクレースと同様、英雄ペルセウスの子孫にあたる。ゼウスはアンピトリュオーンの妻アルクメーネー（両者共にペルセウスの孫）を身籠らせた後、生まれてくるヘーラクレースをミューケーナイ王にするべく「今まさに生まれようとしているペルセウスの子孫がミューケーナイの王になる」と宣言したが、嫉妬したヘーラーがそのゼウスの宣言を逆手にとり、出産を司る女神エイレイテュイア（＝ルーキーナ）に頼んでアルクメーネーの出産を遅らせ、一方でペルセウスの子ステネロスの妻ニーキッペーの出産を早めて、エウリュステウスがヘーラクレースより早く産まれるようにした。エウリュステウスはミューケーナイ王となるが、ヘーラクレースの存在を恐れ、彼を迫害し続けた。

⁵ ギリシアの主神ゼウスのローマ名。女神ヘーラー（ユノー）は、妹にして妻にあたる。人間に罰を与える際に雷を用いるためこのような形容がなされる。

⁶ ゼウスは、アルクメーネーの夫アンピトリュオーンが妻の兄弟の仇打ちのために出征している間、アンピトリュオーンの姿に変身し、戦から帰った夫を装ってアルクメーネーと同衾した。この時ゼウスは太陽神に頼んで、三日間太陽を昇らせないようにし、それほど長い夜の間、アルクメーネーと交わりヘーラクレースを身籠らせた。この後、本物のアンピトリュオーンが戻ってきてのやりとりなどは、喜劇詩人プラウトゥスが『アンピトルオー』で描いている。

⁷ ギリシアの美と愛の女神アプロディーテのローマ名。デーイアネイラは、ヘーラクレースがイオレーに執心しているのをウェヌスのせいであるとしている。

⁸ 「ヘーラクレース」という名前は、女神「ヘーラー」と「栄光」（クレオス）という語からなる。ヘーラクレースはもともと祖父アルカイオスの名前を引き継いで名乗っていたが「アルケイデース」という名前であった。彼はヘーラーに送られた狂気のせいで、テーバイにて最初の妻メガラーとの子供たちを殺してしまった時、どこに自分は居住するべきかの神託を受けにデルポイを訪れた。その時ピュートーの巫女から「ヘーラクレース」と呼ばれ、ティーリュニスに住んでエウリュステウスに仕え、難業を果たし、その後不死になるという神託を受け取った（アポロドーロス『ギリシア神話』2.4.12）。

⁹ エウリュステウスの課した難業やその他の功業は、人々を苦しめていた怪物や人物を退治するという性質のものであった。またエウリーピデース『ヘーラクレース』では、ヘーラクレースは父アンピトリュオーンと共にミューケーナイ帰国を望んだことから、エウリュステウスに世界を平和にするという仕事を申し出たことになっている（エウリーピデース『ヘーラクレース』13-21）。

¹⁰ 海神。ここでは単純に「海」の比喻として言及されている。ネーレウス自身は賢明な「海の老人」として知られ、自由に姿を変える力を持っていた。ヘーラクレースは第十一の難業で、ヘスペリデスの黄金の林檎がどこにあるかを知るために、様々な姿に変身するネーレウスを捕えて問い質した（アポロドーロス『ギリシア神話』2.5.11）。

¹¹ これはヘーラクレースの死を予示するかのような奇妙な述べ方であるが、「ヘーラクレースがいずれ不死になる」という神託（注 8 参照）を踏まえてのものであると思われる。

¹² ティーターン神族の一人。ゼウスらオリュンポス神族との戦いに敗れたことから、天空を支えるという罰を課されていた。アトラスはヘスペリデスの父親であったことから、ヘーラクレースはアトラスの代わり

に天空を支えることを引き受け、アトラスにヘスペリデスの黄金の林檎を取ってこさせた。林檎を取ってきたアトラスは、天空を再び支えたくないの、林檎は自分がエウリュステウスに渡してくるといって立ち去ろうとした。そこでヘーラクレースは、それを承諾したかのように見せかけて、体勢を変えたいから一時的にアトラスに天空を支えてくれと云って天空を渡し、そのまま林檎を持って立ち去った(アポロドーロス『ギリシア神話』2.5.11)。

¹³ アルクメーネーはゼウスとの子としてヘーラクレースを、夫アンピトリュオーンとの子としてイーピクレースを産んだ。女神ヘーラーは、まだ赤子のヘーラクレースを殺そうとして、二人の寝床に二匹の蛇を送った。この時イーピクレースは逃げたのに対し、ヘーラクレースは二匹の蛇を掴んで絞殺した(アポロドーロス『ギリシア神話』2.4.8)。

¹⁴ ミューケーナイ王エウリュステウスのこと。エウリュステウスの父ステネロスはペルセウスの子であり、アンピトリュオーンの父アルカイオスや、アルクメーネーの父エーレクトリュオーンと兄弟にあたる。エーレクトリュオーンがミューケーナイ王だった時、アンピトリュオーンは誤って彼を殺してしまう。そこでステネロスはこれを口実にアルゴス全土(アルゴリス地方)からアンピトリュオーンを追放し、ミューケーナイとティーリュュンスを支配した。またステネロスはペロプスの娘ニーキッペーを妻に迎えており、その縁から近隣のミデアをニーキッペーの兄弟のアトレウスとテュエステースに委任した(アポロドーロス『ギリシア神話』2.4.6)。この縁が、エウリュステウス死後のミューケーナイ王位がアトレウス一族に受け継がれるのに繋がる。

¹⁵ 注5参照。

¹⁶ ヘーラクレースは第二の難業として、アルゴリス地方の沼沢地レルネーに棲む水蛇ヒュドラーを退治した。ヒュドラーは巨体で、九つの頭を有し、一つの頭を潰しても、そこから二つの頭になって再生するというものであった。ヘーラクレースは、自分にとっては甥にあたる、イーピクレースの子イオラーオスの助けを得て、潰した頭の付け根を焼いてもらうことで頭の再生を封じ、ヒュドラーを倒した。ヘーラクレースはこのヒュドラーの胆汁に自分の矢を浸し、強力な毒矢とした(アポロドーロス『ギリシア神話』2.5.2)。

¹⁷ ヘーラクレースは第四の難業として、アルカディア地方のエリュマントス山に棲む猪を捕獲した(アポロドーロス『ギリシア神話』2.5.4)。ヘーラクレースが生け捕った猪をエウリュステウスの下に運んで来た時、エウリュステウスは恐れて地中に埋めた甕の中に隠れたということがしばしば陶器画や浮彫の題材になっている。

¹⁸ ヘーラクレースは、まだ若い頃にキタイローン山の獅子を退治した。ヘーラクレースはその毛皮を身にまとい、この獅子の頭の毛皮をそのまま兜代りにした。(アポロドーロス『ギリシア神話』2.4.10)。また、第一の難業として、ペロポネーソス半島北東部のネメアの谷に棲む獅子を絞殺した(アポロドーロス『ギリシア神話』2.5.1)。

¹⁹ 冥界の番犬ケルベロスのこと。冥界から逃げ出そうとする亡者を監視する役目を果たしている。三つの頭を持ち、鬣は一本一本が蛇で、尾も蛇という姿形が一般的なものとして知られている。ヘーラクレースは第十二の難業として、冥界に下りケルベロスを捕えて地上に連れ帰り、エウリュステウスに見せた後、また冥界に戻した(アポロドーロス『ギリシア神話』2.5.12)。

²⁰ 古代ギリシア・ローマでは、家畜の内臓の筋を見て吉凶を占っていた。

²¹ ヘーラクレースの母アルクメーネーは、夫アンピトリュオーンの姿を装ったゼウスと交わり、ヘーラクレースを儲けた。注4および注6参照。デーイアネイラの手紙の執筆時点でアルクメーネーは、ヘーラクレースを産んだ際に身を寄せていたテーバイか、夫の故国ティーリュュンスにいたと考えられる。一方デーイアネイラは、ヘーラクレースの殺人(エウリュトスの息子イーピトス殺害(ソボクレース『トラキヤニア』))もしくはデーイアネイラの父オイネウスの近親のエウノモス殺害(アポロドーロス『ギリシア神話』2.7.6))の禊ぎのため、ヘーラクレースと共にトラキヤに移り住んでいた。その後ヘーラクレースはオイカリアーに遠征した。

²² ヘーラクレースにとっては育ての父親にあたる。ティーリュュンス王アルカイオスの子。注6および注14参照。テーバイにてヘーラクレースを育てた後、ヘーラクレースの行動が発端となって、テーバイを搾取していたオルコメノス王エルギーノスが攻め寄せるといふ事態が起こり、その際に戦死した(アポロドーロス『ギリシア神話』2.4.11)。なおエウリーピデース『ヘーラクレース』では、アンピトリュオーンは存命している。

²³ ヘーラクレースとデーイアネイラに生まれた子供たちのうちの長子。ソボクレース『トラキヤニア』では、ヒュッロスははじめ母デーイアネイラの許に在るが、オイカリアーを攻めようとしている父を助けるよ

うにと、ヘーラクレースのもとへ向かって出発する(ソポクレース『トラキーニアイ』61-93)。それゆえデーイアネイラの手紙の執筆時点でヒュッロスは不在であると考えられるが、彼女にヘーラクレース瀕死の報を伝えるのは帰還した彼でもある(ソポクレース『トラキーニアイ』731ff.)。

²⁴ アルカディア地方のテゲアの王アレオスの娘。ヘーラクレースに立場を知られることなく犯され、男児を産んだが、パルテニオス山に棄てた。男児は牝鹿に乳を与えられ、牧人に拾われて育てられ、テーレポスと名付けられた。アウゲーとテーレポスについて詳しくは、アポロドーロス『ギリシア神話』2.7.4 およびヒュギーヌス『神話集』99-101 参照。

²⁵ オルメノスの子であり、オルメニオンの王であるアミュントールの娘。ヘーラクレースと交わり一子クテーシッポスを儲けた(アポロドーロス『ギリシア神話』2.7.8)。彼女について伝える伝承は少ない。アミュントール自身はヘーラクレースに殺されている(アポロドーロス『ギリシア神話』2.7.7)。

²⁶ ボイオティア地方のテスピアイの王テスピオスの、50 人の娘たち。テウトラスの名は普通、注 25 で述べたアウゲーが身を寄せた小アジアのミュシアの王の名で知られているが、ここではテスピオスの父として名が挙げられている。ヘーラクレースが若い頃にキタイローンの獅子を退治しようとしてテスピオスの許に滞在した時(注 18)、テスピオスは 50 日間歓待し、自分の 50 人の娘たち全てをヘーラクレースと交わらせた。この時ヘーラクレース自身は、毎夜同衾している娘は同じ娘だと思っていた(アポロドーロス『ギリシア神話』2.4.10)。テスピオスの娘たちとの間に生まれた子供の名は、アポロドーロス『ギリシア神話』2.7.8 に列挙されている。

²⁷ ここで挙げられている愛人とは、小アジアのリュウディアの女王オンパレーのことである。イーピトス殺害後の神託により奴隷として売られていたヘーラクレースを買い取った(注 1 参照)。この間にラモスという名の子を儲けたが、アポロドーロス『ギリシア神話』2.7.8 では子の名はアゲラーオスとなっている。以下、続くデーイアネイラの手紙で述べられるように、オンパレーはヘーラクレースに女の装いをさせて女の仕事に従事させる一方、自分はヘーラクレースの装備を身に付けた。このような様子をオウィディウスは『祭暦』でも描いている(『祭暦』2.305-358)。

²⁸ 小アジアを流れる河。非常に複雑に蛇行していることで有名。エーゲ海に注ぐ。

²⁹ ヘーラクレースはアトラースの代わりに天空を支えた。注 12 参照。

³⁰ ヘーラクレースが第一の難業で倒した、ネメアの獅子のこと。注 18 参照。矢では傷付けることができなかったのも、絞殺した。ヘーラクレースはキタイローンの獅子を退治した時からその毛皮を身にまとっていたが、このデーイアネイラの手紙では、このネメアの獅子の毛皮を身にまとったことになっている。

³¹ 白いポプラの冠は、しばしばヘーラクレースのアトリビュートとなっている(cf. テオクリトス『牧歌』2.121)。

³² リュウディアの別名。

³³ トラキアの、大変好戦的なビストーン族の王。人食い馬を飼っていた。ヘーラクレースの第八の難業が、この人食い馬を連れて帰ることであり、ディオメデースを殺して、エウリュステウスのもとに馬を連れてきた(アポロドーロス『ギリシア神話』2.5.8)。アポロドーロスは人食い馬を牝馬としており、このデーイアネイラの手紙でもそのように述べているが、ヒュギーヌスは四頭の牡馬の名(ボダルゴス、ラムポーン、クサントス、デイノス)を挙げている(『神話集』30)。なお、テューデウスの子ディオメデースとは別人。

³⁴ エジプト王。彼は神託に従い異国人を捕えてはゼウスへの犠牲に捧げていた。ヘーラクレースはヘスペリデスの林檎を手に入れに向かう途中でエジプトを通りがかり、ブーシーリスに捕えられ祭壇に連れて行かれるが、縛めを破りブーシーリスとその息子を殺した(アポロドーロス『ギリシア神話』2.5.11)。

³⁵ リビアに住んでいた巨人。海神ポセイドンと大地ガイアの子とされる。旅人に相撲を強いては殺していた。ヘーラクレースはヘスペリスの林檎を手に入れに向かう途中でリビアを通りがかり、アンタイオスに相撲を挑まれた。アンタイオスは大地に触れる度に強くなるので、ヘーラクレースは彼を持ち上げて彼が地面に触れないようにし、締め付けて殺した(アポロドーロス『ギリシア神話』2.5.11)。

³⁶ 小アジアのエーゲ海に面した一地域。リュウディア領内に含まれる。

³⁷ ヘーラクレースのこと。「アルケイデース」という言葉は、「アルカイオスの孫」を意味するとともにヘーラクレースの元々の名前でもある。注 8 参照。

³⁸ オンパレーのこと。

³⁹ これらの箇所は意味が通らないため、テキストの伝承過程において破損したものとみなされて

いる。

⁴⁰ 注 13 参照。

⁴¹ 注 17 参照。なお、アルカディア地方のうち、エリュマントスは北東部でありテゲアは南西部であり両者の位置は離れている。ここで「テゲアの」という形容が猪になされているのは、単純に「アルカディアの」ということを意味している。

⁴² ディオメーデースの人食い馬のこと。注 33 参照。なお「トラキアの館に打ち付けられていた人間の頭」にはディオメーデースの好戦性が現れている。

⁴³ 三人の男の体が一つになっている、三頭三身の怪物。このゲーリュオネースの飼っている牛どもを連れてくることが、ヘーラクレースの第十の難業であった。彼はイベリア半島近くの、大洋(オーケアノス)に近いエリュティアという島に住んでいた。ヘーラクレースは太陽神ヘーリオスの助けを得てエリュティアに到着し、ゲーリュオネースを倒して牛どもを奪った。帰路の途中、一部牛どもが逃げ出すという事態もあったが、エウリュステウスに牛どもを届けることができた(アポロドーロス『ギリシア神話』2.5.10)。なおローマの伝承では、ヘーラクレースがこの帰路の途中で後にローマのパラティウム丘となるところにやって来た時、カークスという盗賊がこの牛どもを盗み隠したという話に加えられている。ヘーラクレースはカークスを倒し牛を取り戻した(ウェルギリウス『アエネーイス』8.185-275)。

⁴⁴ 注 19 参照。

⁴⁵ 注 16 参照。

⁴⁶ アンタイオスのこと。注 35 参照。

⁴⁷ ヘーラクレースはエリュマントスの猪を捕えに行く際に、アルカディア地方のポロエーにて、半人半馬のケンタウロス族のポロスの歓待を受けた。この際、ケンタウロス族共有の酒の甕を開けたので、他のケンタウロスたちが攻めてきた。このケンタウロスたちは元々はテッサリア地方のペーリオン山に住んでいたが、テーセウス・ペイリトス・ラピテース族との争いのためテッサリア地方を追われて、アルカディア地方に棲みついていた者たちであった。攻めてきたケンタウロスたちをヘーラクレースは矢を射て追い払った。この中には後にヘーラクレースに仇なすことになるケンタウロスのネッソスもあり、彼はこの際エウエーノス河にまで逃れた(アポロドーロス『ギリシア神話』2.5.4)。

⁴⁸ フェニキアの都市。染色業が発達していた。

⁴⁹ オンパレーのこと。オンパレーはイアルダノースを父とし、リュウディアー王トモーロスの妃であったが、夫が亡くなった際にその支配権を引き継いだ(アポロドーロス『ギリシア神話』2.6.3)。

⁵⁰ イオレーのこと。ソポクレース『トラキーニアイ』225ff. では、トラキースにいるデーイアネイラの前に、まさにイオレーが連れてこられる。

⁵¹ ソポクレース『トラキーニアイ』では、デーイアネイラは二度イオレー本人に素性を尋ねるが(307-309, 320-321)、イオレーは沈黙を保ち返答しない。

⁵² プリュギアはリュウディアーを言い換えたもの。すなわちここでは、ヘーラクレースがオンパレーの許で女装していた時のことを指している。

⁵³ すなわち、父エウリュトスと母アンティオケー。

⁵⁴ デーイアネイラの故郷カリュドーンは、ギリシア中部のアイトーリア地方にある。

⁵⁵ ギリシア中部のボイオーティア地方のこと。ボイオーティア地方のテーバイでヘーラクレースは生まれたことから、このように表現している。

⁵⁶ アイトーリア地方とその西のアカルナニア地方の境をなす大河アケローオス河の化身。カリュドーン王オイネウスの娘デーイアネイラに求婚していた。デーイアネイラを娶ることに決めたヘーラクレースは、蛇や牡牛に変身するアケローオスと格闘して圧倒し、アケローオスの二本の角のうち一方を折って、敗退せしめた(アポロドーロス『ギリシア神話』2.7.5)。このことはソポクレース『トラキーニアイ』でも言及され(6-21, 496-530)、またオウィディウス『変身物語』9.3-88 では、アケローオス自らがこのヘーラクレースとの戦いを語る。

⁵⁷ 半人半馬のケンタウロス族の一人。一般的なケンタウロス族は、女神ヘーラーに恋したイクシーオーンがヘーラーに似せた雲と交わったことで生まれたとされる(アポロドーロス『ギリシア神話』E.1.20)。ヘーラクレースとデーイアネイラがエウエーノス河を渡ろうとした際に、ネッソスは手助けすることを申し出、デーイアネイラを運んで渡すことになるが、彼女を犯そうとしたため、ヘーラクレースにレルネーのヒュドラの毒が塗られた矢で射られて殺された(アポロドーロス『ギリシア神話』2.7.6、ソポクレース『トラキ

ーニアイ』553-578、オウィディウス『変身物語』9.101-133)。

⁵⁸ アイトーリア地方の東部を流れる急流。かつてアイトーリア王エウエーノスが、奪われた娘を取り戻せず、この河のところで、乗ってきた馬を殺し身を投げて死んだことから、この河はエウエーノス河と呼ばれるようになった(アポロドーロス『ギリシア神話』1.7.8)。

⁵⁹ ソポクレース『トラキーニアイ』では、734 以下から、息子ヒュッロスが帰ってきてデーイアネイラにヘーラクレース瀕死の報告をする。

⁶⁰ トラーキース近くの山。苦しみながらも死ねないヘーラクレースは、ここで自らを火葬にすることにした(アポロドーロス『ギリシア神話』2.7.7、ソポクレース『トラキーニアイ』1191ff、オウィディウス『変身物語』9.159-272)。なおソポクレース『トラキーニアイ』ではデーイアネイラの死後にヘーラクレースはオイテール山に自分を連れて行くようヒュッロスに告げるため、この時点でデーイアネイラがオイテール山での夫の葬送のことを知っているのは奇妙であるように感じるが、ヒュッロスがデーイアネイラにした報告(797-802)にオイテール山でヘーラクレースは死のうとしているということが含意されていると解釈することができる。

⁶¹ デーイアネイラの兄メレアグロスには既に亡くなっていた。これについては注 65 参照。メレアグロスは、ヘーラクレースがケルベロスを捕獲しに冥界を訪れた際、ヘーラクレースに妹デーイアネイラを紹介した(バッキュリデース『祝勝歌』5.56-175)。

⁶² カリュドーン王オイネウスの兄。彼の息子たちは、メレアグロスやテューデウスがいなくなった後、カリュドーンの王位を奪って父アグリオスに与え、オイネウスを幽閉して虐待していた。後に、オイネウスの孫ディオメーデース(テューデウスの子)がアルゴスからやってきて王位を取り戻し、オイネウスの娘ゴルゲーの夫アンドライモーンに王位を与える(アポロドーロス『ギリシア神話』1.8.6)。

⁶³ デーイアネイラ、メレアグロス、テューデウス、ゴルゲーの父。注 62 参照。

⁶⁴ テューデウスは、アルタイアーの死後にオイネウスが娶った後妻から生まれた。デーイアネイラとは異母姉弟になる。テューデウスは殺人の汚れを受けたためカリュドーンを追われた(彼が誰を殺したかについては諸説ある)。この後テューデウスは、アルゴス王アドラストスに受け入れられ、アドラストスの娘と結婚し一子ディオメーデースを儲け、テーバイ攻めの戦争に参加し死亡した(アポロドーロス『ギリシア神話』1.8.5)。

⁶⁵ メレアグロスのこと。彼が生まれた時に、「炉の上の燃え木が燃え尽きてしまった時に死ぬ」と運命の女神モイライが母アルタイアーに告げた。これを聞いたアルタイアーは燃え木を取り上げて箱の中にしまっておいた。その後、カリュドーンの猪狩りの際、手柄を争ってメレアグロスはアルタイアーの兄弟にあたる叔父たちを殺してしまったため母アルタイアーの怒りを買ひ、アルタイアーはこの燃え木に火をつけて息子メレアグロスを死に至らしめた。そして彼女も自害した(アポロドーロス『ギリシア神話』1.8.2-3、オウィディウス『変身物語』8.267-546、アントーニヌス・リーベラーリス『変身物語集』2)。

⁶⁶ メレアグロス、デーイアネイラ、ゴルゲーの母。注 65 参照。

⁶⁷ ソポクレース『トラキーニアイ』569-577 でも、デーイアネイラはネッソスに告げられた言葉を直接引用している。

⁶⁸ メレアグロスの死に際し、メレアグロスの姉妹たちは悲しみのあまりホロホロ鳥に変身した。この際、デーイアネイラとゴルゲーだけは変身しなかった(オウィディウス『変身物語』8.533-546)。これは、酒神ディオニューソスが恵みをかけたためであるという(アントーニヌス・リーベラーリス『変身物語集』2)。なお、デーイアネイラの本当の父はディオニューソスであるという伝承もある(アポロドーロス『ギリシア神話』1.8.1)。後に、ゴルゲーの夫アンドライモーンはカリュドーン王となった。注 62 参照。

⁶⁹ テューデウスのこと。注 64 参照。

第 12 歌「メーディアからイアーゾーンへの手紙」対訳

第 12 歌「メーディアからイアーソーンへの手紙」背景

メーディアは、英雄イアーソーンに激しい恋心を抱き、彼を何度も助けたにもかかわらず、最終的に裏切られ、彼との間にできた子供たちを殺して彼のもとを去るという話で有名である。

メーディアは黒海東岸の辺境の地コルキスの王女であった。彼女は太陽神ヘーリオス（＝ソール）を祖父とし、呪術で名高いキルケーを叔母としており、メーディア自身、呪術を司る女神ヘカターを篤く信仰して、呪術や薬草術に深く通じていた。そして彼女が乙女としての身持ちを保ちながらコルキスで暮らしていたところで出会ったのが、イアーソーンである。

イアーソーンはギリシア本土のテッサリア地方のイオールコスから、数多の勇士たちを引き連れて、この航海の為に造られたアルゴー船に乗ってやってきた。彼の目的は、コルキスにあるという金羊毛皮を手に入れることであった。彼の叔父ペリアースがイオールコスの王位を父アイソーンから不当に篡奪しており、王位返還を求めてイオールコスを訪れたイアーソーン（彼は成人するまでケンタウロス族の賢者ケイローンにペーリオン山で養育されていた）に、ペリアースは「王位を返して欲しいのなら、コルキスから金羊毛皮を取ってこい」と命じたためである。

この金羊毛皮とは、かつてボイオーティア王アタマースの子プリクソス（アイソーンにとっては従兄弟にあたる）が、継母の謀略による殺害から逃れるため、神から授けられた黄金の羊の毛皮である。プリクソスはこの黄金の羊に乗ってコルキスまで辿りつき、その羊を神に捧げその毛皮をコルキス王アイエーテースに献上したのである。

なおプリクソスはアイエーテースの娘カルキオペー（メーディアの姉）と結婚し子供たちも儲けていた。そしてちょうどプリクソスは亡くなり（アイエーテースに殺されたとも）、プリクソスの子たちは祖父アタマースの財産を手に入れるためギリシアに向かって航海をしているところだった。その際に難破し、アルゴー船一行に救われ、プリクソスの子らはコルキスまでイアーソーンたちを案内してきていた。

メーディアの父アイエーテースは、金羊毛皮を要求するイアーソーンに試練を課した。火を吐き青銅の足を持つ牡牛たちを軛に繋いで畑を耕すことと、その畑に竜の歯を撒き、そこから生みだされる戦士たちを倒すことである。またイアーソーンたちを案内してきたプリクソスの子らに追放を言い渡した。

イアーソーンがアイエーテースに謁見した時、メーディアは彼を見て恋に落ちた。これにはイアーソーンを見守っていた女神ヘーラー（＝ユーノー）が愛の女神アプロディーテー（＝ウェヌス）に頼み、エロース（＝アモル）の恋の矢をメーディアに刺させて彼女にイアーソーンを助けさせようとしたためでもある。彼女は、姉カルキオペーから、追放を言い渡された子供たちをイアーソーンたちと一緒に無事ギリシアに送りたいという頼みも受けて、イアーソーンからの助力の願いを受け容れた。この時二人は結婚の約束もした。

そして彼女の呪術の助けによりアイエーテースの課した二つの試練を果たした。しかしアイエーテースは金羊毛皮を渡そうとはせず、イアーソーンたちを殺す算段であった。そこで、イアーソーンはまたメーディアの助けを借りて、金羊毛皮を守って寝ずの番をする竜を呪術で眠らせてこれを奪い、メーディアと共にコルキスを脱出した。この時メーディアは幼い弟アプシュルトスを連れてアルゴー船に乗船した。

アイエーテースからの追手を遅らせるため、メーディアは弟アプシュルトスを殺害し、バラバラにして海に撒いた。それゆえ、遺体を拾い集める手間をかけさせることで追手たちを引き離すことができた（なおアプシュルトスは兄であり、追手として来たところを、メーディアに謀られて、イアーソーンに殺されたという伝承もある）。そうしてメーディアとイアーソーンは、途中、叔母キルケーのもとでの汚れの清めや、パイエーケス人の国での婚礼の式を経て、イオールコスに辿りついた。

ここで、父アイソーンは既に殺されていたとの伝承もある。そしてペリアースへの報復のため、またイアーソーンはメーディアの手を借りる。彼女の呪術を用いてペリアースの娘たちを欺き、「父ペリアースを若返らせる」と信じ込ませ、娘たちにペリアースを八つ裂きにさせたのである。この事件のためメーディアとイアーソーンはイオールコスを追われ、コリントスで暮らすことになった。彼女らはそこで二子を儲け 10 年間仲睦まじく暮らしていたが、やがてイアーソーンはコリントス王女クレウーサ（グラウケーとも）との婚姻を望むようになった。コリントス王クレオンもこれを受け入れ、イアーソーンはメーディアに離縁と追放を言い渡す。『名高き女たちの手紙』第 12 歌は、この時メーディアがイアーソーンに宛てて書いたものである。

そしてメーディアはイアーソーンやクレオン・クレウーサへの復讐を考える。ちょうどメーディアのもとにアテーナイ王アイゲウスが相談に訪れたため、亡命の際に受け容れてもらうよう約束を交わす。そして彼女は、イアーソーンとの和解を装い、子供たちをつかって呪術による毒を塗りこんだ高価な衣装をクレウーサのもとに送り届け、クレウーサをその父クレオンもろとも焼き殺すのである。そして自分の子供二人も殺し、その遺骸をイアーソーンに見せつけて、自分は祖父ヘーリオス（＝ソール）から授かっていた竜車でコリントスを去る。

この後イアーソーンは、女神ヘーラーに奉納したアルゴー船の残骸が頭の上に落ちてきて死んだとされる。またメーディアはアテーナイに逃れアイゲウスの妻になるが、アイゲウスの息子テーセウスの殺害未遂の為再び亡命し、最終的にはコルキスに戻り、王権を篡奪していた叔父ペルセースを殺し、父アイエーテースを助けたとされる。

メーディアとイアーソーンの物語は、アポローニオス・ロディオスが『アルゴナウティカ』で出会いからイオールコス帰国までを描いており、エウリーピデースが『メーディア』でコリントスでの惨劇を描いている。またオウィディウスも『変身物語』7.1-424 で、特にイアーソーンとの出会いとペリアース殺しに焦点を当てながら、メーディアがアテーナイから逃げるまでを描いている。

XII. MEDEA IASONI

At tibi Colchorum, memini, regina vacavi,
ars mea cum peteres ut tibi ferret opem.
tunc, quae dispensant mortalia fata, sorores
debuerant fusos evoluisse meos.
tum potui Medea mori bene: quidquid ab illo 5
produxi vitam tempore, poena fuit.
ei mihi! cur umquam iuvenalibus acta lacertis
Phrixeam petiit Pelias arbor ovem?
cur umquam Colchi Magnetida vidimus Argon
turbaque Phasiacam Graia bibistis aquam? 10
cur mihi plus aequo flavi placuere capilli
et decor et linguae gratia ficta tuae?
aut, semel in nostras quoniam nova puppis harenas
venerat audacis attuleratque viros,
isset anhelatos non praemedicatus in ignes 15
immemor Aesonides oraque adusta boum;
semina iecisset, totidem quot semina et hostes,
ut caderet cultu cultor ab ipse suo.
quantum perfidiae tecum, scelerate, perisset!
dempta forent capiti quam mala multa meo! 20
est aliqua ingrato meritum exprobrare voluptas:
hac fruar, haec de te gaudia sola feram.
iussus inexpertam Colchos advertere puppim
intrasti patriae regna beata meae.
hoc illic Medea fui, nova nupta quod hic est; 25
quam pater est illi, tam mihi dives erat.
hic Ephyren bimarem, Scythia tenus ille nivosa
omne tenet, Ponti qua plaga laeva iacet.
Accipit hospitio iuvenes Aeeta Pelasgos,
et premitis pictos, corpora Graia, toros. 30
tunc ego te vidi, tunc coepi scire, quis esses;
illa fuit mentis prima ruina meae.
et vidi et perii nec notis ignibus arsi,
ardet ut ad magnos pinea taeda deos.

第 12 歌「メーディアからイアーソーンへの手紙」

しかし——忘れることなどできません——コルキスの王女¹だった私は、

私の魔術があなたに助けをもたらすよう、あなたに求められた時に、時間をあなたに割きました。

その時、死すべき人間の運命を司る姉妹たち²が、

私の錘を巻き終えるべきだったのです。

そうすればメーディアは立派に死ぬことができたでしょう。

5

その時から命を長らえた時間は全て、罰でした。

ああ、一体どうして、若者たちの腕によって漕ぎ進められて

ペーリオン山の木から造られた船³はプリクソスの羊⁴を目指したのでしょうか。

一体どうして私たちコルキス人は、マグネーシア⁵のアルゴー船⁶を見、

あなたがたギリシア人一行はパーシス川⁷の水を飲んだのでしょうか。

10

どうして私は、あなたの黄金色の髪と優雅さと

あなたの舌がなす偽りの好意を、度を越えて気に入ってしまったのでしょうか。

あるいは、ひとたび、見たこともない船が私たちの砂浜に

やって来て無謀な男たちを引き連れてきた時に、

恩知らずのアイソーンの息子⁸は、あらかじめ魔術で守られることなく、

15

吐き出された火と焼かれた牛どもの鼻面へと向かっていけばよかった⁹のです。

種を蒔いて、その種と同じ数だけ敵を生み出し、

その結果蒔き手自身が自らの蒔いた種によって倒されればよかった¹⁰のです。

そうであれば、罪深い人よ、どれほど多くの不実があなたと一緒に滅びたことでしょう。

私の頭からもどれほど多くの災いが取り除かれたことでしょう。

20

私の功績を思い出させて恩知らずのあなたを非難したいという望みがそれなりにあります。

これを私は楽しむことにしましょう。私はあなたからこの唯一の喜びを得ることにしましょう。

航海経験のない船をコルキスへと向けるよう命じられたあなたは、

私の祖国たる美しい王国へと入って来ました。

この地でメーディアは、今あなたのもとに別の女¹¹がそうであるように、新婦となったのです。

25

彼女の父¹²が富裕であるのと同じくらい、私の父¹³も富裕でした。

彼女の父は二つの海に挟まれたエピュレー¹⁴を治めています、私の父は、

雪の多いスキュティアまで、ポントウスの左岸の広がる全域¹⁵を治めています。

父アイエーテースがギリシアの若者たちを歓待して迎え入れ、

あなたたちはギリシアの肉体を彩られた寝椅子に休めました¹⁶。

30

その時私はあなたを見ました。その時私はあなたが誰であるかを知り始めました。

それは私の心の崩壊の始まりでした。

私はあなたを見て、生きていられなくなり、知りもしなかった火によって燃えました。

ちょうど、偉大なる神々へと捧げる松明が燃えるかのように。

et formosus eras, et me mea fata trahebant: 35
 abstulerant oculi lumina nostra tui.
 perfide, sensisti: quis enim bene celat amorem?
 eminet indicio prodita flamma suo.
 dicitur interea tibi lex, ut dura ferorum
 insolito premeres vomere colla boum. 40
 Martis erant tauri plus quam per cornua saeui,
 quorum terribilis spiritus ignis erat;
 aere pedes solidi praetentaque naribus aera,
 nigra per adflatus haec quoque facta suos.
 semina praeterea populos genitura iuberis 45
 spargere devota lata per arva manu,
 qui peterent natis secum tua corpora telis:
 illa est agricolae messis iniqua suo.
 lumina custodis succumbere nescia somno
 ultimus est aliqua decipere arte labor. 50
 dixerat Aeetes; maesti consurgitis omnes,
 mensaque purpureos deserit alta toros.
 quam tibi tunc longe regnum dotale Creusae
 et socer et magni nata Creontis erat!
 tristis abis; oculis abeuntem prosequor udis, 55
 et dixit tenui murmure lingua “vale!”
 ut positum tetigi thalamo male saucia lectum,
 acta est per lacrimas nox mihi, quanta fuit:
 ante oculos taurique meos segetesque nefandae,
 ante meos oculos pervigil anguis erat. 60
 hinc amor, hinc timor est; ipsum timor auget amorem.
 mane erat, et thalamo cara recepta soror
 disiectamque comas aversaque in ora iacentem
 invenit, et lacrimis omnia plena meis.
 orat opem Minyis. alter petit, alter habebit: 65
 Aesonio iuveni quod rogat illa, damus.
 est nemus et piceis et frondibus ilicis atrum:
 vix illuc radiis solis adire licet.
 sunt in eo —fuerant certe— delubra Dianae;
 aurea barbarica stat dea facta manu. 70

あなたは美しく、私の運命は私を引き摺り始めました。 35

あなたの目が私の視線を奪い去っていたからです。

不実な者よ、あなたは感付いていました。実際、誰が上手に愛を隠せるでしょうか。

炎は自らの通告により露見し、目立っていました。

一方、あなたには条件が言い渡されました。荒々しい牛どもの堅い首を、
普段着けられたことのない犁で押さえつけるように、と。 40

マルス¹⁷の所有するその牛どもは、角によって荒々しい以上のものであり、
その吐く息は恐ろしい火でした。

脚は青銅で固く、その青銅は鼻面にまで伸び広がっており、
この青銅も自らの吐く息で黒くなっています。

さらにあなたが命じられたのは、人間を生み出すこととなる種子を、 45

広い耕地に蒔くことです——蒔く手が死を約束することになるのですが。

というのも種から生まれる人間は、共に生み出される武器であなたの体を攻撃するからです。

その収穫物は、その耕地の農夫にとっては理不尽なものなのです。

そして最後の仕事は、眠りに屈することを知らない見張り¹⁸の目を
何らかの術で欺くことでした。 50

このようにアイエーテースは言い終えると、あなたたちは皆悲しみに沈んで席を立ち、
高い食卓は深紅の寝椅子から片付けられました。

あの時、あなたから何と遠くにあったことでしょう——権勢を奮うクレオーンも、
その娘クレウーサも、その持参金たる王国¹⁹も。

悲しげにあなたは立ち去りました。立ち去るあなたを見送る私の目は潤んでいました。 55

そして私の舌は、「ご無事で」、とかすかにつぶやきました。

ひどく傷ついていた私は、寝室で整えられた寝床に横たわると、
一晩中涙を流して夜を過ごしました。

私の目の前には牛どもと忌まわしい耕地が、
私の目の前には眠ることない竜が浮かんできました。 60

一方には愛が、一方には恐怖があり、恐怖が愛もまた強めます。

朝になり、私の愛しい姉²⁰が寝室に入って来ると、
姉は気づきました——私が髪を振り乱し、顔を伏して横たわっており、
そして全てのものが私の涙で満たされているのを。

姉はミニュアースの子孫たち²¹に助けを求めました²²。一方が求めれば、一方は引き受けるというものです。 65

姉がアイソーンの若息子に懇願することを、私は了承しました。

松と樅の木の葉で覆われて暗い森があります。
太陽の光がここに差し入ることはほとんどありません。

ここには——確かに言えるのは「あった」ことですが——ディアーナ²³の神殿があります。

蛮族²⁴の手で作られた黄金の女神像が立っています。 70

noscis? an exciderunt mecum loca? venimus illuc;
 orsus es infido sic prior ore loqui:
 “ius tibi et arbitrium nostrae fortuna salutis
 tradidit, inque tua est vitae morsque manu.
 perdere posse sat est, siquem iuvet ipsa potestas; 75
 sed tibi servatus gloria maior ero.
 per mala nostra precor, quorum potes esse levamen,
 per genus et numen cuncta videntis avi,
 per triplicis vultus arcanaque sacra Dianae,
 et si forte aliquos gens habet ista deos, 80
 o virgo, miserere mei, miserere meorum;
 effice me meritis tempus in omne tuum.
 quodsi forte virum non dedignare Pelasgum—
 sed mihi tam faciles unde meosque deos?—
 spiritus ante meus tenues vanescet in auras 85
 quam thalamo nisi tu nupta sit ulla meo!
 conscia sit Iuno sacris praefecta maritis
 et dea marmorea cuius in aede sumus!”
 haec animum —et quota pars haec sunt?— movere puellae
 simplicis, et dextrae dextera iuncta meae. 90
 vidi etiam lacrimas —an pars est fraudis in illis?
 sic cito sum verbis capta puella tuis.
 iungis et aripedes inadusto corpore tauros
 et solidam iusso vomere findis humum.
 arva venenatis pro semine dentibus imples, 95
 nascitur et gladios scutaque miles habet.
 ipsa ego, quae dederam medicamina, pallida sedi,
 cum vidi subitos arma tenere viros,
 donec terrigenae, facinus mirabile, fratres
 inter se strictas conservare manus. 100
 insopor ecce vigil squamis crepitantibus horrens
 sibilat et torto pectore verrit humum.
 dotis opes ubi erant? ubi erat tibi regia coniunx,
 quique maris gemini distinet Isthmos aquas?
 illa ego, quae tibi sum nunc denique barbara facta, 105
 nunc tibi sum pauper, nunc tibi visa nocens,

あなたは思い出せますか。それとも私と一緒にこの場所も忘れられてしまいましたか。ここに私たちは来ました。

そしてあなたが先に、不実な口で次のように語り出しました。

「私を救うかどうかの権限と裁量を、運命はあなたに与えました。

私が生きるか死ぬかは、あなたの手の中にあります。

力そのものを喜ぶ者にとっては、滅ぼす力があるのは十分なことです、 75

しかし私が救われれば、私はあなたにとってもっと大きな栄光となるでしょう。

私たちの受ける災厄にかけて——その災厄をあなたは緩和することができるのです——

またあなたの血統と全てを見そなわすあなたの祖父の神意にかけて、

また3つの顔を持つ女神²⁵とディーナの秘儀にかけて、

そしてもしあなたの血統に他の神々がいるのならその神々にもかけて、 80

ああ乙女よ、私を憐れんでください。私たちの仲間を憐れんでください。

その恩義によって私を永遠にあなたのものにしてください。

もしもギリシア人の夫を持つことを拒絶なさらないならば——

——しかしどうして神々がそれほど私に好意的で都合良いと望めよう——

私の寝床にあなた以外の花嫁が誰か迎えられることがあるならば、その前に 85

私の魂はか細い風へと消え去ってしまいますように。

婚礼の祭儀を司るユーノー²⁶が立会人となりましょう。

私たちが今いる大理石の神殿の女神もまた立会人となりましょう。」

このような言葉が——この言葉のどれほどの部分が今残っているのでしょうか——

純朴な小娘の心を動かししました。そしてあなたの右手は私の右手に結びあわされたのです。 90

私は涙さえ見ました——それとも、その涙にも欺きの一部があったのでしょうか。

小娘だった私は、そのように速やかにあなたの言葉に捕えられたのです。

あなたは体を焼かれることなく青銅の足を持つ牡牛どもを繋ぎ合わせ、

命じられた犁で固い大地を分割しました。

耕された土地をあなたは種の代わりに毒を持つ牙で一杯にすると、 95

剣と楯を持つ兵士の一隊が生まれました。

私は自分が秘薬を授けていたにもかかわらず、突然現れた男たちが武具を

手にしているのを見た時、青ざめて座り込みました。

しかし結局、大地から生まれた兄弟たちは、驚くべき出来事ながらも、

互いの間で切り結び合って果てました。 100

さあ、ガラガラと鳴る鱗で恐ろしい、眠ることのない不寝番が、

シュウシュウと音を発し、胴体をくねらせて大地を這っていました。

あの時どこに婚資という財産があったのでしょうか。どこにあなたに嫁ぐ王女がいたのでしょうか。

どこに対をなす海の水を分け隔てるイストゥモス²⁷があったのでしょうか。

この私は、結局今や、あなたにとって蛮族の女となり下がり、 105

今やあなたにとっては貧しい女、今やあなたにとっては仇なす女とされていますが、

flammea subduxi medicato lumina somno
 et tibi, quae raperes, vellera tuta dedi.
 proditus est genitor, regnum patriamque reliqui;
 munus in exilio quod licet esse tuli. 110
 virginitas facta est peregrini praeda latronis;
 optima cum cara matre relictas soror.
 At non te fugiens sine me, germane, reliqui!
 deficit hoc uno littera nostra loco.
 quod facere ausa mea est, non audet scribere dextra; 115
 sic ego, sed tecum, dilaceranda fui!
 nec tamen extimui —quid enim post illa timerem?—
 credere me pelago, femina iamque nocens.
 numen ubi est? ubi di? meritas subeamus in alto,
 tu fraudis poenas, credulitatis ego! 120
 Compressos utinam Symplegades elisissent,
 nostraque adhaerent ossibus ossa tuis;
 aut nos Scylla rapax canibus misset edendos
 —debuit ingratas Scylla nocere viris;
 quaeque vomit totidem fluctus totidemque resorbet, 125
 nos quoque Trinacriae subposuisset aquae!
 sospes ad Haemonias victorque reverteris urbes;
 ponitur ad patrios aurea lana deos.
 Quid referam Peliae natas pietate nocentes
 caesaque virginea membra paterna manu? 130
 ut culpent alii, tibi me laudare necesse est,
 pro quo sum totiens esse coacta nocens.
 ausus es —o! iusto desunt sua verba dolori—
 ausus es “Aesonia” dicere “cede domo!”
 iussa domo cessi natis comitata duobus 135
 et, qui me sequitur semper, amore tui.
 ut subito nostras Hymen cantatus ad aures
 venit, et accenso lampades igne micant,
 tibiaque effundit socialia carmina vobis,
 at mihi funerea flebiliora tuba, 140
 pertimui, nec adhuc tantum scelus esse putabam;
 sed tamen in toto pectore frigus erat.

あの時私は、炎のように輝く竜の眼光を魔術による眠りで奪い、
そしてあなたに無事金羊毛皮²⁸を渡し、持ち去れるようにしたのです。
私は父を裏切り、祖国の王国を後にしました。
追放においては何であれ贈り物として受け入れました。 110
私の純潔は、異国の盗賊²⁹の略奪品となってしまう、
大切な母³⁰と立派な姉は、後に残されました。
しかし、弟³¹よ、お前は、私が逃げる際に後に残して私と離れ離れになったというわけではありません。
このことひとつが、私の手紙には書かれていないのです。
私の右手は、思い切って手がけたことを、思い切って記そうとしないのです。 115
そのように私も、しかしお前と一緒に、引き裂かれるべきでした。
けれども私は——あのようなことの後で一体何を私は恐れるというのでしょうか——
もはや罪人の女として、その身を海に委ねることを強く恐れはしませんでした。
神意はどこにあるのでしょうか。神々はどこにおられるのでしょうか。私たちは海で相応の罰を受けましょう、
あなたは欺きへの、私は軽信への。 120
シュンプレーガデス³²が私たちを打ち砕いて押しつぶせばよかったのです。
私の骨もあなたの骨と結びつきあっていることでしょ。
あるいは食欲なスキュッラ³³が私たちを放り込んで犬に喰らわせればよかったのです。
——スキュッラは恩知らずの男を害しなければならなかったのですから。
同じだけの波を吐き出し、同じだけの波を再び飲み込むカリュブデイス³⁴が、 125
私たちもトリーナクリアの海³⁵の下に沈めればよかったのです。
しかしあなたは無事、勝利者としてテッサリアの都³⁶に帰還しました。
金羊毛皮は父祖伝来の神々へ捧げられました。
どうして語りましょうか、孝心の結果に罪を犯し、
乙女の手によって父親ペリアース³⁷の四肢を切り落とした娘たち³⁸のことを。 130
他の者たちが非難しようとも、あなたには私を褒めたたえる必要があります。
あなたのために私は何度も罪を犯すことを強いられたのですから。
なのにあなたは図々しくも——ああ、この当然起こる苦しみにもふさわしい言葉などありません——
あなたは図々しくも、「このアイソーンの血筋の家から立ち退け」と言ったのです。
命じられた私は家から立ち去りました——二人の子供³⁹と、 135
これまでずっと私に付き従ってきたあなたへの愛を連れて。
突然、祝婚歌の歌声が私たちの耳に届き、
松明が点火されて輝き、
笛が音曲を発すると——それはあなたたちにとっては婚姻の曲であっても
私にとっては葬儀のラッパよりも悲しげな曲でした——、 140
私はひどい恐怖にとらわれました。それまでこれほどの悪行があるとは思っていませんでした。
しかし、わたしの胸全体に悪寒がありました。

turba ruunt et “Hymen” clamant “Hymenaeae!” frequenter—
 quo propior vox haec, hoc mihi peius erat.
 diversi flebant servi lacrimasque tegebant— 145
 quis vellet tanti nuntius esse mali?
 me quoque, quidquid erat, potius nescire iuvabat;
 sed tamquam scirem, mens mea tristis erat,
 cum minor e pueris, iussus studione videndi,
 constitit ad geminae limina prima foris: 150
 hinc mihi “mater abi! pompam pater” inquit “Iason
 ducit et adiunctos aureus urget equos!”
 protinus abscissa planxi mea pectora veste,
 tuta nec a digitis ora fuere meis.
 ire animus mediae suadebat in agmina turbae 155
 sartaque compositis demere rapta comis;
 vix me continui, quin sic laniata capillos
 clamarem: “meus est!” iniceremque manus.
 laese pater, gaude! Colchi gaudete relict!
 inferias umbrae fratris habete mei! 160
 deseror, amissis regno patriaque domoque,
 coniuge, qui nobis omnia solus erat!
 serpentis igitur potui taurosque furentes,
 unum non potui perdomuisse virum;
 quaeque feros pepuli doctis medicatibus ignes, 165
 non valeo flammam effugere ipsa meas.
 ipsi me cantus herbaeque artesque relinquunt;
 nil dea, nil Hecates sacra potentis agunt.
 non mihi grata dies, noctes vigilantur amarae,
 et tener a misero pectore somnus abest. 170
 quae me non possum, potui sopire draconem:
 utilior cuivis quam mihi cura mea est.
 quos ego servavi, paelex amplectitur artus,
 et nostri fructus illa laboris habet.
 forsitan et, stultae dum te iactare maritae 175
 quaeris et iniustis auribus apta loqui,
 in faciem moresque meos nova crimina fingas:
 rideat et vitiis laeta sit illa meis!

群衆が押し寄せ、「ヒューメン、ヒュメナエウス⁴⁰よ」と繰り返し叫びます。

この声が近付けば近づくほど、私の苦しみはよりひどくなりました。

私の従者たちは顔を背けて泣き、涙を隠していました。

145

これほどの不幸を報告する者となるのを、誰が望むでしょうか。

事実がどうであれ、知らないでいる方が私にとっても助かりました。

しかしちょうど知っているかのように、私の心は悲しくなりました。

それは年下の方が子が見たいという気持ちに動かされて、

両開き戸の敷居の端に立った時のことでした。

150

ここからこの子は私にこう言いました。「お母様、出ておいでよ。お父様が行列を

率いているよ。金色の服を着て、車に繋いだ馬たちを急かたてているよ」

すぐさま私は服を引き裂き、自分の胸を打ち叩きました。

顔も私の爪からは無傷でいらませんでした。

群衆の真ん中の隊列へと行くよう、整えられた髪から

155

花輪をもぎ取って奪うよう、心が仕向けていました。

そのように自分の髪を引き裂いて、「この人は私のものです」と叫び、

手を差し込もうとするのを、やっとのことで抑えました。

侮辱された父よ、喜びなさい。残されたコルキスの民たちよ、喜びなさい。

私の弟の亡霊よ、供物を受け取りなさい。

160

私は王家も祖国も家も失ったのに、

私にとって唯一で全てのものだった夫に捨てられたのです。

つまり、私は竜どもや荒れ狂う牡牛どもを服従させることができたのに、

夫一人を服従させることができなかったのです。

その私は、秘薬に通じることで猛る火を追い払いましたが、

165

自身は己の炎から逃れることができないのです。

呪歌と薬草と魔術すらも私を見捨てました。

女神も権能持つヘカテー⁴¹の秘儀も、何も役にたちません。

私にとって昼は有難くもなく、夜は目が冴えたままで辛く、

優しい眠りも惨めな胸から去ったままです。

170

私は自分を眠らせることはできないのに、竜を眠らせることはできました。

私が配慮することは、誰にとっても、私にとってよりは役立つのです。

その体を救ったのは私なのに、抱いているのは妾の女⁴²です。

彼女は私の労苦の成果を我がものとしているのです。

おそらくあなたは、愚かな結婚相手に己を誇示して、

175

不当な耳に相応しいことを語ろうとするとき、

私の顔と性格にありもしない過失をでっちあげていることでしょう。

彼女を笑わせておきなさい、私の欠点に喜ばせておきなさい。

rideat et Tyrio iaceat sublimis in ostro—
 flebit et ardores vincet adusta meos! 180
 dum ferrum flammaeque aderunt sucusque veneni,
 hostis Medae nullus inultus erit.
 Quod si forte preces praecordia ferrea tangunt,
 nunc animis audi verba minora meis!
 tam tibi sum supplex, quam tu mihi saepe fuisti, 185
 nec moror ante tuos procubuisse pedes.
 si tibi sum vilis, communis respice natos:
 saeviet in partus dira noverca meos.
 et nimium similes tibi sunt, et imagine tangor,
 et quotiens video, lumina nostra madent. 190
 per superos oro, per avitae lumina flammae,
 per meritum et natos, pignora nostra, duos,
 redde torum, pro quo tot res insana reliqui;
 adde fidem dictis auxiliumque refer!
 non ego te imploro contra taurosque virosque, 195
 utque tua serpens victa quiescat ope;
 te peto, quem merui, quem nobis ipse dedisti,
 cum quo sum pariter facta parente parens.
 Dos ubi sit, quaeris? campo numeravimus illo,
 qui tibi laturo vellus arandus erat. 200
 aureus ille aries villo spectabilis alto
 dos mea, quam, dicam si tibi “redde”, neges.
 dos mea tu sospes, dos est mea Graia iuventus;
 i nunc, Sisyphias, improbe, confer opes!
 quod vivis, quod habes nuptam socerumque potentis, 205
 hoc ipsum, ingratus quod potes esse, meum est.
 quos equidem actutum —sed quid praedicere poenam
 attinet? ingentis parturit ira minas.
 quo feret ira, sequar! facti fortasse pigebit;
 et piget infido consuluisse viro. 210
 viderit ista deus, qui nunc mea pectora versat!
 nescio quid certe mens mea maius agit.

笑わせておきなさい、そして高らかにテュロスの緋色の着物⁴³に横たわらせておきなさい——。

彼女は泣き、焼かれて私の火熱を凌駕することでしょう⁴⁴。

180

剣と炎と毒薬が手許にある限り、

メーディアの敵は誰も復讐を受けずに済むことはないのです。

しかしもしひょっとして懇願が鉄の胸を打つならば、

今この私の心にとって小さすぎる声を聞いてください。

あなたがしばしば私に嘆願したのと同じように⁴⁵、私はあなたに嘆願しております。

185

私はあなたの足元にひざまずくのもためらいません。

私があなたにとって価値がなくとも、血を分けた息子たちを気遣ってください。

酷い継母⁴⁶が私の産んだ子供たちに辛くあたるでしょうから。

そして子供たちはあまりにもあなたに似ており、その姿に私は打たれます。

目にする度に私の両眼は涙に濡れるのです。

190

天上の神々にかけて、祖父ソール⁴⁷の光の輝きにかけて、

私の功績と私たちの愛の証たる二人の息子たちにかけて、お願いします、

私を妻に戻してください。そのために狂おしくもあれほど多くのものを捨て去ったのですから。

言葉に信義を加えてください。救いをもたらしてください。

私があなたにお願いしているのは、牡牛どもや戦士たちに相対することではありませんし、

195

あなたの助けで竜を眠らせて打ち負かすことでもありません。

私はあなたを求めているのです。私がかち得た、あなた自身が私に与えてくれた、

二人で共に親となった、あなたを。

婚資はどこかと尋ねますか。あの平野に私は数えたではありませんか。

金羊毛皮を持ち去ろうとするあなたが耕さなければならなかったあの平野です。

200

深い毛並みで人目をひく、かの黄金の牡羊も

私の婚資です。それをあなたに「返してください」と言っても、あなたは断るでしょうけど。

あなたが無事だったこともわたしの婚資ですし、ギリシアの若者たちも私の婚資です。

さあ、恥知らずな方よ、シーシュポス⁴⁸の財産と比べてごらんなさい。

あなたが生きていることも、権勢ある家の花嫁と舅を得ていることも、

205

またあなたが恩知らずでいられることすらも、私のおかげなのです。

確かに彼らをすぐにでも——しかし罰を前もって言っても何になるでしょう。

この怒りは大いなる脅威を孕んでいます。

怒りが導く所へ私は付き従いましょう。おそらく私は自分の行いを後悔することになるでしょう。

しかし今後悔しているのは不実な夫を助けたことです。

210

いま私の胸をかき回している神⁴⁹がその行いを見そなわしますように。

私の心は確かに、何か知らない、いつそう大きなことを計り巡らしているのです。

- ¹ メーデシアは、黒海東岸の王国コルキスの王アイエーテースの娘であった。
- ² 運命の三女神モイラたちのこと。ラケシス、クロトー、アトロポスの三姉妹からなる。人生を司る「運命の糸」を、ラケシスが割り当て、クロトーが紡ぎ、アトロポスが断ち切る。
- ³ アルゴー船のこと。アルゴー船は、イオールコス近くの有名な山ペーリオン山の木を切り出してつくられた。
- ⁴ 黄金の羊。この羊の毛皮を、イオールコス王ペリアースはイアーソーンにコルキスまで取ってくるよう命じた。かつてこの羊に乗ってコルキスまで行ったのがプリクソスである。彼はボイオーティア王アタマースと王妃ネペレーの息子であったが、アタマースが新妻イーノー（カドモスの娘）を迎え、このイーノーが謀ってプリクソスとその妹ヘッレーを殺そうとした。そこで母ネペレーがヘルメースから授かっていた黄金の羊（これはトラキア王ピサルテースの娘テオパネーがポセイドーンと、共に羊に変身して交わった時に、産まれた牡牛である）にプリクソスとヘッレーを乗せて逃がした。ヘッレーは海上で落ちて溺れてしまった（その海はヘッレスポントスと名付けられた）が、プリクソスはコルキスに辿りつき、アイエーテースに迎え入れられ、羊を神に捧げその黄金の毛皮をアイエーテースに献上した。
- ⁵ イオールコスは広くはテッサリア地方に含まれるが、イオールコスを含むエーゲ海岸沿いは特にマグネシアと呼ばれる。
- ⁶ アルゴー船は、建造者アルゴスの名から名づけられた。なお、後述するプリクソスの子アルゴスとは別人。
- ⁷ コルキスを流れる大河。コーカサス山脈に源を発し、黒海に注ぐ。
- ⁸ イアーソーンのこと。
- ⁹ アイエーテースがイアーソーンに課した第一の試練。大きく凶暴で、青銅の足を持ち、火を吐く二頭の牡牛をアイエーテースは飼っていた。これはヘーパイストス（＝ウルカーヌス）から授けられたものであるともいう。この牡牛どもを軛につなぎ畑を耕すことをイアーソーンは命じられたが、彼はメーデシアの助力を得て火を防ぐ薬を体に塗ってもらい、それにより牡牛の吐く火をものともせず、無事にこの試練を果たした。
- ¹⁰ アイエーテースがイアーソーンに課した第二の試練。この種とは、かつてカドモスがテーバイとなる地で倒した竜の歯のことである。カドモスはこの歯を大地に撒いて、その大地から生まれた者たち（＝スパルタイ）をテーバイの民にした。この竜の歯の残りをアイエーテースは女神アテーナー（＝ミネルヴァ）から授けられていた。この歯の撒かれた大地から生え出る人間は武装しており、歯を撒いた者に対して攻撃するようになっていた。イアーソーンが牡牛によって耕した畑にこの歯を撒くと武装した人間たちが生え出たが、彼はメーデシアの助言に基づいて、生え出た者たちの間に岩を投げて、同士討ちを起こさせて彼らを倒した。
- ¹¹ コリントス王女クレウーサのこと。グラウケーと呼ばれることもある。
- ¹² コリントス王クレオーンのこと。この名前自体は埋め草的なものである。エウリーピデース『メーデシア』では、イアーソーンはメーデシアに離縁と再婚の理由に「裕福な暮らしがしたいため」ということを挙げている（559-565）。
- ¹³ コルキス王アイエーテース。
- ¹⁴ コリントスの古名。アイオロスの子シーシュポスがコリントスを創建した時はこの名前であった。
- ¹⁵ すなわち、黒海東岸から東に広がる地域の大部分ということ。
- ¹⁶ アポローニオス『アルゴナウティカ』3.299-301 では簡潔に歓待の様子が描かれている。『アルゴナウティカ』では、アイエーテースとの謁見に際してイアーソーンはテラモーンとアウゲイアースを引き連れている。
- ¹⁷ マルスは軍神アレースのローマ名。ここではこの牡牛の所有者であるとされている。
- ¹⁸ 金羊毛皮を守る不眠の竜のこと。アイエーテース自身は竜を倒すことを試練として課していないが、金羊毛皮を得るにはこの竜をどうにかしてやり過ごす必要があった。またアイエーテースは試練を果たしたイアーソーンに金羊毛皮を渡そうとせず、彼を亡き者にしようと計画していた。そこで先の二つの試練を果たした後、イアーソーンはメーデシアの魔術でこの不眠の竜を眠らせて金羊毛皮を手に入れ、コルキスを脱出した。
- ¹⁹ コリントスのこと。

²⁰ メーデアイの姉カルキオペー。ギリシアから黄金の羊に乗ってやってきたプリクソスと結婚し、4人の息子を儲けていた。

²¹ アルゴー船一行のこと。彼らがこう呼ばれるのは、諸説あるが、イアーソーンの母方の祖母クリュメネーが、オルコメノス王ミニュアースの娘であることからであると考えられる。

²² カルキオペーの息子たち(アルゴス、メラース、プロンティス、キュティッソーロス)は、父プリクソスの死後、祖父アタマースの財産を得るためにボイオーティアのオルコメノスを目指して航海していたところを難破し、アルゴー船一行に助けられた。そしてコルクスまでイアーソーン達を案内したが、そのためアイエーテースの怒りを買って追放を言い渡された。それゆえカルキオペーは、息子たちを安全にギリシア本土まで連れて行ってもらうのをアルゴー船一行に求めた。そしてそれには、メーデアイがイアーソーンたちに課せられた試練を手助けする必要があった。

²³ 処女神であり狩猟の女神でもあるアルテミスのローマ名。

²⁴ すなわち、コルクス人たちのこと。ギリシア人と比してこのように呼んでいる。

²⁵ 女神ヘカテーのこと。メーデアイにとっては叔父ペルセースの子であり従姉妹でもある。富や勝利・豊饒など、あらゆる面での幸を与える女神であったが、後に冥界の神と関連付けられ、呪法・魔術を司る神とされた。しばしば三叉の辻道に、三面三体の像がそれぞれの道の方向を向く形で建てられた。また夜の女神として、アルテミスやセレーネーと同一視もされる。

²⁶ 女神ヘーラーのローマ名。ヘーラー(=ユーノー)は結婚を司る女神でもある。

²⁷ ペロポネーソス半島とアッティカ地方を繋ぐコリントス地峡のこと。コリントスはこの地峡の端のペロポネーソス半島側にある。

²⁸ 注 4、注 18 参照。

²⁹ すなわち、イアーソーンのこと。

³⁰ イデュイアもしくはエウリュリュテー。

³¹ アプシュルトス。メーデアイは弟アプシュルトスを連れて共にアルゴー船に乗りコルクスを脱出した。しかしコルクス側の追手の船が近づいてきた際に、メーデアイは弟アプシュルトスを殺してバラバラにし海に捨て、コルクス人たちがその遺体を拾い集めている間に逃げるという行動をとった。アプシュルトスに関してはこちらの話がよく知られており、『名高き女たちの手紙』第 12 歌ではアプシュルトスに関してはこの話が採用されているが、一方アポロニオス『アルゴナウティカ』でアプシュルトスはメーデアイの兄であり、アイエーテースの命に従いイアーソーン一行を追うが、メーデアイに謀られてイアーソーンによって殺される(4.452-481)。

³² 「打ち合う岩」を意味する、ボスポロス海峡の出口にあったとされる二つの巨岩。その間を通ろうとする船があれば、岩が両側から迫って船を押しつぶし、そしてその後元の位置に岩は戻る。コルクスへ向かうイアーソーン一行は、まず巨岩の間に鳩を飛ばせて行かせ、鳩が無事岩の間を抜けて岩が閉じきり、そして再び開きだすと同時に岩の間を通り抜けた。

³³ 海の大渦カリュブデイスの対岸に棲む怪物。その姿にはバリエーションがあるが、ここでは、顔と胸は人間の女で、その腹から 6 頭の犬の頭と 12 本の犬の足が生えているという姿のものである。もとは美しい女性であったが、嫉妬するキルケーに変身させられた。一方、スキュッラは、メガラ王ニーソスの娘でクレタ王ミーノースに恋したスキュッラとも混同される。彼女はミーノースのメガラ侵攻に際して彼に恋し、父ニーソスを裏切ってミーノースを助けるが、ミーノースに拒絶され溺死するところで鳥に変身した。ここではそのスキュッラが怪物スキュッラとなったと混同されている。

³⁴ 大渦を擬人化した怪物。イタリアとシケリア島の間のメッシナ海峡に住むと。一日に三度、海水ごと周囲のあらゆるものを飲み込み、三度それを吐き出して、傍を通過する船を難破させる。

³⁵ シケリア島付近の島であるとされる。太陽神ヘーリオス(=ソール)の牛が放牧され、この付近の海にカリュブデイスとスキュッラがいた。なお、アルゴー船一行は、帰路に際し、船員の一人ペーレウスの妻テティスの助けを得て、カリュブデイスもスキュッラも避けることができた(アポロニオス『アルゴナウティカ』4.920ff.)。

³⁶ イオールコスのこと。

³⁷ イアーソーンの叔父であり、イオールコス王。イアーソーンの父アイソーンとの王権問題についてのいさかいで、イアーソーンに金羊毛皮を取ってくるよう命じた。イアーソーンがイオールコスに帰還する前に、イアーソーンの両親を殺したという伝承もある。オウィディウス『変身物語』7.159ff.では、イアーソーン

帰還時に両親ともに生きており、老いた父アイソーンはメーディアによって若返らせられた。

³⁸ ペリアースの娘たちは、メーディアに「父を若返らせてやる」と唆され、魔術の手順のひとつであると信じて、ペリアースを殺してバラバラにし、窯でゆでた。アポロドーロス『ギリシア神話』によると、ペリアースの娘たちの名はペインディケー、ペロペイア、ヒッポトエー、アルケースティスである(1.9.10)。ただし、後にペライ王アドメーテスの妻になったアルケースティス一人は、このメーディアの謀りに加わらなかった(ディオドーロス『神代地誌』4.52.2)。

³⁹ イアソーンとメーディアの間の子供たちの名前は、メルメロスとペレース。

⁴⁰ 婚礼の式の際に叫ばれる習慣。この習慣から結婚の行列を導く神ヒュメナイオスという神格が考えだされた。

⁴¹ 注 25 参照。

⁴² コリントス王女クレウーサのこと。

⁴³ テュロスは地中海東岸のフェニキア人の都市であり、貝からとった紫色での染物が盛んであった。

⁴⁴ この表現は、背景となる物語展開への予備知識なしに読むならば、「クレウーサも自分と同様にイアソーンに裏切られて自分以上に嫉妬の炎に苦しめられることになる」ということを意図した表現であると解釈できるが、181-182 の表現とこの後の物語展開を考慮するなら、「メーディアがクレウーサを焼き殺す」ということを仄めかしていると解釈できる。

⁴⁵ 73-89 参照。

⁴⁶ コリントス王女クレウーサのこと。

⁴⁷ 太陽神ヘーリオスのローマ名。メーディアの父アイエーテースは、太陽神ヘーリオスの子であり、ヘーリオスはメーディアの祖父にあたる。エウリーピデース『メーディア』では、メーディアは自分の子供たちを殺した後、このヘーリオスから授かった竜車でコリントスを後にする(1317ff.)。

⁴⁸ コリントスの創建者。注 14 参照。シーシュポスの財産とはすなわちコリントス王家の財産のこと。

⁴⁹ この「神」がどの神格であるかは明瞭ではないが、「狂気(furor)」を神格化したものと解釈するのが妥当かと思われる。この furor「狂気」と関連する Furiae は、復讐の女神エリーニュエスのローマ名であり、エリーニュエスについては、エウリーピデース『メーディア』1260 でコロスがメーディアの子殺しに関連して言及している。

第 13 歌「ラーオダメイアからプローテシラーオスへの手紙」 対訳

第 13 歌「ラーオダメイアからプロテシラーオスへの手紙」背景

ラーオダメイアは、夫プロテシラーオスをトロイア戦争で最初に失った妻としてよく知られている。この手紙は、その夫プロテシラーオスに、戦に逸らぬよう強く求める手紙である。

ラーオダメイアは、テッサリアの都市イオールコスの王アカストスの娘として生まれた。このアカストスは、従兄弟イアーソーンが黒海東岸の科尔キスから連れ帰ってきた魔女メーデイアの策略によって先王ペリアースを殺されてから、イオールコス王位を継いで、イアーソーンたちを追放した人物である。またラーオダメイアの母の名前は明言されていないが、アカストスの妻としてアステュダメイアという女性が知られている。彼女は親族殺害により故国アイギナを追われてその罪の潔めのためにイオールコスを訪れたパーレウスに惚れ込み、誘惑したが断られ、アカストスに讒言したことでも知られている。ただしラーオダメイアの母は、アステュダメイアが伝承ではパーレウスに殺されることになっているため、その後アカストスが娶った女性との間に生まれたということも考えられる。

イオールコスの先王ペリアースが死去した時、同じテッサリアの都市ピュラケーの王イーピクロスがその際の葬礼競技で優勝している。このイーピクロスの息子プロテシラーオスがピュラケーの王位を継ぎ、アカストスの娘ラーオダメイアを妻に娶った。

さてプロテシラーオスはトロイア戦争に参加することになるが、ギリシア人たちの間で「トロイアの浜辺に最初に上陸した者は死ぬことになる」という予言が下されており、プロテシラーオスはこの予言の通りにギリシア軍中最初にトロイアに上陸し、殺されてしまう。彼を殺した人物については諸説あるが、ヘクトールであるとするのが一般的である。

プロテシラーオスの死後、ラーオダメイアは幽霊となって戻って来た彼と交わったとも、彼の像を造りそれを慈しんだとも伝えられている。これについては諸伝承があるが、概ねこの二点については一致している。ここでヒュギーヌス『神話物語集』の記述に従うなら次の通りになる。夫の死を伝え聞いたラーオダメイアは、神々の憐れみを受けて、ヘルメースによって冥界から連れ戻されたプロテシラーオスと 3 時間だけ語り合うのを許される。そして彼が再び冥界に行ってしまうと、彼女は離別の苦しみを癒すため、夫に似せた像をつくらせた。そして儀式を執り行うふりをして寝室に置き、密かにその像を夫であるかのように情交を重ねていた。そしてそのことが明るみになると、彼女の父アカストスは娘をこれ以上苦しませないようにと考えて、その像を焼かせてしまった。しかしラーオダメイアはその像を焼く炎の中に身を投じて死んだ。

このプロテシラーオスとラーオダメイアの物語は、エウリーピデースが悲劇『プロテシラーオス』で扱っているが、これは散逸して引用断片が残るのみである（断片番号 646a-657）。ラテン文学ではカトゥッルス（第 68 歌）やプロペルティウス（第 1 巻第 19 歌）が両者の物語について言及している。またピロストラトス『ヘーロイコス』では、その後、

冥界で二人が仲睦まじく暮らしていることが簡潔に言及されている。

本手紙は、プローテシラーオスはまだトロイアに着いておらずアウリスに留まっているとして書かれたものである一方、彼女は夢で青ざめた姿のプローテシラーオスを見ていると言及されるので、この手紙の執筆時点ではプローテシラーオスが既に死んでいるとも受け取ることができる。しかし、手紙という形式上、ラーオダメイアの視点でしか状況は把握できないので、この時点のプローテシラーオスの生死については結局曖昧なままとなっている。

XIII. LAODAMIA PROTESILAO

Mittit —et optat amans quo mittitur ire— salutem
Haemonis Haemonio Laodamia viro.
Aulide te fama est vento retinente morari;
at me cum fugeres, hic ubi ventus erat?
tum freta debuerant vestris obsistere remis; 5
illud erat saevis utile tempus aquis.
oscula plura viro mandataque plura dedissem,
et sunt quae volui dicere multa tibi.
raptus es hinc praeceps, et qui tua vela vocaret,
quem cuperent nautae, non ego, ventus erat. 10
ventus erat nautis aptus, non aptus amanti;
solvor ab amplexu, Protesilae, tuo,
linguaque mandantis verba imperfecta reliquit;
vix illud potui dicere triste “vale.”
incubuit Boreas abreptaque vela tetendit, 15
iamque meus longe Protesilaus erat.
dum potui spectare virum, spectare iuvabat,
sumque tuos oculos usque secuta meis;
ut te non poteram, poteram tua vela videre,
vela diu vultus detinuere meos; 20
at postquam nec te nec vela fugacia vidi,
et quod spectarem nil nisi pontus erat,
lux quoque tecum abiit, tenebrisque exanguis obortis
succiduo dicor procubuisse genu.
vix socer Iphiclus, vix me grandaeuus Acastus, 25
vix mater gelida maesta refecit aqua;
officium fecere pium sed inutile nobis:
indignor miserae non licuisse mori.
ut rediit animus, pariter rediere dolores;
pectora legitimus casta momordit amor. 30
nec mihi pectendos cura est praebere capillos,
nec libet aurata corpora veste tegi.
ut quas pampinea tetigisse Bicorniger hasta
creditur, huc illuc, qua furor egit, eo.

第 13 歌「ラーオダメイアからプローテシラーオスへの手紙」

テッサリアのラーオダメイア¹が、テッサリアの夫²に健康を送ります。

送られるところへ届くよう、愛する心で願っています。

噂では、風が引き止めるせいであなたはアウリス³で留まっているとのこと。

しかしあなたが私のもとを去る時に、この風はどこにいたのでしょうか。

その時こそ海はあなたの船の櫂を邪魔するべきでした。

5

海が荒れ狂うのに都合が良かったのはまさにその時でした。

もっと沢山の口付けを、もっと沢山の忠告を、夫に与えることができたでしょうに。

そしてあなたに言いたかったことはたくさんあります。

この地からあなたはあっという間に連れ去られました。風があなたの船を

呼び寄せましたが、風を望んだのは水夫たちであり、私ではありません。

10

風は水夫たちには好ましくても、あなたを愛する私には好ましくありませんでした。

プローテシラーオスよ、私はあなたの抱擁から解かれ、

舌は忠告の言葉を最後まで言えないままにしまいました。

何とか言えたのは、悲しみに満ちた「お元気で」という言葉でした。

北風が襲いかかり、帆をつかみ取って張り上げると、

15

私のプローテシラーオスはもはや遠くにいました。

夫を見つめることができる間は、見つめることが喜びでした。

ずっとあなたの目を私の目で追いました。

あなたを見ることができなくなっても、あなたの船の帆を見ることはできました。

帆は長い間、私の眼差しを離さずにいました。

20

しかし、あなたも逃げ足の速い船も見えなくなり、

海以外に見えるものは何もなくなってからは、

光もあなたと共に去り、闇が目の前に現れ私は血の気を失い、

膝を崩して倒れてしまったそうです。

舅のイーピクロス⁴と、老齢のアカストス⁵と、

25

悲しみに暮れる母⁶が、冷たい水で私を何とか正気付けさせました。

母たちがしてくれたことは有難いことですが、私には甲斐のないことでした。

哀れな私に死ぬことが許されかったのは不当に思います。

意識が戻ると、同時に苦しみも戻ってきました。

正妻の愛が、貞淑な胸を苛んだのです。

30

私には髪を整えてもらう気も起きませんし、

黄金の衣装を身にまとうのも嬉しくありません。

二本の角持つバッコスが葡萄の蔓の巻き付いた笏杖で触れたと信じられている

女たち⁷のように、狂気が駆り立てる所へとあちこち私はさ迷います。

conveniunt matres Phylleides et mihi clamant: 35
 “indue regales, Laodamia, sinus!”
 scilicet ipsa geram saturatas murice vestes,
 bella sub Iliacis moenibus ille gerat?
 ipsa comas pectar, galea caput ille prematur?
 ipsa novas vestes, dura vir arma ferat? 40
 quo possum, squalore tuos imitata labores
 dicar, et haec belli tempora tristis agam.
 Dyspari Priamide, damno formose tuorum,
 tam sis hostis iners, quam malus hospes eras!
 aut te Taenariae faciem culpasse maritae, 45
 aut illi vellem displicuisse tuam!
 tu, qui pro rapta nimium, Menelae, laboras,
 ei mihi! quam multis flebilis ultor eris.
 di, precor, a nobis omen removete sinistrum,
 et sua det reduci vir meus arma Iovi. 50
 sed timeo, quotiens subiit miserabile bellum;
 more nivis lacrimae sole madentis eunt.
 Ilion et Tenedos Simoisque et Xanthus et Ide
 nomina sunt ipso paene timenda sono.
 nec rapere ausurus, nisi se defendere posset, 55
 hospes erat; vires noverat ille suas.
 venerat, ut fama est, multo spectabilis auro
 quique suo Phrygias corpore ferret opes,
 classe virisque potens, per quae fera bella geruntur—
 et sequitur regni pars quota quemque sui? 60
 his ego te victam, consors Ledaea gemellis,
 suspicor; haec Danaïs posse nocere puto.
 Hectora nescio quem timeo: Paris Hectora dixit
 ferrea sanguinea bella movere manu;
 Hectora, quisquis is est, si sum tibi cara, caveto: 65
 signatum memori pectore nomen habe.
 hunc ubi vitaris, alios vitare memento,
 et multos illic Hectoras esse puta;
 et facito dicas, quotiens pugnare parabis:
 “parcere me iussit Laodamia sibi.” 70

ピュッロスの夫人たち⁸が集まり、私にこう叫びます。 35

「ラーオダメシア様、王族らしい衣服を身につけてください。」

それでは、この私は紫で染められた服⁹を着るのですか、

夫はイーリオンの城壁の下で戦をするのに。

この私は髪を整えてもらうのですか、夫は頭を兜で押さえつけられるのに。

この私は新しい服を身につけるのですか、夫は固い武具を身につけるのに。 40

私は、汚れた服をまとしてあなたの労苦を模倣しているのだと言われて、

この戦の時を悲しく過ごすつもりです。これが私のできる限りのことなのです。

プリアモスの息子、呪われたパリス¹⁰よ、同胞たちの損害たる美しさの持ち主よ、

お前はろくでなしの客人だったのと同じぐらいに、無能な敵でありますように。

お前はスパルタ人妻¹¹の顔を非難するか、 45

あるいはお前の顔が彼女に気に入られなければよかったのにとします。

またメネラーオス¹²よ、あなたは奪われた妻のために骨を折るあまり、

ああ、あなたの復讐はどれほど多くの者たちの涙の原因となることでしょう。

神々よ、どうか私たちから不吉な予兆を取り払ってください。

そして私の夫が自らの武具を、帰還に導く神ユピテル¹³に捧げられますように。 50

しかし、私は悲惨な戦争が心に思い浮かぶ度にいつも恐怖します。

日差しで解けて滴る雪のように、涙が流れます。

イーリオン¹⁴もテネドス¹⁵も、シモイス川¹⁶やクサントス川¹⁷やイーダ山¹⁸も、

その名前を耳にするだけで、ほとんど恐怖が呼び起こされます。

あの客人は、もし自らを守ることができないならば、大胆にも略奪しようとは 55

しなかったでしょう。彼は自分の力を知っていたのです。

伝え聞く話では、彼がやって来た時は、ブリュギア¹⁹の富を

自らの体で運んでいるかのようにたっぶりの黄金で目立ち、

残忍な戦争の担い手たる艦隊と戦士たちによって権勢を奮っていたそうです。

一体彼の王権のどれほどの部分が彼につき従っているのでしょうか。 60

かの双子²⁰の妹、レーダーの娘²¹よ、お前はこれらによって籠絡されたのだと

私は疑っています。これらがギリシア人たちに害をもたらし得るのでしょうか。

誰かは知りませんが、ヘクトール²²という人を私は恐れています。パリスが言うには、

ヘクトールは血塗られた手で無情な戦を動かすということです。

もし私があなたにとって大切ならば、ヘクトールがどのような者であれ、 65

彼に気を付けてください。この名を胸に刻んでよく覚えておいてください。

彼を避けたとしても、他の敵どもを避けるのも忘れないでください。

かの地にヘクトールは大勢いるのだとお考えください。

そして、戦いの準備をするたびに、あなたは自らにこう言い聞かせてください。

「ラーオダメシアのことを大切にしよう私は言いつけられたのだ。」²³ 70

si cadere Argolico fas est sub milite Troiam,
 te quoque non ullum vulnus habente cadat!
 pugnet et adversos tendat Menelaus in hostis,
 ut rapiat Paridi quam Paris ante sibi.
 inruat et causa quem vicit, vincat et armis; 75
 hostibus e mediis nupta petenda viro est.
 causa tua est dispar: tu tantum vivere pugna,
 inque pios dominae posse redire sinus!
 parcite, Dardanidae, de tot, precor, hostibus uni,
 ne meus ex illo corpore sanguis eat! 80
 non est quem deceat nudo concurrere ferro,
 saevaue in oppositos pectora ferre viros;
 fortius ille potest multo, quam pugnat, amare:
 bella gerant alii, Protesilaus amet!
 nunc fateor: volui revocare, animusque ferebat; 85
 substitit auspicii lingua timore mali.
 cum foribus velles ad Troiam exire paternis,
 pes tuus offenso limine signa dedit.
 ut vidi, ingemui tacitoque in pectore dixi:
 “signa reversuri sint, precor, ista viri.” 90
 haec tibi nunc refero, ne sis animosus in armis;
 fac meus in ventos hic timor omnis eat.
 sors quoque nescioquem fato designat iniquo,
 qui primus Danaum Troada tangat humum.
 infelix, quae prima virum lugebit ademptum! 95
 di faciant, ne tu strenuus esse velis!
 inter mille rates tua sit millensima puppis,
 iamque fatigatas ultima verset aquas!
 hoc quoque praemoneo: de nave novissimus exi;
 non est, quo properes, terra paterna tibi. 100
 cum venies, remoque move veloque carinam
 inque tuo celerem litore siste gradum!
 sive latet Phoebus seu terris altior exstat,
 tu mihi luce dolor, tu mihi nocte venis;
 nocte tamen quam luce magis: nox grata puellis 105
 quarum suppositus colla lacertus habet.

もしトロイアがギリシア軍によって陥落する運命にあるにしても、
あなたが傷一つ負うことなく陥落しますように。

戦い、立ち足かかる敵どもに対して向かっていくのはメネラーオスでよいのです、
かつてパリスが自分から奪った女を、今度はパリスから奪い返すために。

彼は突撃し、武器で打ち負かすでしょう。彼を打ち負かすのは正当なのですから。 75
敵どもの真っ只中で、夫は妻を求めるべきです。

しかし、あなたの戦う大義は異なります。あなたはただ、生き延びるために、
そして貞淑な女主人の胸へ戻れるために、戦ってください。

トロイア人たちよ、これほど多くの敵の中から、ただ一人を容赦してください、
夫の体から私の血を流させないために。 80

夫は、抜き身の剣をもって戦を交えるのに、
敵対する相手に情け容赦なく胸をさらすのに、相応しい人ではないのです。

夫は戦うことにおいてよりも、愛することにおいてずっと強くなれるのです。

戦は他の者たちにさせ、プロテシラーオスには愛することをさせてください。

今私は告白します。私はあなたを呼び戻したいと思い、心はそう逸っていました。 85
しかし、それは凶兆になると恐れて、舌が思い止まったのです²⁴。

あなたがトロイアに向かって父祖の館の扉から出ようとした時、
あなたの足は敷居に躓きました。それは予兆ととれました。

私はそれを見た時、うめいて、黙って胸の中でこう言いました。

「どうかこれは、夫が戻ってこられることになっているという予兆でありますように。」 90

あなたが戦場で血気盛んにならないよう、このことを今あなたに伝えています。

このような私の恐怖は皆、風の中へ去るようにさせてください。

神託もまた、誰かは知りませんが、ギリシア勢のうちでトロイアの地を
最初に踏む者に対して、不当な運命を示しています。²⁵

夫を奪われて最初に嘆くことになる女は、何と不幸でしょう。 95
あなたが戦に熱心になろうとしないよう、神々が取り計らいますように。

千の船の間で、あなたの船は千番目になって、
とつくに航行し尽くされた海原を、最後に切り分けていきますように。

このことも前もって注意しておきます。船からは最後に降りてください。

その地は急いで帰るべきあなたの祖国の地ではないのですから。 100

でも帰って来る時は、櫂と帆で船を動かし、
その速い足取りを祖国の岸边で止めてください。

太陽が隠れている時も、地上より高くある時も、
あなたは私の苦しみとして昼も夜も心に浮かんでやって来ます。

でも昼よりも夜の方がずっと苦しみは大きいのです。首元を下から腕で 105
抱きしめてくれる相手がいる女たちにとっては、夜は喜ばしいものなのですから。

aucupor in lecto mendaces caelibe somnos;
 dum careo veris, gaudia falsa iuvant.
 sed tua cur nobis pallens occurrit imago?
 cur venit a verbis multa querela tuis? 110
 excutior somno simulacraque noctis adoro;
 nulla caret fumo Thessalis ara meo:
 tura damus lacrimamque super, qua sparsa relucet,
 ut solet adfuso surgere flamma mero.
 quando ego, te reducem cupidis amplexa lacertis, 115
 languida laetitia solvar ab ipsa mea?
 quando erit, ut lecto mecum bene iunctus in uno
 militiae referas splendida facta tuae?
 quae mihi dum referes, quamvis audire iuvabit,
 multa tamen rapies oscula, multa dabis: 120
 semper in his apte narrantia verba resistunt;
 promptior est dulci lingua referre mora.
 sed cum Troia subit, subeunt ventique fretumque,
 spes bona sollicito victa timore cadit.
 hoc quoque, quod venti prohibent exire carinas, 125
 me movet: invitis ire paratis aquis.
 quis velit in patriam vento prohibente reverti?
 a patria pelago vela vetante datis!
 ipse suam non praebet iter Neptunus ad urbem:
 quo ruitis? vestras quisque redite domos. 130
 quo ruitis, Danai? ventos audite vetantis:
 non subiti casus, numinis ista mora est.
 quid petitur tanto nisi turpis adultera bello?
 dum licet, Inachiae vertite vela rates!
 sed quid ago? revoco? revocaminis omen abesto, 135
 blandaque conpositas aura secundet aquas!
 Troasin invideo: quae si lacrimosa suorum
 funera conspicient nec procul hostis erit,
 ipsa suis manibus forti nova nupta marito
 imponet galeam Dardanaque arma dabit. 140
 arma dabit, dumque arma dabit, simul oscula sumet
 —hoc genus officii dulce duobus erit—

夫のいない寝床で、私は嘘つきの夢を得ようと求めます。

本当の喜びを欠きながらも、うわべだけの喜びが私を満足させるのですから。

でも、どうして私の前に現れるあなたの姿は青ざめているのでしょうか。

どうしてあなたの言葉からは長々とした悲嘆が出てくるのでしょうか。²⁶

110

私は夢から振り落とされ、夜の霊に祈ります。

テッサリアの祭壇で、私の捧げ物の煙を欠くものはひとつもありません。

お香を捧げその上に涙がこぼれると、振り撒かれた涙で炎は再び輝き出します。

ちょうど生酒が注がれるといつも炎が立ち上がるように。

いったいいつ私は、帰って来たあなたを待ち侘びた腕で抱きしめ、

115

喜びのあまり自ら力尽きるほどに疲れ果てるのでしょうか。

いったいいつなののでしょうか、あなたが私とひとつの寝床でびったりと結ばれ、

あなたの軍務の輝かしい功績を語ってくれるのは。

あなたがそれらのことを私に語る間、聞くこともきっと楽しいでしょうが、

でも口付けをたくさん奪い、またたくさん与えることでしょ。

120

巧みに物語るあなたの言葉はこのような妨げに絶えず止まりますが、

舌は甘美な途切れでより滑らかに語る事ができるのです。

しかしトロイアを思い浮かべ、風と海を思い浮かべる時、

不安な恐怖に前向きな希望は打ち負かされ倒れます。

風が船に出港を禁じているということも、私を不安にさせます。

125

海の意志に反してあなた方は航海の準備をしているのです。

風が禁じている時に、誰が祖国に帰ることを望むでしょうか。

あなた方は、海が禁じているのに、祖国から出帆しようとしているのです。

ネプトゥヌス²⁷自らが、自分の都トロイアへの海路を与えていないのです。

あなた方はどこへ急ぐのですか。各々が自分の家へと帰りなさい。

130

ギリシア人たちよ、どこへ急ぐのですか。風が禁じているのを聞きなさい。

その遅れは不意の偶然によるものではなく、神の意志によるものなのです。

それほど大きな戦によって、恥ずべき姦婦²⁸以外に一体何が求められるのですか。

許されているうちに、ギリシアの船々は帆の向きを変えなさい。

しかし私は何をしているのでしょうか。呼び戻しているのでしょうか。呼び戻しという

135

予兆は去ってください。愛想良い風が、海を助けて穏やかにしますように。

トロイアの女たちを私は羨みます。たとえ彼女たちは、大切な人の涙に満ちた葬儀を

目にする事になろうとも、敵が近くにしようとも、

まさに新婚の妻でさえ自らの手で勇敢な夫に

兜を被せ、トロイアの武具を渡せるでしょう。

140

武具を渡し、渡す間、それと同時に口付けを受け取るでしょう。

——この種の務めは、双方にとって甘美なものとなるでしょう——

producetque virum, dabit et mandata reverti
 et dicet: “referas ista fac arma Iovi!”
 ille ferens dominae mandata recentia secum 145
 pugnabit caute respicietque domum;
 exuet haec reduci clipeum galeamque resolvet
 excipietque suo corpora lassa sinu.
 nos sumus incertae, nos anxius omnia cogit,
 quae possunt fieri, facta putare timor. 150
 dum tamen arma geres diverso miles in orbe,
 quae referat vultus est mihi cera tuos:
 illi blanditias, illi tibi debita verba
 dicimus, amplexus accipit illa meos.
 crede mihi, plus est, quam quod videatur, imago: 155
 adde sonum cerae, Protesilaus erit.
 hanc specto teneoque sinu pro coniuge vero,
 et, tamquam possit verba referre, queror.
 per reditus corpusque tuum, mea numina, iuro,
 perque pares animi coniugiiue faces, 160
 perque —quod, ut videam canis albere capillis,
 intactum possis ipse referre— caput,
 me tibi venturam comitem, quocumque vocaris,
 sive —quod heu! timeo— sive superstes eris.
 ultima mandato claudetur epistula parvo: 165
 si tibi cura mei, sit tibi cura tui!

そして夫を送り出し、無事戻るよう忠告を与え、こう言うのです。

「この武具をユピテルに再び奉納できるようになさってください。」

夫の方は、受けたばかりの女主人の忠告を自らに携え、

145

用心深く戦い、家のことを顧みることでしょう。

夫が戻れば、妻は楯を外し兜を脱がせ、

疲れた体を自らの胸に迎え入れることでしょう。

一方私たちは、夫について知らされることは不確かで、不安にさせる恐怖が

起こりうるあらゆる出来事に思いを巡らすよう私たちに強います。

150

しかしあなたが遠く離れた地で軍人として武具を身につけている間は、

あなたの顔を思い起こさせる蠟の像²⁹が私の許にあります。

その蠟の像に私は甘い言葉やあなたに言うべき言葉を語ります。

蠟の像は私の抱擁を受け止めてくれます。

信じて下さい。その姿は、蠟の像だと思われる以上のものなのです。

155

蠟の像に声さえ加われば、まさにプロテシラーオスになるでしょう。

私はこの像を見つめ、本当の夫の代わりに胸に抱き、

そして、ちょうど言葉を返してくれるかのように、私は訴えかけるのです。

あなたの帰還と、私にとっては神に等しいあなたの体にかけて、

また私たちの魂と婚姻の一つがいの松明³⁰にかけて、

160

また、白髪で白くなるのを私が見られるように

あなた自身が無傷なまま再び見せてくれる頭にかけて、誓います。

あなたがどこへ呼ばれようとも、私はあなたのお伴として行きます。たとえあなたが

——ああ、それを私は恐れています——……としても、生還されるとしても。³¹

最後に短い忠告でこの手紙を閉じます。

165

もし私を気遣ってくれるなら、自らを気遣ってください。

- ¹ テッサリア地方イオールコスの王アカストスの娘。
- ² テッサリア地方ピュラケーの王プローテシラーオス。ラーオダメイアを娶る。なお、ラーオダメイアもプローテシラーオスも共にアイオロスの末裔である。
- ³ ボイオーティア地方東岸のエウボイア島と近接する都市。トロイア出征に向けてギリシア各地から軍が集結していた。この時ギリシア軍総大将アガ멤ノーンが女神アルテミスの怒りを買ったため風が止まり、ギリシア軍は出航できずにいた。このアウリスでの物語はエウリーピデース『アウリスのイーピゲネイア』で詳しく描かれている。
- ⁴ プローテシラーオスの父でありピュラケーの先王。
- ⁵ ペリアースの子。かつてメーデイアの謀略により父ペリアースが殺された時、イアーソーン共々メーデイアをイオールコスから追放し、イオールコス王となった。
- ⁶ アステュダメイア。かつてペーレウスが罪の清めを求めてイオールコスに来た際、彼に惚れこみ誘惑したことがある。ペーレウスに拒絶された彼女は夫アカストスにペーレウスを無実の罪で讒言した。後に彼女はイアーソーンやディオスクーロイと共にイオールコスに攻め入ったペーレウスに殺されたという伝承もある（アポロドーロス『ギリシア神話』3.13, 3-7）。
- ⁷ 酒神ディオニューソス（バックス）の女性信者たち。彼女たちはその祭儀において正気を失い、山野をさまよいながら野獣を捉えて八つ裂きにするなどの行為に及んだ。
- ⁸ ピュッロスはテッサリアの都市なので、ここではテッサリアの女性たちのことを示していると思われる。
- ⁹ フェニキア産の紫貝で染色されたものであり、王侯が身に付ける高級なもの。
- ¹⁰ トロイアの王子。スパルタ王メネラーオスの妻ヘレネーを連れ去り、トロイア戦争の原因を作った。
- ¹¹ ヘレネーのこと。
- ¹² スパルタ王。ギリシア軍総大将アガ멤ノーンの弟。
- ¹³ ギリシアの主神ユピテルには様々な権能がエピセツトとして添えられる。
- ¹⁴ トロイアのこと。
- ¹⁵ トロイア対岸の小島。ギリシア軍は木馬の計略の際に、この島付近に艦隊を停泊させていた。
- ¹⁶ トロイア地方を流れる大河スカマンドロス河（クサントス河）の有名な支流の一つ。
- ¹⁷ トロイア地方を流れる大河スカマンドロス河の別名。
- ¹⁸ トロイア近傍の山。ここでパリスはかつて牧人をしていた。
- ¹⁹ 小アジア中央部の国。トロイア戦争ではトロイアに援軍を送った。
- ²⁰ ディオスクーロイ、すなわちカストールとポリュデウケースのこと。彼らとヘレネーおよびクリュタイムネーストラはスパルタの先王テュンダレオースと王妃レーダーとの子であるが、ポリュデウケースとヘレネーはゼウスの種によるものとされる。
- ²¹ ヘレネーのこと。
- ²² トロイアの王子にしてトロイア軍最強の戦士。プローテシラーオスを倒すのは彼であるという伝承もある（アポロドーロス『ギリシア神話』E.3.30）
- ²³ すなわち、「プローテシラーオスが死ねばラーオダメイアも後を追って死ぬので、ラーオダメイアが死ぬという事態を避けたいならばプローテシラーオス自身の体を大切にせよ」ということ。
- ²⁴ 古代ギリシアでは、出発しようとする者を呼び戻そうとすることは、不吉であると考えられていた。
- ²⁵ ギリシア軍のうち、トロイアの地を最初に踏む者が最初に死ぬという神託が下されていた（ヒュギーヌス『神話集』103）。
- ²⁶ 夢に現れたプローテシラーオスの姿は、トロイアで討ち死にした姿であると考えられる。ここでラーオダメイアが見たのは、この時点で既にトロイアで死んでいるプローテシラーオスが霊となって彼女の前に現れた者であるということも想定することができるが、この手紙の文面だけでそれを断定することはできない。
- ²⁷ 海神ポセイドーンの別名。かつてポセイドーンはアポローンと共にトロイアの城壁を築いた。
- ²⁸ ヘレネーのこと。

²⁹ 一般的な伝承では、ラーオダメイアが夫プロテシラーオスの像を作らせて夫の代わりにしていたのは夫の死後のことであるが（アポロドーロス『ギリシア神話』E. 3. 30）、ここでは彼が生きている（と彼女が考えている）時点で既に作らせている。

³⁰ 婚礼の行列を導く松明のこと。

³¹ ここでラーオダメイアは、夫の死の想定を明文化することを避けている。

引用文獻一覽

- Austin, R. G., *P. Vergilii Maronis Aeneidos Liber Secundus*. Oxford 1964.
- Barchiesi, A., *Speaking Volumes: Narrative and Intertext in Ovid and Other Latin Poets*, London 2001.
- Barrett, W. S., *Euripides Hippolytos*. Oxford 1964.
- Bessone, F., *P. Ovidii Nasonis Heroidum Epistula XII: Medea Iasoni*. Firenze 1997.
- Bolton, M. C., In Defence of *Heroides* 9. *Mnemosyne*, 50 (1997), 424-435.
- Borthwick, E. K., Meleager's Lament: A note on *Anth. Pal.* 5.166, *CPh* 64 (1969), 173-5
- Casali, S., Strategies of tension (Ovid, *Heroides* 4). *Proceedings of the Cambridge Philological Society* 41(1995), 1-15. (1995a)
- Id., S., *P. Ovidii Nasonis Heroidum Epistula IX: Deianira Herculi*, Firenze 1995. (1995b)
- Courtney, E., Ovidian and Non-Ovidian *Heroides*. *Bulletin of the Institute of Classical Studies*, 12 (1965), 63-66.
- Davis, P. J., Rewriting Euripides: Ovid, *Heroides* 4. *Scholia* 4(1995) 41-55.
- Id., 'A simple girl?' *Medea* in Ovid *Heroides* 12. *Ramus* 41 (2012), 33-48.
- DeVito, A. F., The Essential Seriousness of *Heroides* 4. *Rheinisches Museum für Philologie* 137 (1994), 312-30.
- Fulkerson, L., (Un)sympathetic Magic: a Study of *Heroides* 13. *American Journal of Philology* 123 (2002), 61-88.
- Id., *The Ovidian Heroine as Author: Reading, Writing, and Community In The Heroides*. Cambridge 2005
- Id., The *Heroides*: Female Elegy? In *A Companion to Ovid*, ed. P. E. Knox, Blackwell 2009, 78-89.
- Gibson, R. K., *Ovid, Ars Amatoria Book 3*. Cambridge 2003.
- Giomini, R., Ancora sulla struttura retorica nelle *Heroides* ovidiane: l'epistola di Fedra a Ippolito. *Cultura e lingue classiche* 3 (1993), 347-358.
- Hardie, P., *Ovid's Poetics of Illusion*. Cambridge 2002.
- Hauptli, B.W., *Ovid: Liebesbriefe ; Heroides-epistulae*. Zürich 1995.
- Heidicke, E., *Studia Bentleiana. V. Ovidius Bentleianus*. Freienwald 1905.
- Heinze, T., *P. Ovidius Naso: Der XII Heroidenbrief : Medea an Jason mit einer Beilage die Fragmente der Tragödie Medea*. Leiden 1997.
- Hinds, S., *Medea* in Ovid: Scenes from the Life of an Intertextual Heroine. *Materiali e Discussioni* 30 (1993), 9-47.
- Hunt, J. M., Review: *P. Ovidii Nasonis "Epistulae Heroidum"* by Henricus Dörrie. *CP* 70. 3 (1975), 215-224.
- Jacobson, H., *Ovid's Heroides*. Princeton 1974.

- Jenkins, T. E., *Intercepted Letters. Epistolarity and Narrative in Greek and Roman Literature*. Lanham 2006.
- Jolivet, J. -C., *Allusion et fiction épistolaire dans les Héroïdes: Recherches sur l'intertextualité Ovidienne*, Paris-Rome 2001.
- Kennedy, D. F., The epistolarly mode and the first of Ovid's *Heroides*. *Classical Quarterly* 34(1984), 413-422.
- Id., Epistolarity: the *Heroides*. in *The Cambridge Companion to Ovid*, ed. P. Hardy, Cambridge, 2002, 217-232.
- Kenney, E. J., *Ovid Heroides: XVI-XXI*. Cambridge 1996
- Knox, P. E., *Ovid Heroides: select epistles*. Cambridge 1995
- Lexicon Iconographicum Mythologiae Classicae*. vol.5.2. Zürich 1990.
- Lindheim, S. H., *Mail and Female. Epistolary Narrative and Desire in Ovid's Heroides*. Madison 2003.
- Lyne, R. O. A. M., Love and Death: Laodamia and Protesilaus in Catullus, Propertius, and others, *CQ* 48 (1998), 200-212.
- Mastrorade, D. J., *Euripides Medea*. Cambridge 2002.
- Mckeown, J. C., *Ovid: Amores. Text, prolegomena and commentary. Vol. II: A commentary on Book One*, Leeds 1989.
- Mozley, J. H., *Ovid: The art of love and other poems*. Harvard, 1979² (rev. by G. P. Goold).
- Nanni, F., *P. Ovidii Nasonis Heroidum epistula IV, Phaedra Hippolyto, testo, traduzione e commento*. Ph. D. Diss. Univ. of Parma 2008.
- Palmer, A. P., *Ovid, Heroides*. new introduction and bibliography by D. F. Kennedy. 2 vols. Exeter 2005 (Oxford 1898, 1967).
- Pearson, C. S., Simile and imagery in Ovid *Heroides* 4 and 5. *Illinois Classical Studies* 5 (1980), 110-29.
- Ramírez de Verger, A., On Ovid, *Heroides* 4.175-6. *Mnemosyne* 58(2005), 429-31.
- Reeson, J., *Ovid Heroides 11, 13, and 14. A Commentary*. Leiden 2001.
- Reinach, S., *Répertoire de peintures grecques et romaines*. Editions Ernest Leroux 1922.
- Rosati, G., *Ovidio: Lettere di eroine*. Milan 2008⁵ (1st ed. 1989).
- Russel, D. A., *Greek Declamation*. Cambridge 1983.
- Sommerstein, A. H., F. David and T. Talbot, *Sophocles: selected fragmentary plays with introductions, translations and commentaries*. Oxford 2006.
- Shuckburgh, E. S., *Ovid: Heroides XIII*. London 1879, 1885².
- Verducci, F., *Ovid's toyshop of the heart: Epistulae Heroidum*. Princeton 1985
- Vessey, D. W. T. C., Note on Ovid, *Heroides* 9. *Classical Quarterly*, 63 (1969), 349-361.
- Wilkinson, L. P., *Ovid Recalled*. Cambridge, 1955.

- 内田次信「ヘラクレスの死」2011年度大阪大学大学院文学研究科共同研究成果報告書『神話表象のアレゴリズム研究——文学・哲学・レトリックに即して』2012, 1-7.
- 岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』創文社, 1988.
- 同（訳）『アポロニオス アルゴナウティカ ーアルゴ船物語』講談社文芸文庫, 1997.
- 高橋宏幸『ギリシア神話を学ぶ人のために』世界思想社, 2006.
- 同「オウィディウス『ヘーローイデス』第1、20、21 歌解釈試論」科学研究費補助金研究成果報告書『古典古代における書簡文学に関する研究』2007, 1-62.
- 同「文字、手紙、文学（シンポジウム 文字の力）」『西洋古典学研究』58 (2009), 102-110.
- 丹下和彦（訳）「エウリーピデース メーデイア」松平千秋他編『ギリシア悲劇全集 5』所収, 岩波書店, 1990.
- 松平千秋（訳）『エウリーピデース ヒッポリュトス』岩波文庫, 1959.
- 松本克己（訳）「オウィディウス 名婦の書簡」泉井久之助他（訳）『ローマ文学集』所収, 筑摩書房, 1966.